けものわーるど

Nyarlan

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

終末は回避されたのか？

――直径数百キロメートルの巨大隕石の到来

幾度となく試みられた破壊計画は尽く失敗し、人類、いや地球そのものの滅亡は避けられないかのように思われた

衝突の寸前、虹色の輝きを巻き散らしながら消滅した隕石がもたらしたものとは？

当作品は「けものフレンズ」の二次創作です。

一種一フレンズの縛りもなしに、隕石という形で宇宙から来たサンドスターの影響が

地球全体に及んだら？

そんな感じのＩＦです

※カクヨムにも掲載しています

目次

prologue　終末の日は猫と穏やかに過ごしたい ―― 1
隕石がもたらしたもの
第一話　黒衣の来訪者 ―― 8
第二話　ある忠犬 ―― 19
第三話　けものの距離感 1 ―― 35
第四話　けものの距離感 2 ―― 44
第五話　けものの価値観 1 ―― 59
第六話　けものの価値観 2 ―― 73
星野久遠の手記 1 ―― 85
変化した世界
第七話　違和感 ―― 90
第八話　純白からの招聘 ―― 103
第九話　視線 ―― 114
第十話　怪物 ―― 126
第十一話　届いた報せ ―― 141
第十二話　出発準備 ―― 154
星野久遠の手記 2 ―― 166
恩人を探して
第十三話　雷雨 1 ―― 174
第十四話　雷雨 2 ―― 190
第十五話　クーの冒険 ―― 208
第十六話　ヤタガラスの使者 ―― 225
第十七話　目覚め ―― 237

番外編

ハロウィン特別編　けものとヒトのハロウィン祭り　1 ―――― 254
ハロウィン特別編　けものとヒトのハロウィン祭り　2 ―――― 260
クリスマス特別編　聖夜の買い出しにて ―――― 272
クリスマス特別編　聖夜のおうちパーティ ―――― 282

prologue　終末の日は猫と穏やかに過ごしたい

――地球を掠める軌道をとるとされていた例の巨大隕石ですが、ＮＡＳＡによる再計算の結果、地球へと衝突する危険性が高いことが判明しました。

関係各所は現在……

はじめは、みんな冗談のように受け取っていた。僕もそうだ。

この手の大規模な危機感を煽るニュースのあと本当に地球がどうにかなった事などなかったからだ。

――件の巨大隕石を破壊する計画が各国の協力のもと進められております。

――隕石の破壊計画は明日より実行される見込みです。

その際に破片が地上へ降り注ぐことが懸念されており、各国では住民をシェルターへ受け入れる準備を……

しかし隕石に関する報道がより過密に、より具体的なものになった。

強い不安を抱えて日々を過ごす日々が続き……そして、不安は的中する事となる。

――第一計画の失敗を受け、世界に衝撃が走っています。

現在は第二計画の準備を行っているものの……

――人類が取れる計画は、今を持ってすべて失敗しました。
隕石は依然として地球へと進んでおり、衝突予想地点は太平洋の……
――衝突は■月■日午前2時22分頃とされており……
――肉眼での隕石観測は以下の地域で可能となっており……
……もはや世界は、隕石をどうこうする事を諦めてしまったらしい。
突如として地球へ進路を向けた隕石に対して、世界はあまりに準備不足であった。
やれる事は、全てやったのだろう。世界中から集結した超一流の人材、あらゆる枠を超えて提供された最先端の技術。まさに人種や思想をも超えた団結が実現していた。
しかし、それを十分に発揮する時間は残されていなかったのだ。
隕石の規模に対して余りにも無力なシェルターに一縷の希望を託す人、シェルターを利用する権利すら得られなかった人、諦めて死を受け入れた人、自棄を起こす人……反応は十人十色だ。
……かく言う僕は、最期の時を自宅のベランダで隕石見物をして過ごしていた。
「にゃーん」
不意に、肩に重みが加わった。ごろごろと喉を鳴らしながら体を擦り付けるそれを優しく撫でながら僕は小さくため息をつく。
「クー、危ないからいきなり飛びついてきたら駄目だってば」

「なーん」
真っ白な毛の塊は、金色の眼差しをこちらに向けてきた。
とっくに寝る時間なのにどうしたの？　なんて問いかけているようで、いつもと変わらないその様子に毒気を抜かれる。
……こんな時まで小事を言わなくてもいいか。僕はクーを肩から下ろすと、仰向けに抱き上げる。クーはこの体勢が大好きなのだ。
「見てごらん、キレイでしょ。まるで虹みたいだね」
「にゃ」
少し前から見え始めた隕石（それ）は、キラキラとした虹色の不思議な輝きを放っており、とてもこれから世界を殺し尽くすものだとは思えなかった。
夜空を照らし出す幻想的な輝きは不謹慎にも美しいとさえ思える。
「……そろそろ、かな？」
「にー？」
「これまでありがと、あの世か来世があったらよろしくね」
空に浮かぶ隕石（それ）は、一際強い輝きを放つと世界を虹色の光で染め上げた。
※※
「――あれ？」

たっぷり数分間は目を瞑っていた……どうやら、まだ僕は生きているらしい。それとも、意外とこれが死後の世界であるのかもしれない。

「いや、それはないか……」

目を開けて広がる光景は、先程と何ら変わらないものだった。

強いて違いを挙げるなら、この時間にしては明るい事、あの隕石にも似た虹色の光を放つ何かがキラキラと降り注いでいる事か。

……どうも、地球は滅ばなかったらしい。

衝突の直前に爆発した、とかかな？　いや、それでも無事では済むまい。なんて考えていた、そんなとき。

「すっごい光だったね、にーちゃ！」

「うん……うん？」

不意に、そんな興奮したような声が耳に飛び込んできた。半ば反射的に声の主を探して視線を下ろすと……。

そこには見慣れた毛玉（クー）の姿はなく――見慣れない金色少女の眼差しが僕に突き刺さっていた。

それは、真っ白な少女であった。ぱっちりと開いた金色の目は、穏やかな安心を湛えていて……そんな少女を、僕はいつの間にか抱きかかえていた。一体、どういう事なの

か。

「――あれぇ、もう下ろすの？　もーちょっとぉ……」

僕が無言のままそっと床に下ろすと、謎の少女は甘えた声とともに名残惜しそうな視線を投げかけてくる。それをあえて無視し。

「ええと……あの、ごめんなさい、どなたですか？」

じりじり、と後ずさりしながら尋ねる。

すると彼女は傷付いたような表情で目を見開き、猛然と縋り付いてきた。――ちょ、力強っ！

「やだっ、クーのこと忘れちゃったの!?」

「えっ、あ、そうだ、クーがいない」

目を白黒とさせていた僕だが、その言葉で抱いてたクーがいなくなった事を思い出す。

というか入れ替わりに何故かこの子を抱いていた。そもそもこの子は誰なんだろう。

「何言ってるのにーちゃ！　クーはわたしだよっ！」

「いや、僕が探してるのは猫（クー）で……えっ」

キョロキョロとさまよわせていた視線を戻してギョッとする。少女が泣いていた。

いや、それはそれで問題だけども、その頭に妙なものが見えたのだ。ぺったりと伏せ

られたそれは、猫の耳のように見える。
さらにその臀部からは白い尻尾が力なく垂れ下がっていた。真っ白な尻尾の先端を一周するような黒い輪、その特徴的な模様に、僕は見覚えがある。
「クー……なのか？」
伏せていた耳がピンと立ち、力なくうなだれていたしっぽがたちまちに天を指した。
「そうだよっ、わたしがクーだよ！　にーちゃ、わかる!?」
そうだ、この「にーちゃ」という呼び方も、恥ずかしながらクーと一人で戯れる時に僕が使っている一人称である。……猫と遊ぶ時に口調変わるのって普通だよね？
……ともかく、本物にしか見えない動きを見せる耳や尻尾も、真っ白な体に特徴的な尾を持つその姿も……誰も知らないと信じたい「にーちゃ」という呼び方も。
クーと入れ替わるように抱かれていたこの少女が、何かのミラクルによって姿を変えたクーであるという根拠が複数浮かんでしまった。……なんてこった。
「もうっ、びっくりしたよ！　さっきのアレのせいでクーのこと忘れちゃったかと思った……」
「うん、僕もびっくりした……だって、その、クーは猫のはずだし」
「ええ、クーは猫だよ？　……あれ？」
少し体を離すと、クー（仮）は自らの体をペタペタと確かめるように触ったり、手を

ニギニギ動かしたりと、不思議そうな表情をしている。
「あれ……なんでぇ？　クー、ニンゲンになってるー！」
「ああ――うん。なんでだろうね、というか、性別も変わってるね」
そう、理解が追いつかなかった最大の原因であるが。
……クーは、去勢済みとはいえ、歴としたオスであるのだ。
「ていうかにーちゃとお話できるようになってるー!!」
「それも今気づいたのね……」
とにかく、世界滅亡の危機から一転、奇妙な事態が起きているらしい。
しかし、この時僕は気づいていなかった。
この奇妙（愉快）な事態が、僕たちだけに起こっているのではないという事を。
それ以上に、世界が大混乱に陥っているという事を。

隕石がもたらしたもの
第一話　黒衣の来訪者

1日目　早朝

「カレーおいしーね！」

居間のテーブルには、不器用に握ったスプーンでカチャカチャと音を立てながらカレーを掬うクーの姿があった。

卵を投入し、ぐちゃぐちゃにかき混ぜられたレトルトカレー（甘口）はびっくりするほど食欲をそそられないが、彼女的には顔をベタベタにするほど大満足の味らしい。

真っ白だったノースリーブのシャツには茶色の染みが転々と散り、これまた白いスカートには小さなジャガイモが転がっている。

これはひどい。

「……カレーにしたのはまずかったかな」

「ええ、おいしーよ？」

「いや、そうじゃなくて……っあ、そういえばタマネギ……」

「……？」

劇的に茶色く染め上げられていく彼女の顔と服を見て失敗を悟っていたのだが、それ以上の問題を今更思い出して少し青ざめる。

人の姿をしているから素で忘れていたが、猫にタマネギは御法度である。

仮にクーの体質が猫そのものだとしても、今の姿が見た目通りならば体重的に問題は出ないはずではあるが……。

「……クー、食べ終わったら一応体重測ってみようか」

「うん？」

※※

人は自らの許容できる範囲を遥かに超えた出来事に直面すると逆に落ち着いてしまうという話を聞いたことがあるが、僕は今まさにそれを味わっているのだろう。

僕の貧弱な許容量は地球滅亡の危機を前にパンクしていたのか、クーが人の姿になると言うある意味隕石以上に奇妙奇天烈かつ摩訶不思議な事態に対し、自分でも驚くほど冷静でいられた。

取り乱してクーを不安がらせたりする事もなく普段通りに接する事ができたのは怪我の功名と言えるのかもしれない。

対するクーと言えば変化した体で僕に抱きついてみたり、延々と喋り続けてみたりと大興奮した様子。彼女が落ち着きを取り戻す頃にはすっかり空は白みはじめていた。

空腹を思い出したのか餌皿の前でそわそわし始めた彼女には悪いが、人間の少女が四つん這いで餌皿に顔を埋める姿は余りにも犯罪チックであるため、お気に入りのドライフードを注ぐわけにはいかない。

そういう事で本日からは人間的な食事を取ってもらう流れとなったのだが……初っ端からやらかした。

「うーん……まあ多分カレーひとパックくらいなら平気、かな？　でもしばらくカレーは無しで様子見な」

「えー！」

「えーじゃない」

手慣れた動作で毛づくろいをしていた彼女に（驚くべきことに、カレー染みが綺麗に消滅した）そう伝えるも、抗議の声を上げられてしまう。

今測った体重と身長からして見た目通りに中高生くらいの体格は持っているようだし、猫基準ならば多少のタマネギは平気だろう。

そもそも擬人化していれば大丈夫なのかもしれないが、万一倒れたらどこに担ぎ込めばいのか検討もつかない。

とりあえず二、三日は様子を見なければ。

「さて、僕はちょっと後片付けしてくるから適当にくつろいでてくれる？」

「うん、わかったー！」

手と尻尾をふりふりしながら答えるクーに気分を癒やされながら食器を台所へ運ぶ。

皿を水に浸けた所で、一杯になったごみ袋が並んでいるのが目に入る。

地球滅亡の危機が回避されたことでごみ収集車もそのうち動くことだろうし、急に来てもいいよう一応出しておこう。

平時なら今日はごみの日だし。

玄関を開けると、二度と拝めないと思っていた朝日が眩く輝いており、心なしかいつもより目に染みた。

スズメの鳴き声もどこかいつもより喧しく、日常の再開を祝福しているかのようだ。

時刻は午前五時半、ほんの一月ほど前ならば通勤者の姿も見え始めた時間だが、通りには誰の姿も見えない。

日本の企業戦士たちも星降りからの夜明け直後に出社はしないらしい。ここらの住人もシェルターへ押しかけたり田舎へ帰ったりで単純に住民があまり残っていないのが一番の理由ではあるが。

まあ、数日もすれば人々も戻るだろう。

「おっ」

人ではないが、来客があった。

家の前のごみ捨て場に目をやると、そこでは数羽のカラスが待機している。黒い瞳が、じっとこちらを伺っていた。

「……はいはい、分かってるよ」

ごみ袋をネットに詰め終えた僕がビニール袋を取り出すと、待ってましたとばかりにカラスたちがチョン、チョンと寄ってくる。

「ゴミは荒らさないでね」

そう言って袋の中身を我が家の敷地内へぶちまけると、カラスたちは目の前に飛び出したもの――パンの耳へと飛びついた。

……カラスは賢い鳥である。人の顔を判別し、恩も恨みも忘れない。

ゴミ用ネットをこじ開けて中身を引きずり出すことすらあるご近所カラスに僕が試した手は、賄賂であった。

意図を理解してもらえるよう試行錯誤は必要だったものの、今ではゴミを荒らさないどころか敷地内にはフンすらしない。賢い。

パンの耳を楽しむ姿を眺めていると、不意にカラス達が一斉に空を見上げた。

一体何が、とつられて空を見上げた瞬間、先程まで眩しかった朝日を何かが遮った。

「なっ――――!?」

――まず、ゆったりとした大きな羽音が耳をついた。町中を飛ぶ鳥が発する忙しない

ものとは全く違う。
次に、見覚えのある虹色の粒子が辺りを舞ったかと思えば、今度は太陽を背負った黒い大きなシルエットが目に飛び込んでくる。
そのシルエットは、鳥のそれではなく――
――空に浮かぶ、一人の少女のものあった。
身一つで宙に浮かぶのは黒いセーラー服を身にまとった少女。それが、唖然とする僕の前へ、ゆっくりと下降して来ていた。
風に靡く髪は、まるで翼のように羽ばたいて虹色の粒子を撒いている。
真っ黒なタイツに包まれた細い脚をクッションにし、同じく黒いローファーが地面を踏みしめる。彼女が地面に降り立つと同時に、辺りを舞っていた虹色の粒子はすっと宙に溶けて消えた。
余りにも幻想的な光景に呆然としていた意識が覚醒する。顕になった顔を見ると、その容貌は驚くほど整ったものだ。
ゆったりとしたセミロングの黒髪は艶々と輝き、左だけ伸びた前髪に隠された青い瞳も含めて、僕はどこか冷たい印象を抱く。
バサバサァッ！
「――っ!?」

いきなり彼女が両手を勢い良く広げ、様子をうかがっていたカラスたちが驚いて一斉に飛び立ってしまう。
周囲をカラス達が落とした黒い羽根が舞い――その中心には黒い少女が佇んでいた。
突然の出来事に、僕の心臓は早金のように脈打ち、全身は緊張で硬直している。
そんな僕に対して少女は一瞥を寄越したのみで、まるで興味がない様子でその視線を地面へ落としていた。
そしてチョン、チョンと見覚えのある動作で跳躍したかと思うと――
――その場にしゃがみ込んで、地面に散らばるパンの耳を口へ運びはじめた。
「もぐもぐ……」
「えぇ……」
脱力のあまり、僕はその場に崩れ落ちてしまうかと思った。
まるで非日常の始まりを告げるかようなミステリアスな登場シーンを披露した少女は、一瞬にしてその印象を蹴散らしてしまった。
「あげないわ」
「いらないよ……」
あまりにじっと見ていたからか、少女は最後のひと切れを急いで頬張りながらこちら

を見上げていた。
少女は手に付いていたパンくずをついばむように舐め取ると、立ち上がってこちらに手を伸ばしてきた。
「……なにか？」
「あたしのぶん、今日も残してあるんでしょ？　ちょうだい」
「ん、ん？　……あっ」
その言葉で、僕は一つの確信を得た。
「ひょっとして、チビ助か？」
「え？　ああ、たしかにそんな風に呼ばれてた気がするわね」
僕が問うと少女――クーと同じように擬人化したカラスの子が肯定する。
うちを訪れるカラスの中に、群れの中で目立って小柄な子が一羽いた。
微妙に動作がトロいのもあり、他のカラスに押しのけられてはよくパンを横取りされがちだった。
少し不憫に思った僕は、パンを一度に全てまかず、一部手元に残しておいてその子が食べやすい位置に投げてやるようにしていた。
その際、チビ助と呼んでいたのだが、彼女はそれを覚えていたらしい。
「まあなんでもいいわ、それもちょうだい」

「いや、まあ、いいけど……」
意外と図々しい彼女にちょっと引きつつも手元に残していたそれを手渡すと、彼女は目を輝かせて袋の中身を食べ始める。
「……なあ、君の仲間の中でそんな姿になった子は他にも居るのか？」
気になっていた事を訪ねてみると、彼女は食べる手を止めこちらを向いてくれる。
「そうね、この姿になった子なら他にも何羽かいたわ。まあ互いにびっくりして散り散りになっちゃったから、どこに行ったかまでは知らないけど……」
「そうなのか」
どうやら、僕とクーに起こった不思議な出来事は意外にも普遍的な（？）現象らしい。
珍しい体験をするあまりに「謎の特殊部隊によってクーを奪われ記憶を消されたりするのでは」という密かに抱いていた心配はどうやら杞憂に終わりそうだった。
どう考えてもあの隕石が原因だし、現状から見てこの擬人化現象は世界中で起こっていると考えた方が自然だ。
空想上の謎の組織でもこの規模の異変にはお手上げだろうさ。
「――ねえ、これでもうおしまいなの？」
「えっ？　ああ、君らに用意したのはそれで終わりだけど……」
気付けば彼女は袋の中身を食べ尽くしていた。仲間の分を独り占めしてなお彼女の

お腹は満たされないらしく、何とも切ない表情を浮かべている。
……まあ、確かにヒトの食事としては物足りないだろうね。
「そうなの……残念」
「……あのさ、仲間追っ払ってたけど、いいのか？」
がっくりしている彼女に対し、もう一つ質問をぶつけてみる。カラスの恨みは根深い、と言うのは僕も目の当たりにしてきた。
カラスに石をぶつけた近所の悪ガキが頭を蹴っ飛ばされたり顔に爆撃されたりと散々な目に遭った事は町内で有名なのだ。
元同胞とはいえ……いや元同胞だからこそ、報復が恐ろしくないのであろうか。
そう思っていると、彼女は端正な顔で不敵な笑みを浮かべた。
「ふふん、見ての通りあたしはヒトの姿を得たのよ？　アイツらなんてもう怖くもなんともないわ。もう偉そうになんてさせないんだから」
そう言って拳を握る彼女に「ああ、イジメられてたのかな」と察してしまい、なんだか微妙な気分になった。
カラス社会もなかなか大変らしい。
「この体は大きくて強いけど、お腹いっぱいにならないのよね。あ、ごはんありがと！　それじゃあ、またね！」

「え、ああ、またな」

彼女はそれだけ言うと軽く足を屈め、跳躍の勢いで宙へ飛び出す。あの髪はやはり翼の役割を果たしているらしい。

虹色の粒子をまき散らしながら元気に飛び立った彼女の背に軽く手を振る。

僕はどんどん小さくなるシルエットを見送りながら、「擬人化しても鳥は飛べる」と頭のメモに書き込んだ。……しかし。

「……飛ぶ時は気をつけないとパンツが見えてるよ、って教えた方が良かったかな」

彼女に羞恥心という物があるようには見えなかったが、あの姿をしている以上、少しは気にする義務があると僕は思うのだ。

他のカラスたちが戻ってくる様子はないし、僕は家に戻ることにした。

第二話　ある忠犬

1日目　昼

「ひゃあ――!!」

――どんがらがっしゃーん!

突如として耳に飛び込んできた悲鳴と轟音に、微睡んでいた意識が覚醒する。僕は慌ててベッドを飛び出し居間へ走った。

「どうした!?」

「うぅーっ……!」

居間に入ってまず目に入ってきたのは、仰向けにひっくり返って額を押さえるクーの姿。そして無残に破壊されたテレビである。

テレビの先にはクーお気に入りのキャットタワーがあり……僕は全てを察して小さく溜息をついた。

「……大丈夫か?　ほら、おでこ見せて」

「う、ぐぅう……はい……」

そう言って涙目で差し出された額はやや赤くなっているものの、傷は無さそうだ。

優しくおでこをさすってやると、クーがえぐえぐと泣き出した。
「痛む？　冷やすもの持ってこようか？」
「ぢがう〝の〟……はこ、ごわしぢゃっだぁ、ごべんぁざい……」
「……いいよ、もうだいぶ古くなってたし。それよりも、体格全然違うんだから今までどおりに振る舞ってちゃ危ないだろ」
「ぁい……」
彼女は日々、テレビからキャットタワーの最上段への見事な跳躍を見せてくれていた。
が、それを人間の体格でやればどうなるかはご覧の通りである。
というか、目的地たるタワー自体も今の彼女が乗るには手狭すぎるのだ。
僕は冷蔵庫からひんやりシートを取り出すと、彼女の額へ貼ってやる。
「ひゃっ」
「しばらくそのまま貼っといてね」
「はぁい……」
キャットタワーを見ると、ぶつけたと見られる場所が激しくひしゃげていた。かなり硬質な素材で出来てるはずなのだけど。
僕はクーが無事だったことに安堵すると同時に、その頑強さに戦慄する。

同じ衝撃を僕が受ければ、額ぱっかぁんは免れないであろう。
「テレビの処分ってどうするんだっけ……後で調べないと」
年代物のブラウン管の画面は粉々に砕け、ガラスが飛散していた。
飛び散った破片を片付けようと箒を取って戻ってくると、クーが何故か壊れたテレビの前で正座している。
「クー、別に怒ってないよ」
「うぇ？　うん……あったかい寝床、壊れちゃったなぁって」
「あー、その上でよく寝てたからなぁ」
クーにとってのテレビは温かい寝床でしかないらしかった。そういえば、クーは画面に興味を持つことはなかったな。
「まあ、今のでわかったろうけど今のクーには色々と小さすぎるから気を付けてね」
「うにゅう……」
しょんぼりするクーを後目に大きな欠伸が出る。終末を起きて迎えるための夜更かしの後、クーのカレーを用意したりするうちに朝を迎えてしまった僕は遅めの睡眠を取っていたのだが……すっかり目が覚めた。
「12時過ぎか……」
六時間近くは眠れたし、まあ丁度いいタイミングだったとも言えるだろう。

「あ、お腹は空いてる？」
「……空いてる！」
途端に耳と尻尾がピーンと立つ。なんともゲンキンな子である。
猫時代は朝晩二食が基本……おやつ除く、であったクーではあるけれど、今の体だと三食与えるのが適当かと思われる。
しかし、ひとつ問題が。
「猫人間にこんな味の濃いものを食べさせて大丈夫か不安だ……」
「いいにおい――！」
今食べているチキンスープのラーメンは僕にとっても味が濃いと感じる。もちろん、猫に食わせるには塩分過多で論外だ。
明日がない前提で過ごしていた我が家には現在こんな物しか食料がない。
それでも、僕が普通の食事をする横で少女（クー）にドライフードを食わせるというのは、やはり抵抗があった。
「あっつ！」
「ほら、小皿に入れて冷ましてから食べて」
「あい！」
クーはやはり猫舌らしい。フォークを握りしめいい笑顔で答える彼女を見つつ、自分

でもラーメンをすする。うん、んまい。

……しかし、昨夜まで世界の危機なのだーといった感じだったのに。しかも何故か動物が擬人化するという異常事態に遭遇しているにも関わらずこんなに何事もないように日常を過ごしていてもいいのだろうか。

「クー、味濃いから汁は残そうか」

ふと、丼を持ち上げ顔に近づけるクーに気づいて声をかける。

さすがに汁まで飲ませるのは怖い。

「ええー、にーちゃは飲んでたじゃない！」

どうやら、僕の真似をして飲もうとしたらしい。なんという迂闊。

「僕は……ほら、人間だから。それに熱いからベロやけどするよ」

「むー」

そうむくれながらも丼を置くクーを眺め、彼女の扱いについて考えを巡らせる。

社会的な問題は、まあ世間に同様の例が溢れているならいずれなんとかなるだろう。

問題は僕自身が彼女に対してどう接してやるか、ということだ。

今はとりあえず年の離れた妹だとでも思って接しているが、クーにとって本当は何が一番いいのかまだよくわからない。

人間として扱うと言っても、そのための物資も現状不足している始末。ここは田舎と

いうほどではないが郊外寄りであるし、各種サービスの復旧に何日かかるやら。
家に放置するのが嫌だったから出したゴミも当然まだ回収されていない。……人が戻ってこなくては何も始まらないな。
しかも、食べるものも残り少ないときた。……仕方がない、か。
「クー、ちょっと外に行ってくるけど……」
「うにゃ……？」
「眠いなら留守番しとく？」
クーは眠たげな瞳をこすりながら頷く。
思えばただの猫だった時、昼間のクーは大体ぐーすか寝ていた。猫は夜行性だしね。
「じゃ、ちょっと行ってくるから――」
といったその時にはもうカーペットの上で丸まっているクーであった。
※※
「誰もいないなぁ……」
町中は昨日までと変わらずゴーストタウンの様相であった。
空を見上げればたまに擬人化した鳥らしき人影が飛んでいるのが見える。
最初はギョッとしたものだが、チビ助のおかげで正体は把握済みだ。
街にいるであろう不審な人影も、正体がわかるならば驚くことも……。

「――くおんさま？」
「うおっ!?」
……ない、とは限らないのであった。流石に名前を呼ばれては驚きもする。
蚊の鳴くような微かな声は散策の目的地の一つである、近所のとある老夫婦宅の庭から発せられていた。
僕が恐る恐る塀の影から庭を覗く、と。
「今日も来てくれたのですね、くおんさま」
そこに座っていたのはシベリアンハスキーのシーザーくん……だったと思われる、一人の少女であった。
「おおシーザーよ、お前もなのか……」
「……はい？」
子首を傾げる彼女の姿はどことなく、髪の毛やら服装やらにハスキー犬の面影がある、気がする。ちなみに元はやたら立派なものがついたオスだ。
〝おすわり〟の体勢でこちらを見上げている彼女に目線を合わせようとしゃがむと、彼女はいつもしてきたように僕の胸元に頭を一度擦り付けてくぅんと一声鳴いた。
「……相変わらずそこに座ってるんだね」
「ご主人さまがたが帰ってくるまで、ここを守らねばなりませんので」

そう言って胸を張る彼女の健気さに、僕は少し悲しい気分となった。
この家に住む老夫婦とはシーザーを通じて知り合った昔からの知己だ。
久遠くん久遠くん、と何かと可愛がってくれた彼らはシェルターへ避難するにあたり、連れて行くことのできないシーザーを後ろ髪を引かれながらも置いて行ってしまった。
仕方のない事だとは、思う。
「それで、そのぉ――」
「うん、もちろん持ってきたよ。持ってきたけど……」
シーザーがやや甘えるような声でやんわりと催促してきたので、リュックから取り出した袋を見せてやる。
もじもじするシーザーの背後でゆらゆらしていた尻尾がちぎれんばかりに荒れ狂う。
数日前に出発した彼らが山と積んでいったドッグフードは、ご馳走にハッスルしたシーザーと、集まってきた野生生物たちによってまたたく間に食い尽くされてしまった。
シーザーは図体は大きくとも、人にも動物にも吠えない温厚な犬である。平時から野良猫に餌を途中で奪われながらも尻尾をゆらゆらさせて見守っている姿をよく見かけた。

番犬としてはダメっぽい子ではあるが、そんなところも含め彼は皆から愛されていた。

出発の際に首輪を外され自由の身となったシーザーではあるが、忠犬たる彼は変わらず庭先に座っている。

「毎日ありがとうございますっ！」

「好きでやってることだから気にしないで。ただ、今でも口に合うといいんだけど……」

擬人化を想定していなかった為、持ってきたのはいつものドッグフード。

やはり別のものを持ってこようかと迷いながらも、よだれを垂らして手元を凝視する彼女に負けて餌皿に入れて差し出す。

……しかし、彼女はそれを受け取らず、真面目な顔で〝おすわり〟の体勢を続けていた。

しばらく考えた僕は、そっと手のひらを差し出してみる。

「……お、お手？」

「ハイッ！」

待ってましたとばかりにシーザーは元気よく応じてくれた。

僕はそっと餌皿を床に置き、もう片方の手のひらを差し出す。

「おかわり」

「ハイっ！」
　シーザーの鼻先に出した僕の右手人差し指がすっと円を描く。
「おまわり！」
「ハイっハイっ！」
「伏せっ！」
「ハイッ！」
　しゃがんだままの体勢から勢い良く横周りに回転すると、勢いのまま伏せの体勢へ移行するシーザー。
「待て！」
　そして身動きをやめ、じっと餌皿を見つめる彼女を焦らすこと数秒。
「……よし！」
「いただきますっ！」
　元気よく宣言したシーザーは地面に置かれた餌皿に躊躇なく顔を突っ込み、ガツガツとドライフードを食べ始めた。
「……」
　――その光景に謎の罪悪感に苛まれる。女の子に対して一体何させてるのかと。
　……いや違うのだ、プレイとかではないのだ、いつも通りの彼、いや彼女につい流さ

れてやってしまっただけだ。
心の中で言い訳をしていると、空になった餌皿がカランと音を立てた。
「ぷはーっ！　ごちそうさまですっ！」
お腹を空かせていたのか、彼女は凄まじい勢いでドッグフードを完食してしまった。
クーが人の食事に馴染んでいたから口に合うか少し不安だったが、どうやら動物時代の食事も平気なご様子。
……とはいえ、やはりその絵面は余りにも背徳的であった。
「次はなんか対策考えてくるから……いや、なんでもない。ほら水はこれね」
流石に水は皿に注いだりせずペットボトルのフタを開け、そのまま手渡す事にした。
固形物はともかく、液体は人間の口ならこちらの方が飲みやすかろう。
彼女が小首を傾げていたので一口だけ飲んで見せると、なるほどといった様子で真似して飲み始めた。
「――くおんさま。その、少しお聞きしたいことがあるのですが」
「うん？」
水を飲んで一息ついた後しばらく黙っていた彼女だったが、気付けば不安げな面持ちでこちらを伺っていた。

「ご主人さまがたがどこへ行かれたのか、くおんさまはご存知ですか?」
「……それは」
——その質問は予想していた物ではあった。しかし、どう答えるのが彼女らにとって良いものなのかは未だに測りかねていた。
僕が少し言葉に詰まっているのを見かねてか、彼女はおもむろに口を開く。
「——あの日、ご主人さまと奥さまは、今まで見たこともない表情で私を代わる代わる何度も強く抱きしめてくださいました」
遠くを見つめながらそう語りだした彼女に、僕は口を挟めなかった。
「私は今でこそ、くおんさまともお話できるようになりました。しかし、あの日の私はただの犬です。難しいお話は、わかりません」
そこまで言って、シーザーは口ごもる。
しばらく何かを考えるような仕草をした後、彼女は続けた。
「ただ……とても申し訳なさそうな、悲しそうな、そんな顔をされていた気がします。奥さまなど、涙を流されていました」
三隅夫妻がいかにシーザーを愛していたのかは、僕も知っている。僕には想像する事しかできないが、とても辛い決断だったのは確かだろう。
「私にはなぜご主人さま方が泣いていたのか、わかりません。なぜ、何日もここに帰らな

いのかも、分かりませんでした。それでも私は疑う事なく待っていました」
昨日までの彼は、元気だった。
主人が帰って来ることを微塵も疑うことなく、寂しげながらも力強く待ち続けていた。
「――しかし、この姿になって考える力を得た私は少し、不安になりました」
そして彼女は、何かをこらえるように、吐き出すように声を絞り出した。
「もしかしたら、私は……」
――捨てられてしまったのでは、と。
そう語った彼女の表情に先程までの明るさは見られず。眉は不安を湛えて垂れ下がり、大きな獣耳は悲しげに伏せられて。
――今まで穏やかに揺れていた尻尾も、力無く地に垂れていた。
彼女が今語った通り、人の姿を取った事が悲観が入り込む原因になったのだろう。
知恵を得る事が、必ずしも幸福につながるとは限らない。僕は、純粋な彼女に対し、嘘や下手な誤魔化しをしたくないと思った。
「三隅さん……いや、君のご主人様はシーザーを捨ててなんかいないよ」
ぴたりと伏せられていた大きな耳が、僕の言葉に反応してゆっくりと起き上がる。
「――昨日の夜に、空がまぶしく光ったのが見えただろう？」

「はい、私がこの姿になったのも丁度その頃だったと思います」
シーザーはまっすぐと僕の顔を見つめ、次の言葉を待っている。
「シーザーのご主人様もそうだけど、僕ら人間はね、隕石が来るのを少し前から気付いていたんだ」
「そうなのですか？」
「うん、僕達は隕石が来るのをとても恐れていたんだよ。シーザーが雷を恐れるのと同じだね」
彼女は雷を例に出されると、少し納得したような顔になった。
シーザーと雷に関するエピソードはいくつも聞かされていた……内容に関しては、彼女の名誉のためにも省く事にするが。
「なるほど、かみなり……ですか。確かにそれならば納得できます」
うんうんと頷いていた彼女は「実は私も」と前置きして話し始めた。
「かみなりの日は特別に家に上げてもらえました。その上ご主人さまや奥さまに抱きしめてもらっていたのですが……それでも音にびっくりして粗相してしまうぐらいには私もかみなりが苦手なんです、だから分かります」
……省いた詳細を本人の口で語られてしまった。「シーザーの可愛らしいエピソード」として三隅さんの奥さんから聞かされたものの一つである。

対策として予め膝にペットシーツを敷いて抱きしめているのだとか。
「そう。それでみんなで安全な場所へ集まる事にしたんだけど、そこには人間しか入れてもらえないんだ。だから三隅さんたちは君を置いていくしかなかった」
……しかし理由があれど、シーザーを一人家に残して避難した事は事実だ、誤魔化しようがない事。
反応が少し怖かったが、シーザーは意外にもその表情を曇らせたりはしなかった。
「それならば仕方がありません。オスは伴侶を守るものです、奥さまを優先されたのは当然のことでしょう……それで、ご主人さまがたは？」
「うん、隕石（あれ）の脅威はもう去ったんだ、遠からず帰ってくるさ」
「……よかった」
僕の言葉に安堵の表情を浮かべた彼女を見て、わだかまりなく事実を伝えられた様子に胸を撫で下ろす。
……あとの事は、帰ってきた三隅さんたちとシーザー次第だ。先に擬人化について三隅さんに伝えておきたいけど。
「……さて、僕はそろそろ行くよ。三隅さんが帰るまではご飯持ってくるからね」
「ああ、何度もすみません……この御恩は必ずお返ししますので！」
「はは、あんまり気にしなくていいよ。それじゃ、またね」

尻尾を振りながら見送る彼女に手を振ると、僕はもう一つの目的の為に歩き出した。

――散策の最終目的地は、近所のスーパーマーケットだ。

第三話　けものの距離感　1

シーザーと別れて5分も歩くと、目的のスーパーマーケットが見えてきた。
以前はここをよく利用したものだが、隕石の衝突が確定して以来は訪れていない。
あまり家を出る気にはなれなかったのが最大の理由だが、どうせ営業していないだろうと思っていたのもある。
「……最悪こじ開けなきゃいけないかと思ってたけど、助かったな」
入り口に近づけば、なんと自動ドアが反応して開いた。店内も明かりが通常通り点灯しており「ひょっとして営業しているのか」と期待したが、どうにも人の気配はしない。
単にそのまま遺棄されただけのようだ。
店内ＢＧＭは消されているらしく、普段の活気あるイメージに反した不気味な静寂が辺りを支配している。
入店してすぐに一際目立つ大きな紙吊られているのが目に飛び込んできた。
「全品１００％ＯＦＦセール……だと……！」
乱雑に書かれたそれには、「もうご自由にお取りください」とヤケクソな文面が見え、世界の終わりまでの間勝手に使えとばかりにすべてが投げ出されていた事がわかった。

商売など放り投げてみんな避難なり帰郷なりしたらしい、そらそうか。
いくらかの商品が持ち出された形跡はあるが、大部分は残っている様子。
おそらく、それらに群がるよりも移動が優先されたんだろう。
滅亡が回避されたのだから主に経営者勢が大慌てで戻ってきそうなものだけど、昼過ぎになっても帰ってこないところを見れば交通機関はまだ麻痺していると見ていいか。
浮浪者の一人や二人居座ってるのではと思ったが、少なくとも見える範囲には居ない。――本当に人に会わないな。
「とりあえず米だな、米っと……」
カートを押して向かった先は、米売り場。
近づくにつれガタガタと鳴り始めるカートに何事かと思って視線を下ろすと、誰かがいたずらで裂いたのか生米が散らかっているらしいことがわかった。
全滅していなければいいな、と思いながら米売り場に到着すると、どうやら破かれた袋は一つだけらしかった。確保。
「あと必要なのは……野菜は萎びてるかな、肉や魚も危ないし」
当然、仕入れや期限切れ品の廃棄などされていないのだから冷蔵機能が生きてても賞味期限の短いものはアウトだ。
卵くらいならまだギリギリいけるのでは、と探してみるとこれまた相当数が落ちて割

れており、床でパックから染み出した卵がぬらぬらと光っていた。
げんなりしながら無事なものを探してみていると、奇妙なことに気づいた。
「中身のない殻がある……？」
乱暴に開封されたパックがいくつかあり、それに伴って明らかに中身をすすったと見られる殻がいくらか散乱していた。
――いや、待った。落ちて割れた卵も乾ききっていない、まだ人がいたと思われる期間に割れたのだとしたら、それらは乾いているはずだ。
つまりここには誰か、いや、何かがいる。やったのが人ならば、わざわざその場で生卵をすすったりはしない。
割れておらずかつ賞味期限が僅かに残っているものを選んでカートに確保すると、他に保存の効く食べ物を求めて歩き出した。
「……自動ドアは、生きていた。センサーにかかる大きさの生き物と考えたら……やっぱ例の擬人化動物かな」
静寂が気持ち悪いのもあるが、誰かがいた時こちらの存在が知れるよう努めて思考を口に出している。
決して、普段からこうではないのだ。……僕は一体何の言い訳しているのだろう？
まあいい、とにかくあの痕跡の主についてはある程度の推測はできる。

犬か、猫か、ネズミかあるいは野鳥の類。この辺りで見かける動物はそれくらいだ。放流されたペット等の可能性もあるが、そうなると予想はちょっとできないな。

この擬人化現象については原因が隕石であること以外、殆ど分かっていない。

まず、今のところは元がオスの子が擬人化後に女の子になっている事。反転するのか、ランダムなのか、必ずそうなるのかは不明。

同じ種でも擬人化したものとしなかったものがいた。猫と犬、カラスの擬人化は確認済みだがそれ以外の哺乳類、鳥類も擬人化するのか、魚類、爬虫類、虫などはどうか。

……本当に分からない事だらけだ。

「そもそも、カラスの例を見るに擬人化現象の発生率自体は低いっぽいけど――」

「……誰か、いるのかー？」

びくり、と体が硬直する。

そう遠くないどこかで、少女のものらしき声が響いてきたからだ。

いきなり鉢合わせるより予め存在を知ってもらっておいたほうがマシだと思っていたが……これはこれで心臓に悪いな。

それにしても、どう答えたものか。

「……居ますよ。少しお邪魔しています」

「そうか、そっちへ行ってやるからちょっと待ってるのだ！」

怖いから来なくていいです、とは言えなかった。床に散らばった何かを蹴飛ばすような音が、段々と近づいてくるのが分かる。

しばらくすると、前方の商品棚の影から一人の少女が顔を覗かせた。

「おっ、見つけたの――うおっ！　お前、にんげんか？」

彼女はこちらを確認するとやや面食らったように後退る。チラチラと見え隠れする獣耳からして、やはり擬人化動物らしい。

人間に対して警戒心がある様子だが、どうしたものか。

「えーと……はい、人間です。あなたは――」

少し躊躇いながらも僕が肯定すると、少女はゆっくりとこちらに姿を晒してくれた。

薄紫の服に黒のミニスカート、グレーのタイツはくるぶしあたりで黒くなり靴と同化して見える。髪はシルバーを基調に、暗いグレーの特徴的なラインが見え、背後に見える尻尾は黒とグレーのシマシマ。

他に出会った子らと比較してもやや幼い顔立ちなものの、勝ち気そうな表情をしたその子の正体は、なんとなく察しがついた。

「……わたしはアライグマなのだ。にんげんを見るの久しぶりな気がするなあ。前はどこにでもうじゃうじゃ居たのに、もしかしてナワバリを変えたのか？」

少し警戒の色はあるものの、興味深そうにこちらを伺う彼女に対して、僕は背中を冷

や汗が伝うのを感じた。
　――アライグマ。かつてペットとして輸入され、一部の無責任な飼い主によって野に放たれた、外来種（ひがいしゅ）の代名詞。
　手先が器用で、力も強く、知能も高いが気性が粗くて人に慣れにくい。
　その生命力の高さと生物的な強さを武器に数を劇的に増やしこの地に根を張ってきた彼らは、今や駆除対象として追われている。
「近頃は人間にも色々とありまして……ちょっと住処を離れてるんです」
「そうなのか、にんげんも大変だなあ」
　――恨まれているのではないか。そんな僕の抱える不安とは裏腹に、彼女は持ち前の強い好奇心を発揮してこちらを伺っていた。
「にんげんは、一人で何しに来たのだ？」
「……食料の確保に」
　そう言って手元のカートを指差すと、彼女はやや躊躇いがちにこちらへ近付いてきて買い物籠の中身を覗き込んでくる。
「ふんふん、タマゴとコメの袋か……にんげんもこれが好きなんだな！」
「ええまあ、この建物は人間が食べる物を集めてる場所ですからね」
「おお……たしかに少し前はこの辺りでもにんげんをよく見かけたのだ。やっぱりここ

もにんげんのナワバリだったのかぁ」
　人間の縄張りというと、どこからどこまでを指すのが正しいのか。彼女らの視点で考えれば、人が住み、行動する範囲だろう。
　この時点でも十二分に広いものだが、人類が主張するであろう範囲は、全て寄せ集めれば地球のほぼ全域となる。
　考えてみればとんでもない欲深さだ。
「ここには食べ物がたくさんあるし……にんげんたちが引っ越したなら今の内にわたしがナワバリにしちゃうのだ！」
　……これは遠回しに出ていけと言われているのだろうか。しかし、今のところ目の前の少女はこちらに敵対心を見せていない。
　初めは攻撃されたらどうしようと思っていたが、言語でのコミニュケーションが取れるというのは存外大きい事らしい。
「えっと……ここにいた人間が施設を放棄した理由がなくなったので、そのうちみんな戻って来ると思いますよ」
「ええーっ、そうなのか？　せっかく見つけたのに残念なのだ……」
　近々人が戻ってくるであろう事を伝えてやると、どうやら彼女も人間と争ってまでここに居座る気はないらしい。

「ま、にんげんたちが帰ってきたら、そのときはその時なのだ！」
それまではわたしのナワバリなのだー、とからからと笑う少女。
帰ってきたこの施設の所有者と鉢合わせた時が怖いが、言っても無駄だろうなぁ……。
一つため息をつくと、僕は予め用意していた質問をぶつけた。
「――ところで、あなたの仲間で他にその姿になった子はいますか？」
そう、お約束の擬人化現象の調査である。
この聞き方では正確な数がわからないのであまり意味のない調査ではあるが。
質問に対して、少女は頭に疑問符を浮かべる。ひょっとして、アライグマって群れないのだろうか？
「んー、あー、他のアライグマの話か？　今のところはにんげんになったヤツには会ってないなー、少なくともおかーさんや弟は元のままだったのだ……」
そう答えた少女の表情が、今までと打って変わって暗いものとなっていた。急にどうしたのだろうと様子を伺っていると、やがて彼女はこちらに背を向けた。
「そうだ、おかーさんたちに食べ物を持っていかないと……そうすればきっと――」
彼女は拳を握りながらそう呟くと、こちらを振り返る。
「……それじゃあわたしはそろそろ行くのだ。またな、にんげん」

「え？　ああ、うん。お仲間によろしく」

そう言って少女は商品棚の陰――どうやらこちらに近付く前に隠していたらしい――から大ぶりなかぼちゃを二つ抱え上げると、出口へ向かって走り去っていった。

少女の慌ただしい足音が消えると、店内は再び静寂に包まれてしまった。

必要なものを揃えた僕は、無人レジ（有人のレジなど今はどこにもないが）でさっと会計を済ませる。

終末を越えた今の時点で１００％ＯＦＦセールに乗っかる勇気は僕にはない。しかし、こうも人がいない環境にいると、ちょっと大胆な事をしてみたくなってくるものだ。

僕は重くなった籠を載せたままのカートを押し、自動ドアをくぐった。どきどき。

……よし、今日はこのまま帰ってみよう。

あ、カートは後でちゃんと返しますので。

第四話　けものの距離感　2

アスファルトの上でカートが鳴らす金属音が静かな道に響き渡る。
普段ならそれなりに往来があるこの道も、今は乗り捨てられた車がいくつか停車しているだけ。
塀に突っ込んだまま放置された車やガラス片なども散らばった誰もいない見慣れた道を歩いていると、まるで本当に世界が終わってしまったかのようだ。
……というか、外部の情報が入ってこないせいで本当に世界が無事なのか確認が取れなくて怖くなってきた。先週、スマートフォンを壊してしまったのが悔やまれる。
テレビは今朝オシャカになったし、あいにくとパソコンも持っていない。
……人々よ、早く帰ってこい。
孤立してしまった事実を嘆いていると、前方からなにやら複数人の声が聞こえてきた。
「――のだっ！」
「――。――」
おや、と思い声の主を探してみると、路地の方で言い争いをしている様子。

聞き覚えのある声が混じっているようだ。
「……いい加減諦めろ、オレは腹が減ってるんだ。あんまりしつこいようだと、お前も食っちまうぞ」
「ぐぅぅぅ……このっ、返すの――あっ！」
「うわっ――」
路地に入った僕の目の前に小柄な人影が倒れ込んできた。それは先程別れたばかりの少女――アライグマだ。とっさにカートを脇に置いて彼女を助け起こそうとしゃがんだ瞬間、正面に影が差した。
恐る恐る顔を上げると、訝しげな表情をした女性が側に立っていた。
「……ん？　どっかで見たことある顔だな」
そう言って声をかけてきた彼女は、とても特徴的な姿をしていた。
右半分が黒、左半分が薄い茶髪と中央でくっきり別れたショートヘア。片方が半ばから乱雑に千切られ、反対側は三角形の切れ込みの入れられた特徴的な獣耳。着ている服装は、柄が違えどクーのそれに似たものだ。そんな彼、いや彼女を僕は知っていた。
「――おお、思い出したぞ、よく公園に来ていたボウズじゃないか！　ここのところ目も鼻も悪くしてたから顔を忘れかけとったわ」
「えーと……こんにちは、ダンシャク。ずいぶんと若返ったね」

目の前ではっはっはと豪快に笑っているダンシャクは、地域ぐるみで管理されてるいわゆる「地域猫」の内の一匹だ。

体が大きく喧嘩も強いボス猫として長らく君臨してきたが、地域猫運動の広まりによる去勢と加齢による衰えもあって数年前にはボスを引退したらしい。野良としてはかなり長生きなおじいちゃん猫である。

「そうだなぁ、最近飯を食うのも億劫になってたというのに、起きてみればこの姿よ。老いて衰えた筈の力が漲るようだわ」

「元気そうでなによりです。あの、ところでその、手に持ってるのは……」

先程から、ダンシャクの右手に鷲掴みにされた何かが暴れている。

先ほど耳にした会話の流れからなんとなく予想はしていたが……。

「ああ、これか？　ついさっきここで捕まえた、今日のメシだ」

「――だっ、だめなのだっ！　おかーさんを返すのだ！」

そう言ってダンシャクが首根っこを握ったものをこちらに掲げると、蹲っていた少女が弾かれたように立ち上がった。

よろめきながらもダンシャクに縋り付く彼女の視線の先には、一匹のアライグマが拘束を解こうと必死にもがいていた。

……今の発言通りならば、それは彼女の母親であるのだろう。

「しつこいぞ！　オレにはこいつを捕える力があり、こいつにはそれから逃れる力がなかった。そしてお前にはオレからこいつを奪い返す力はない。潔く諦めて受け入れろ」
「うぐぐぬぅ……！」
ダンシャクと二回り以上体格が違う少女は文字通り片手であしらわれている。ダンシャクは今まで見た擬人化動物の中で最も体格がよく、成熟した女性の姿をしている。
逆に、対する少女は今までの中で一番幼く見え、非常に小柄だ。
まさに大人と子供といったその体格差は覆る事はないだろう。これが人間同士の諍いであれば迷わず助け舟を出す所であるが、彼女らは姿は変われど、野生に生きる存在。
そこに手を出す事は人間のエゴ以外の何者でもなく……また、クーと接して得た経験からして、彼女らの筋力は見かけ通りのそれではないため、もし仲裁に入って喧嘩に巻き込まれた場合僕の身が危ない。
しかし目の前の光景は黙って見過ごすには後味が悪すぎる。――そう思っていたときだった。
「ダンシャクさん、もうその辺にしてあげませんか……？」
後ろから、遠慮がちな声が響いた。振り返ると、服装からしておそらくは猫であろう擬人化動物が二人立っていた。
「なんだハナコ、こいつの肩を持つのか？」

「ええと、あの、流石に、かわいそうだと思いまして……」
「おやじのアライグマ嫌いは知ってるけど、わざわざ泣く子の目の前で親を食べなくてもいいだろ……ほら鳩狩ってきたから、な?」
そう言って、不機嫌そうな顔になったダンシャクを宥める二人の猫たち。
一人は名前を聞いて分かったが、鼻の右下に大きな黒い斑点が一つだけある白猫のハナコ。
正式な名前は……まあ、いいとして。
今の彼女は体格や顔立ち、尻尾の先に黒い輪が無いことを除けはクーそっくりだ。代わりに頭に黒くて丸い髪飾りがついている。
もう一人は髪とスカート、尻尾がサバ柄でトップスが白のノースリーブ。
何より特徴的なのが名前の由来となった、太く凛々しい黒眉毛だ。
その名も「まゆげ」、ちなみにダンシャクの息子の一人らしく、一時期はその後を継ぐようにボスの座に座っていた事もある。
……みんな、動物時代の元々の柄が見事に服装へ反映されているご様子。
そして二人の獣耳も、地域猫を示すカットが成されている。ダンシャクの乱雑にちぎれた片耳は若かりし彼が縄張りに侵入してきたアライグマと死闘を繰り広げた時のものだ。ちなみに勝ったらしい。

「ほら、鳩お好きでしたよね？　狩ってきた鳩はまゆげが一羽で私が二羽、私達は三匹、ちょうど皆で……」
「何を言う！　このオレがメスのおこぼれ何ぞで飢えを凌ぐか！」
「今は俺もおやじもメスだろ、ニンゲンのだけどな」
「う゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛！　お゛か゛あ゛さ゛ん゛！」
「だあああっ、やかましいっ！」
キレるダンシャク、呆れるまゆげ、そしてとうとう号泣するアライグマ少女。いよいよもって場が混乱し始めた。正直帰りたい。
僕が途方に暮れていると、ちょいちょい袖を引くものがいた。ハナコだ。
「あのあの、おにいさん、申し訳ないですけど、なにか食べ物持ってませんか……？　こうなってしまったダンシャクさんはとても頑固でして……」
ハナコは耳を伏せ、少女を睨むダンシャクをバツが悪そうに見ていた。
もう人間のエゴがどうのこうのと考えるのが面倒になりつつあった僕にとって渡りに船の言葉だ。僕は頷いて肯定すると脇に寄せていたカートから袋を一つ拾い上げ口を開け、そして取り出した中身を開封した。
――次の瞬間、状況が一変する。
「――ぬっ!!?」

「おっ？」
「おにいさん、これ……!!」
「……うぅ」
　鼻をひくつかせ、猫たちが一斉に僕を……正確にはその手元を注目した。
「この匂い……てゅーるじゃないか!?」
「ああ、ねこバァを見なくなって以来拝んでないが間違いない……！」
　……商品名まで覚えているとは恐れ入った。ちなみに猫バァとは三年前に亡くなった近所の猫好きのおばあさんだ。地域猫のルールを無視して元気な猫にまで餌付けをする困った人だ。
「おおう……」
　しかし思わず感嘆してしまう程の反応。
　さすがは対ネコ科誘引魅了宝具たる「テュール」である、その効果はバツグンだ。
　三匹が固唾を飲んで見守る中、僕はおもむろに口を開く。
「僕が口出ししていい状況じゃないとは思います。しかし、知り合ったばかりとはいえ、顔見知りになった彼女が親を失うところを黙って見てるのはしのびない。ここは一つ穏便に……」
　掲げた手を揺らすと、六つの瞳がそれを追従する。ダンシャクがごくりと生唾を飲む

のがわかった。
「あー、なんだ。オレがコイツを開放したら、そいつをくれるのか？」
　ウンウンと頷く他の二匹。あくまでダンシャクのエモノと交換という話なんだけど……まあいいか。
「はい、差し上げます」
「そうか、いつも仲間が群がってほとんど一口ずつしか貰えなかったそれを三人で山分けか……じゅるり」
　なんと、自分のエモノと交換だというのにダンシャクは三人で分ける気満々らしい。これがボスの器というものか……！
　ちょっと感動した僕は、袋から二本追加で取り出した。
「一人一本ずつ、です」
「乗ったッ!!」
「うおおおおお!!」
「わああああぁ……！」
　ご馳走（テュール）を丸ごと貰える美味しい展開に、猫たちが沸き上がる。
　しかしここまで喜ばれると、なんかこちらまで嬉しくなる。この人気っぷり、またたびも入っていないのにまるでイケナイお薬の如き中毒性だ。

そんな事を考えていると、ダンシャクが呆然とする少女のもとへ歩み寄って行った。
「あー、なんだ……さっきは張り倒して悪かったな」
「ふぇ……？」
ポリポリと頭を掻きながら、観念したのか単に疲れたのかすっかり大人しくしているアライグマを彼女の目の前に差し出す。固まる少女に対してダンシャクはため息を吐くと、少女の頭を乱暴に撫で付けた。
「ま、今回はボウズとてゅーるに免じてコイツは返してやる。精々、オレや他の捕食者に捕まらんように守ってみろ」
「う、うん……」
呆然としていた少女も状況を理解し始めたのか、おずおずと手を伸ばす。アライグマをそっと抱き上げた彼女の目に、じわりと涙が浮かんできた。
そして抱き上げられたアライグマも、少女の顔をゆっくりと見上げた。アライグマと少女はお互いを確かめるように見つめ合い、そして。
「お、おかあさ――」
――がぶり、と。少女の腕にアライグマの鋭い牙が深く食い込む。
日が傾き始めた静かな町内に、少女の甲高い悲鳴が響き渡った。
※※

「う、うあ〝ぁ……なんでなのだぁ……」
「あー、まあそう気を落とすな。お前だけじゃないさ、オレたちも普通の猫から同族としては見てもらえなんだからな」
テュールを頬張りながら、ダンシャクがぽんぽんと少女の頭を撫でる。
床にへたり込んでえぐえぐと泣いている少女の目は真っ赤に腫れていた。
「え、そうなんですか？」
「ああ、どうにも向こうから見た俺たちは〝猫のにおいのする人間〟らしい。人間好きのやつらはすり寄ってきたし、そうでないやつは逃げた」
「私たちも、仲間が何を伝えたいのかあまり分からなくなっちゃいましたよね」
まゆげとハナコもテュール片手に寂しそうに語る。擬人化動物たちは人間と動物のコミニュケーションを劇的に発展させる架け橋になるのでは、と思っていたが実態としてはそうもいかないらしい。
人の姿を取り、人の言葉をしゃべる彼女たちは元の動物からはかなり距離を置いた存在となってしまったようだ。
――人間でなく、獣でもない。
もし、言葉で通じ合える筈の人間が彼女らを拒絶したとしたら……彼女らは一体どうすればいいのだろう。少し考え込んでいると、やがて少女がポツポツと喋りだした。

「わたしがこの姿になった時、おかーさんも兄弟もすごくびっくりしてたのだ」
アライグマが走り去った方を眺めながら、血の滲む腕をさする少女。
歯型のついた腕は酷く痛むだろうが、心の傷はそれ以上に痛む事だろう。
「おかーさんはわたしが分からないのか、威嚇をして弟を咥えて行ってしまったのだ。わたしだけ、置き去りにして……」
道には、別れたときに少女が抱えていたかぼちゃが落ちて割れていた。彼女は割れたかぼちゃの欠片を拾い上げると、そっと手で包み込む。
「食べ物を持っていけば、おかーさんがまたわたしを好きになってくれるんじゃないかって思ってたけど……」
あれじゃ無理そうなのだ、と少女は自嘲した。ダンシャクから取り返した彼女を見る母の目は恐怖で満ち溢れていたと語る。
「これ以上、おかーさんたちを追っかけても。怖がらせるだけ……思ってたよりだいぶ早いけど、これは独り立ちの日なのだ」
少女はぐしぐしと涙を拭うと、すくっと立ち上がった。振り返った彼女は、いつの間にか先程までの弱々しさが消えていた。
「にんげんさん、おかーさんを助けてくれてどうもありがとうなのだ！　もう一緒には居られないけど、それでも嬉しいのだ」

そう言ってにかっと笑う彼女に、僕は強さと逞しさを感じた。
「この恩はきっと返すのだ。わたしはあの縄張りに居るから、もし何か困った事があったときは、このわたしにおまかせなのだ！」
それじゃあ、と言って走り去った彼女の背中を僕らは黙って見送った。
その背が見えなくなった頃、ダンシャクが深くため息をつく。
「――はっ、やりにくくなったもんだ。今まではエモノの事情なんて気にも留めなかったが……一々ああして泣くやつがいたら、食いづらくてしゃあねーな」
「意思疎通ができるってのも、考えもんだな。鳩の仲間があんな風に泣きついてきたらちょっとためらうかも……まあ餓死しそうな時は迷わず食うだろうけど」
テュールを食べ終わったらしいまゆげもそれに追従する。彼女らとしても意思疎通できる相手に対しては少なからず同情してしまうものらしい。
これも擬人化に伴う知性の発達によるものだろうか。この現象は、思っていた以上の変化を彼女らにもたらしたようだ。
喉が乾いたのでお茶を飲みながら物思いに耽っていると、またも僕の袖を引くものがいた。ハナコだ。
「おにいさん、今日は色々とありがとうございました」
「いや、別に気にしなくていいよ。大したことはやってないし」

手をひらひらとさせて答えると、ハナコはくすくすと笑う。
「相変わらずお優しいんですね。思えば以前はよく公園であなたに抱いてもらったものです、優しく撫でてもらうのが心地よくて……きゃっ！」
おもわず口の中身を吹き出してむせ返る。言い方ァ！　いや違うぞ！　決して、断じてそういう意味ではないぞ！
単純に、ただの人懐っこい猫だった頃の彼女を抱っこしてあげていたというだけの話だ。……いや、だから僕は一体誰に言い訳してるのかと。
「ご、ごめんちょっとむせただけだから」
「そうですか？　気を付けて下さいね……？」
ペットボトルをカートに戻し、気を取り直した僕は三人にいつもの質問をぶつけてみることにした。
「ところで、あなたがたの仲間で他に人間になった子はいますか？」
「猫の仲間、ですか？」
ハナコはダンシャクたちと顔を見合わせると、一同揃って首を横に振った。
「いや、おらんな。少し探してみたが、この辺りで人になった猫はオレらだけだ」
「そもそもアレは夜中の集会中に起きたからな、おやじは寝てたけど」
「人間鳥なら見ましたよ、普通に飛んでてびっくりしちゃいました」

確かここらで管理されてる地域猫は１４匹だったはず。その内の三匹となると、大体二割程度か。隕石の光を浴びた内で適性があるやつが擬人化するんだろうが、一体どんな基準なのやら。

色々と話し込んでいる内に、日が落ち始めている事に気づいた。

「あー、そろそろ僕は帰ります」

僕がそう言うと、三人は談笑をやめてこちらへ向き直る。

「おう、てゅーるありがとな」

「俺たちはだいたい公園にいるから良かったら会いに来いよ」

「この姿だと難しいかもですが、また抱いてくれると嬉しいです」

だから言い方ァ！　人を重度のズーフィリアみたいに言わないでほしい……。

擬人化したハナコはなかなかの美人さんなので、そういう事言われると正直ドキドキしてしまう。

思えば今までに出会った擬人化動物たちはみんな目鼻立ちの整った顔をしていた。

容姿でいえば、シーザーやダンシャクなど、高齢の子ほど大人っぽい姿になる傾向があるようにも見える。

しかし、シーザーの方が年上だが、見た目はダンシャクの方がより大人びている。

もっと数を調べないと分からないだろうけど、ひょっとしたら飼育下と野生の差が影

響しているのではなかろうか。確かハナコとクーは同じ年に生まれた筈なのに、ハナコの方が数段成長した姿をしていたし。

三人に手を振って路地を出ると、僕はカートを引いて帰路についた。

そうだ、帰りにシーザーに食べ物を渡してから帰ろう。

第五話　けものの価値観　1

「ただいま」
「おかえりっ！」
玄関を開けると、三つ指座りで待機していたクーが立ち上がって駆け寄ってきた。
……猫時代からの癖なんだろうけど、その座り方ははしたないのでやめなさい。
指摘するべきか否かを検討していると、クーが僕の服をクンクンと嗅ぎ回っていた。
「あれ、にーちゃ、他の猫と会ってきた？　このにおいは誰だろ……あ、シーザーのにおいもする」
「ああ……うん、この辺りでクーと同じように人の姿になった子が何人か居たからね」
恒例の「クー・チェック」も人の姿でやられるとなんだか妙に背筋がぞわぞわする。ヤンデレっぽいからかな？
ちなみに、三隅夫妻が何度かシーザーを連れてきているので彼女らは知り合いだ。
お互い物怖じしないのでそこそこ仲良くしていた記憶がある。
先程帰り際に食べ物を渡した際にひしっとハグされたので、シーザーのにおいはさぞしっかり付いているだろう。

「色々買ったから、今晩はちゃんとしたご飯食べれるぞ」
「ごはん！　あっ、外にあるやつだよね、クーが運ぶー！」
「重いから無理しなくていいよ」
「だいじょうぶだいじょうぶー！」
　クーは嬉しそうに玄関前に置いたカートに駆け寄っていく。
　その様子はなんとなく、お手伝いしたがりの小さな子供のように見えてちょっとほっこりと――。
「えっ」
「これなんだろ……ん？」
　戻ってきたクーを見て、思わず絶句してしまう。缶詰等の保存食や対元動物用の交渉材料の入った方の袋もかなりの重さだが、それを片手に持った上で反対の手で米袋（10kg二袋）を指の力だけで軽々と持ち上げている。
「い、いや……なんでもないよ。キッチンの方に持っていってくれる？」
「うん、わかった！　ごっはんごはんー！」
「あ、走ったら危ないから……」
「はーい！」
　軽く見積もっても自分の体重の六割は重さがある荷物を持ってふらつきもせずに家

の奥に駆けて行くクーの背中に、とっさに声を掛ける。
……最初にすがりつかれた時にも力が強いとは思ったが、これはちょっと予想を遥かに超えている。
アライグマの少女とダンシャクが対峙していた時はせいぜいが成人男性の喧嘩に巻き込まれるくらいを想定していたが、これは明らかにそれ以上だろう。
外で知らない擬人化動物に遭遇した時はもう少しこちらも気をつけるべきかもしれないと認識を改めた。
「冷凍食品はここ、冷凍庫に入れて……」
「つめたーい！　これは？」
「缶詰は、まあ適当にこっちの棚に入れとこう。インスタント麺も」
「はーい――あっ。……えっと、にーちゃ、あのね？」
「うん？」
買って来たものをしまっていると、急にクーがしおらしい声を出す。
どうしたのだろうと思って顔を見つめると、彼女は気まずそうに目を逸らし、僕の背後の壁を指さした。
振り返った僕は、再び絶句する事となる。
「その、ご、ごめんなさい。ちょっとつめをとごうと思ったら……」

今まで気付かなかったが、僕の背後にある壁、木製の柱のクーの目の高さあたり。
そこに熊や虎が引っ掻いたのかと思うような、大きな爪痕が深く四筋刻まれていた。
一掻き目でマズいと気付いたのだろう、被害はそれだけだ。
「――あ、あー、うん。ちょっとこれは、うん……つめとぎ板用意するから、家の壁とか床はやめようね。ご飯の準備するから居間で待ってて」
「うん……ごめんなさい」
耳を伏せ、シュンとしたクーが居間へと消えていくのを確認してから、小さくため息をつく。両頬を軽く叩いて気合を入れた。
クーに対し、不覚にも少し怯えてしまった事実を反省する。クーはちょっとパワーアップしすぎた感はあるが、大切な家族だ。
クーは決して人を引っ掻いたりしないし、甘噛み以上の強さで噛み付いたりもしない。
今日接した時にも、力加減は常に問題なくできていた。
環境が変わって大変なのは彼女も同じだ、僕がしっかり支えてやらないと。
「……さて、と。久しぶりに腕を振るいますかね」
※※
「わぁーっ！　なにこれ美味しそう！」

スプーンを鷲掴みにして目をキラキラさせるクーの目の前には、特製のオムライスが鎮座している。

鶏肉が手に入らなかったので中身はシーチキンライスだ、そしてふわとろ卵はかつて練習していたので自信がある。

「シーチキンオムライスだよ。冷めない内にめしあがれ」

「いただきまーす！」

クーは朝よりはこなれた手付きでオムライスをすくい、口へ運んでいく。口の周りをケチャップで汚しながらおいしいおいしいと喜ぶ彼女にほっこりしつつ、肉球を象ったケチャップを崩しながら自分も一口。

うん、シーチキンライスも中々いける。さてもう一口……。

「――あれ？　上からなんか音してない？」

「上？　二階からかな？」

突然、クーがそんなことを言い出すので食べる手を止める。耳を澄ませてみれば、どんどんという乱暴なノックのような音が微かに聞こえた。

「ホントだ……よく聞こえたな」

「えへ、耳の良さには自信があるよー！」

たしかにクーは僕が帰ってくると確実に玄関で待機して迎えてくれる。帰ってくる

足音で判別しているのだろうか？　って、そんな悠長に構えている場合じゃなかった。
食事を中断し、二人で二階へ向かう。
後ろには万一のためにクーが控えてくれている。情けないが、場合によっては守ってもらう事になるだろう。
ぎっ、ぎっと階段の軋む音を聞きながら二階の踊り場まで到着する。
「にーちゃの部屋からだね」
「ああ……なんか声も聞こえるな」
そっと扉を開け、自室に入る。室内に異常はない、声はベランダのガラス戸の向こうから聞こえてくるらしい。
カーテン越しに人のシルエットが見える。
電気をつけると、ノックが止んだ。
「――あっ……やっと……けて……」
「……」
ガラス越しなので聴き取りづらいが、女性の声らしい。僕はそっとカーテンを開けると白と黒のマダラ模様が目に飛び込んできた。
「……うわっ」
見慣れないカラーリングに一瞬面食らったが、それはよく見れば今朝会ったばかりの

擬人化カラス――チビ助であった。
黒かった服や髪は激しく汚れており、その顔は涙でぐちゃぐちゃ。
……なんとなく、理由を察してしまった。
「だーれ？」
「あー、一応知り合いだよ。今開けるから――あ゛っ!?」
ガラス戸を開けると、チビ助が勢いよく飛びついてきた。反射的に抱き留めてしまい、直後にとてつもない後悔が襲う。彼女の背中に触れた手はそのヌメっとした感触と独特の臭気に全身の鳥肌が立つのを感じる。
――彼女は、カラスのフンで全身が覆われていた。
「わぁあああああん!!」
「うぎゃあああああ!!」
※※
「うぇっ……ぐすっ……ぐぅう……!」
目鼻を真っ赤にしながら嗚咽を漏らすフンまみれのチビ助。彼女に抱きつかれた僕もまたフンまみれである。
泣きたいのはこっちだ。
泣きじゃくる彼女の話を聞いて要約すると「強くなった肉体で餌場を荒らしていたら

集団で逆襲された」となる。

いっそ清々しいほどに自業自得っぷりに言葉も出ない。

「みんな酷いのよ！　飛んでるところを後ろから蹴るわつつくわで落っことされるし……何がひどいってみんな羽毛の無い所ばっかり狙ってつつくのよ！　あげくの果てに……ううっ―！」

「そりゃ独り占めしたら仕返しもされるよ」

「だって……だって、お腹空いてるんだもんうわあああん！」

顔を伏せて号泣するチビ助の姿は完全に大きな駄々っ子のそれである。

「チビ助ちゃん、お腹がすいててもひとり占めはだめだよ」

「飢えるってすっごく苦しいのよ！　苦労知らず（飼い猫）のアンタに分かるかしら、あのひもじい感覚が……！」

「え、あの……ごめん」

思わぬ反論を受けてシュンとするクー。

その飢えを仲間に強いた事を棚上げする発言に呆れてしまうが、飼い猫にカラスの苦労がわからないのは確かだ。クロウだけに……いや、やっぱ今のナシで。

「ひとまず、そのフンをどうにかしようか。それで歩き回られたらたまらん」

そう言ってまだぐすぐす泣いているチビ助を立ち上がらせると、一階の風呂場に連れ

込んだ。……無論、変な意味ではない。

「ここがニンゲンの水浴び場なの？」

「そうだよ、ここを捻ったらこの先から水が出るから……うわっ！」

説明している間に指さした先の蛇口をひねるチビ助。シャワーから冷たい水が噴出し、僕は濡れないように慌てて退避する。

「ほんとに水がでた……ニンゲンの巣ってすごいのね……」

「あーっ、服がビチャビチャに……あれ？」

着衣で水を浴びながらシャワーヘッドをしげしげと見つめるチビ助を見て、奇妙な事に気づく。まず、一部生乾きだったのもあってかフンが綺麗に落ちていく。

もう一つは、明らかに撥水加工などされていない布地が水をしっかりと弾いてる事だ。その性質はまるでカラスの羽そのもの。

擬人化動物（彼女ら）の不思議な性質を偶然にもまた一つ知ることができた。怪我の功名ってやつかな。

そう思っていると、チビ助がこちらをじっと見ている事に気づく。

……はっ、着衣とはいえ、女性が水浴びをしているところをじっと見つめるのは不味かっ――。

「ボサっとしてないでアンタもさっさと洗いなさいよ、ばっちいわよ」
「うおあっ、冷たっ!?」
いきなり腕を捕まれ、シャワーの前に引きずり出され思いっきり冷水を被ってしまう。滅茶苦茶冷たい！
慌ててシャツを脱ぎ捨て彼女の為に用意していたバスタオルで身体を拭く。そもそもばっちいのは誰のせいかと！
「……あのね、人間は服のまま水浴びしたりしないの！　それに冷たい水も苦手なんだよ……ツくしっ！」
震えながら洗濯済みのシャツを取り出していると、チビ助が目を真ん丸にしてこちらを凝視していた。いきなり脱いだ事にびっくりしたのかと思ったが、人間らしい羞恥心を持ち合わせていないようだし……なんだ？
「アンタ……羽毛、いえ、毛皮を外せるの……!?」
……脱いだ事に驚いたという解釈で合ってたようだ。しかしその理由が斜め上過ぎてちょっとびっくり。
そういえば先程「羽毛がない場所をつつかれた」と言っていたが、そういう意味だったらしい。
「人間は皮が薄くて弱いからこうやって服を着て体を守ってるんだよ」

「へぇーっ、凄いわね！　あ、そうだ、あたしもニンゲンになってるんだし、ひょっとしてこれも取れるのかしら――」
「あっ、ちょっと待っ……！」
　僕の説明に感嘆した彼女は何を思ったのか自らの服に手をかけ、僕がやったように捲りあげようとする。慌てて止めに入ろうとすると、彼女がいきなりその場ですっ転んだ。
「きゃぁっ、つ、冷たいぃ!?」
「えっ？　急にどうし……」
　ガタガタと震えながらシャワーの範囲から這いずりだしてくるチビ助に、今度は僕が目を丸くする番であった。先程まで平気そうにしていたのになぜ……？
　そう思ってよく見ると、先程まで水を弾いていた服がぐっしょりと水を吸っていた。
「……はっ？　んん？」
　頭の中を疑問符が満たして行く気分だった。一体、今何が起こったというのか、理解が追いついていない。
「う、う、あっ……さ、寒い、寒いわ！　ぐっ、あっ……と、取れない！」
「……はっ」
　冷たさから逃れようと肌に貼り付いた服を脱ごうとするものの、その構造を理解して

いないのかその場でもがき苦しむチビ助の姿に気付き、慌ててシャワーを止めてやる。
「ににに、ニンゲン！　お、おねが、お願い、これ取って……死んじゃう！」
「えっ、あ、でも……」
相手はカラスとはいえ若い女性の姿をしている。それを僕が脱がせるとかちょっとまずいのではないか？
混乱した思考で躊躇っていると、ついにしびれを切らしたチビ助が僕の足にしがみついて絶叫する。痛い！　力超強い！
「ああっもう寒いから早くしてッ!?」
「わ、わかったから縋り付くな！　いたたっ、折れる！　足折れるから！」
※※
「はふぅ……あったかいぃ……」
その後ズクズクに濡れた黒いセーラー服のようなものを四苦八苦しながらも脱がしてやって、更にバスタオルで身体を包み込んでやって、なおもガタガタと震える彼女の為にシャワーでお湯を出してやった。
最初はお湯に驚いていた彼女だが、バスタブ内に座らせお湯を溜めていくと、体が浸かる頃には見事なまでに蕩けきった表情になっていた。
気持ちが良いからなのか、頭部の翼のようなものが時々パタパタと羽ばたいている。

……あれどうなってるんだろう、触ってみても骨とか入ってないし。
「ふぁぁ……オフロってこんなに気持ちいいのね……やっぱニンゲンって凄いわ」
「そりゃあ良うござんしたね……ッくし！」
今までここまでどっぷりと水に浸かったことなどないだろうし、羽毛があるから直に水を感じた事もないのだろう。
お湯となれば尚更だ。
「さっきはごめんね……」
「ん、なにが？」
「ほら、さっき冷たい水に引きずり込んじゃったじゃない。あんなに冷たくて寒いなんて思わなかったの……だから、ごめん」
湯船の中でシュンとうつむくチビ助。
自分本位なところはあるものの、やはり根は素直ないい子なんだなと思うと微笑ましく思えた。
「怒ってないよ、でもまあ、次からは気をつけてな。あと、人間の女の子……メス？　は本来心許した男……オス以外の前じゃ服を全部脱がないからそれも心に留めといてね」
「そうなの？　でもまあ、あなたには感謝してるし、心許した相手といえるんじゃないかしら。……ほら、あなたもお湯に浸かりなさいよ」

寒いでしょ、と言ってスペースを開ける彼女に思わず苦笑する。
「遠慮しとく。人間が裸で一緒にお風呂に入るのはつがい同士だけだから」
「へえ、でもあなただったらツガイにしてもいいかも。親切だし」
「人間はそんな軽くつがい作らない……事もないかもだけど、知り合ったばかりだからな、それも遠慮しとく。でもシャワーは浴びるわ、風邪引きそう」
あまりの価値観の違いから一人だけ恥ずかしがってるのが馬鹿らしくなってきたのでタオルだけ腰に巻いてシャワーを使わせてもらった。
その後、チビ助は長く浸かり過ぎてか見事にのぼせた。
カラスはやっぱり行水程度が最適なのかもしれない。

第六話　けものの価値観　2

「これが人間の毛皮……ちょっとあたしには大きいかも」
「君に合うサイズの服とかないからなぁ」
　のぼせたチビ助を介助しながら体を拭かせ、ジャージを着せてやるのは少し骨が折れた。主に「柔らかい」とか「洗ったからいい匂いが」とかの煩悩やあらぬところに向きそうな視線を抑制する事にではあるが。
　自分の胸を掴んで「なにかしら、邪魔ね」とかマジでやめてください。鳥類には馴染みがなくても人類的にはヤバイんです。
　彼女はおそらく全く気にしないであろうが、無知もとい価値観の違いにつけ込んでセクハラまがいの視線を向けるのは憚られた。
　というかこっちも困るから少しは気にしてほしいけど、その辺の倫理観を彼女らに植え付けるとかどうやればいいんだろう。
「変わった毛色ねえ、外で見たニンゲンの中でもあまり見かけないわ」
「まあ小豆色のジャージとか着て出歩く人は少ないだろうね……」
　ちなみに高校時代のジャージである。男女ともに「ダサい」と不評ですでにデザイン

変更がなされたと噂に聞いていた。
黙ってればミステリアスな美少女といった風貌のチビ助ですらイモく見えるから凄い。
というか、よく見たら尾羽が明らかに布地を貫通してるんだけど……もうこれに関してツッコんでもしかたないか。
「うう……それにしてもだるいわね。オフロはとても気持ち良かったけど、この感覚はあまり好きになれないかも」
「ゆっくりお湯に浸かり過ぎたな、程々で出れば酷くはならないよ、っと」
居間に戻ると、支えてたチビ助をソファに横にならせる。カーペットの上にはお腹をぽんぽんにしたクーが伸びていた。……どうせ冷めちゃうから僕のオムライスも食べていいとは言ったけど、まさか全部食べるとは。
「あ、おかえりー。なんか騒いでたみたいだけど大丈夫だった？」
「大したことないから大丈夫だよ……あ、ちょっと頼みがあるんだけど」
首を傾げるクーにうちわを渡しチビ助の頭を扇いでやるように頼むと、彼女は二つ返事で了承してくれた。
「じゃあ、僕はちょっとキッチン行ってくるからあとよろしくね」
「わかった！」

ぐったりするチビ助をパタパタ扇ぐクーに軽く手を振ると、僕はキッチンへ向かう。
一口しか食べられなかったオムライスを再生産しなければ。
※※
「……何やってんの？」
「遊んでるの」
「遊んであげてる」
オムライスを二皿用意して居間へ戻ると、カーペットに寝っ転がる二人の姿が見えた。うつ伏せで頬杖をつくチビ助の手には猫じゃらしが握られており、仰向けで寝るクーの顔の前でパタパタと揺らしてはそれをクーが捕まえるという遊びをやっている様子。
ちょっとだらけ過ぎではないか。
「……とりあえず、ご飯作ったからチビ助はこっちに来なよ」
「あら、ありがとう！　さっきからお腹空いて仕方なかったのよ……」
「わたしはおなかいっぱーい！」
そりゃオムライス二人前食べたらね……。チビ助を椅子に座らせると、目の前にオムライスと食器を並べてやる。
彼女はぱちくりと目を瞬かせると、僕と料理を交互に見つめた。

「これ、食べていいの……？」
「いいよ、そのために多めに作ったんだから。食べ方はわかる？」
「あなたを見て真似するわ」
「分かった。それじゃ、いただきます」
それを見て、たどたどしいながらもチビ助が続いて「いただきます？」と合掌する。別にそこまで真似しなくて良かったんだけど。
今度はカラスの足跡を模したケチャップをスプーンで広げ、端からひと掬いする。
彼女が僕の手元を見ながらスプーンで掬い終えるのを確認して、ふーふーと吐息で冷まし、まずは一口。咀嚼して、飲み込む。
彼女もそれに続き、掬ったオムライスへ吐息を吹きかけゆっくりと口へ入れると、三度咀嚼し、飲み込んだ。
そして、そのままの体制で固まった。
「どう？」
チビ助は目を見開き、再び僕とオムライスを見比べる。
「――おい、しい……!!　おいしいわ！」
そう言って、チビ助は感極まった様子で身震いする。ひと掬いし、また口に入れる。
また掬い、口に入れる。

「こんなおいしいの、初めて食べた……これに比べたら、今まであたしが食べてきたのなんて、はっきり言ってゴミよ……！」

いや、まあ……実際ゴミ漁るしね君ら。

しかし、こうも美味しい美味しいと興奮されると作った甲斐があると思える。

さして人に料理を出した経験があるわけではなかったが、これは癖になりそうだ。

ガツガツと勢いよくさらえていく彼女の皿へ、自分の皿のオムライスを分けてやる。花の咲くような笑みを返す彼女に、照れくさくなってしまう。

結局、自分の皿から半分近く彼女に分けてしまったが、不思議と満ち足りた気分になった。

※※

「ごちそうさまでした」

「ご、ごちそうさまでした？」

チビ助が食べ終わるのを見計らって合掌すると、彼女もそれを真似る。その様子がなんとも微笑ましい。

僕は立ち上がり、食器を一纏めに持った。

「それじゃあ洗い物行ってくるから」

「あ、あの……よくわからないけど、何かするなら手伝うわ」

「そう？　じゃあ、お願いしようかな」
　別に手伝ってもらうような量でもないが、好意を無下にしたくはない。彼女を伴って入ったキッチンはやや手狭に感じた。
「それじゃ僕がお皿洗うから、これで水を拭き取ってくれる？」
「わかったわ」
　給湯器から出るお湯で汚れを概ね落とし、洗剤を垂らしたスポンジで全体を擦り上げる。手元で泡立つそれを興味深げに見つめる視線を感じながら泡を洗い落とし、待機している彼女に手渡す。
「はい、落とさないようにね」
「任せなさい」
　たどたどしい手付きで念入りに皿を拭う姿を尻目に、僕は他の食器を洗い始める。
　時折食器の擦れる音と、水の音だけがキッチンに響く。
「ねえ」
「ん、なに？」
「あなた、やっぱりあたしとつがいになってくれないかしら？」
「え――危なっ！」
　そんな提案に、焦って思わず洗っていた皿を取り落としそうになる。

僕はなんとか皿を保持できた事に胸をなでおろすと、横に立つ彼女へ顔を向ける。
まるで人形のように整った顔が真っ直ぐな眼差しを向けている。
……どうやら、真剣であるらしい。
「あたしね、この体になって仲間から追い立てられて、少し不安になってた」
追い立てられたのは調子に乗って餌場を荒らしたからだ。しかし、姿が変わって、正しい振る舞い方がわからないのはわからなくもない。
「どうしよう、ってなって一番初めに思いついたのがここだったのよ。いつもご飯をくれて、親切だったから。それでここに来たの」
そう言って、彼女は拭き終えた皿を置く。
「いきなり巣に押しかけて、追い出されてもしかたなかった。でもあなたは巣に入れてくれて、オフロやごはんの世話をしてくれた。……あなたは、知り合ったばかりってていうけどさ、あたしたちからすれば、お互い気が合うと思ったらそれで良いと思うの。それにニンゲンは軽々しくツガイを作らないって言ったけど、カラスだってそうよ？」
彼女は笑みを浮かべると、こちらに顔を寄せて囁くように言った。
「カラス(あたしたち)は一度作ったツガイと一生添い遂げるの。あたしはその相手が、あなたでいいと思ったのよ」
どうかしら、と問うチビ助に対して返す言葉が、なかなか出てこない。

手元の作業は完全に止まり、タライからは泡が消え始めていた。
数秒か、それとも数分か。長く感じる思考の後に、僕は口を開く。
「――気持ちは嬉しいけど、今はまだ答えは出せないかな」
「……どうして？」
「人間の人生ってすごく長いんだよ、カラスが生まれて死ぬまでを何度も何度も繰り返せるくらいには」
僕は静かに、皿洗いを再開する。スポンジで拭った皿を水で洗い流す。
「だから人間は時間をかけて、〝この人と老いて死ぬまで一緒にいたい〟って思える相手かどうかを確かめてから、つがいになるんだよ」
僕は綺麗になった皿を無言の彼女に差し出した。
「だから、人間には便利な言葉があるんだ」
「……それは、なに？」
濡れた皿を受け取りながら僕の言葉を待つ彼女に、笑顔で告げる。
「まずはお友達から始めましょう、ってね」
チビ助はしばし呆然としたあと、小さく笑った。
「そう、ね……あたしもニンゲンになったんだから、ニンゲンの流儀には合わせなくっちゃいけないわよね。わかったわ、お友達になりましょ！」

「よろこんで。さあ、そのお皿拭き終わったら終わりだよ」
「わかったわ！」
彼女らはなんの因果か、人の姿になってしまった「人間初心者」だ。
きっとこれから彼女らにまつわる問題は多く発生するだろう。その上で、獣たちとは違う存在になった彼女らと人間の関係は避けられないものになるはずだ。
だから、できれば手の届く範囲くらいは、人間を学ぶ手助けをしてやりたいものだと僕は思った。
※※
「――ちょ、まっ……!?　ストオオップ!!」
「えっ、なになに!?」
キッチンから戻った僕らを待ち構えていたのは、先程までのしんみりした空気をぶち壊してしまう光景だった。
猫用トイレにしゃがみ込むクーの姿である。彼女らのトイレ事情について、完全に失念していた……！　教えてもいないのにトイレを使ってくれるわけがなかったのだ。
「えっと、クー。悪いけどこれからは猫用トイレじゃなくて人間用のトイレ使おっか！」
「え、駄目だったの？　もう朝から何回か使っちゃったけど……」
……手遅れだったらしい。あとで掃除と撤去しないと。というか、声をかけて立ち上

がるまでの間に下着を上げた様子が見えなかったけど、まさか履いたまま？
「うん、人の姿になったんだから、ね？」
「あ、それってあたしも？」
「もちろんだ。ただのカラスみたいにその辺でしちゃ駄目だよ」
「……めんどくさいわね、ニンゲンって」
「ねー！」
「ねーじゃなくて。とりあえず、説明するからちゃんと覚えてな……」
「はーい」
　そんなこんなで、二人には人間としての振る舞いの第一歩として、トイレの使い方を覚えてもらった。……クー曰く、やはり服は脱がなくても排泄は問題なく可能らしいが、一応正しい手順は教えた。
　……ますます彼女らの服が不思議な物質に思えてきたのだった。
　時刻は夜の２２時。チビ助やクーと話をしていると、人間とは違った視点の話が聞けて中々に面白いものであった。
　人が当たり前のようにしている行動が、動物たちにとってどう映っていたかなど、なかなかに滑稽で面白い。
　そんな風に過ごしていると、チビ助がうつらうつらとし始める。

聞いてみれば、どうもカラスは昼行性の鳥であるらしい。
「無理して起きてなくても良かったのに」
「あなた達とお話するのはとても楽しいもの。巣の中もずっと明るいし、つい時間を忘れちゃった……」
そう言って大あくびをするチビ助。少し悪いことをしてしまったかな。
「じゃ、今日はもう寝るか。……父さんの部屋が空いてるから使いなよ、ちょっと、いやかなり埃っぽいかもしれないけど」
「泊めてもらえるだけありがたいわ。ニンゲンの巣に泊るなんて初めてだから、ちょっとどきどきしちゃうわね」
「クーはどうする？　僕らは上がるけど」
「もう少し下にいる。電気は消していいよ」
そもそもクーはだいたい居間で寝ていることが多かったか。今の骨格だといつも通り床で寝るのは疲れそうではあるが……。
居間の電気を消すと、クーにおやすみを言って二階へ上がった。
「ここが父さんの部屋だ……ちょっと埃っぽいな、また掃除しないと」
半月ほど前に掃除したはずだが、机には薄っすらと埃が積もっている。

ベッドの布団は敷きっぱなしの物だが……まあ、大丈夫だろう。
「これがニンゲンの寝床なのね、ニンゲンはどうやって眠るの？」
「この上に横になって布団を被って眠る。まあ、チビ助が寝やすいようにしてくれたらいいよ」
「せっかくニンゲンになったから、ニンゲンの寝方を試してみるわ」
「そう、それじゃあおやすみ」
「うん、えーと、おやすみ？」
チビ助が床についたのを確認して部屋の電気を消すと、反対側の自室に入って、椅子に腰を下ろす。
……さて、今日はいろいろな事があったし、ちょっと考えをまとめてから眠る事にしようかな。
明日にはきっと町の人も帰ってくるだろうし、忙しくなりそうだ。

星野久遠の手記　1

■月□日　晴れ

ついに訪れたこの日、隕石は衝突寸前に消滅して世界は滅ばなかった。

今思えば、ヤケを起こしたりしなくて本当によかったと思う。

今頃は警察や消防は大忙しなんじゃないかな？

人の多い所では犯罪が多発していて、最後まで職務を全うしようとした警官も居たみたいだけど手が足りないとか聞いたし。

自らの手で命を断った人も多いというけど、ちょっと理解ができないな。わざわざ覚悟決めて死ななくても隕石が落ちれば一瞬で終わるのに。

うちの近所はほとんどの人がシェルターを目指したらしくて、町中には誰もいなかった。交通機関が駄目になってるんだろうね。

前置きはこの辺にして……どうやら、隕石による危機が去ったかとおもったら、今度は奇妙な現象が起こっているようだ。

動物の一部が、人間の姿に変化してしまったんだ。

あまりに非現実的な話だと思うけど、なにせ抱っこしてたクーが突然女の子の姿に変

化したんだからしょうがない。

この奇妙な現象について分かったことを自分なりに纏めておこうと思う。

【この現象は隕石が原因である】

これは間違いない。隕石が消滅する際に放った虹色の光に目が眩んで、次に目を開けた時にはもう変身してたから。

【擬人化動物はみんな女性の姿になる?】

雄猫のクー、ダンシャク、まゆげ、雄犬のシーザーなど元の性別が雄であることを確認できる子らも含めて全員が女性になっている。

ただし共通事項として全員が去勢／避妊済みのため、それが影響している可能性は否定できない。

外見年齢は

ダンシャク〉シーザー〉まゆげ≧ハナコ〉クー

に見えるが、実年齢としてはたしか

ダンシャク13、シーザー16、まゆげ7、ハナコ&クー4

だった筈なので、野生個体と飼育個体で変化後の外見年齢に差が出ている可能性がある。

【変化した動物は言葉を理解し、会話ができる】

日常会話をこなす程度の語彙力、知識は備えている様子。
どの程度の知識があるかは不明だけど、少なくとも実際に見聞きしていた範囲の事はわかるようだ。
動物時代の記憶もちゃんとあるらしい。
【すべての動物が変化する訳ではない】
カラスや地域猫たちなど、変化した者とそうでないものが混在している様子で、数が分かる地域猫たちから推測するに変化率は二割ほど？
変化する、しないの条件は不明。
【変化した動物は、元の外見を反映した服装になる】
獣耳と尻尾を備えており、服装は種族ごとに統一される。
クーや地域猫たち「猫」を例に上げると、ノースリーブのトップスとスカート、アームカバー、ニーソックス、あと裏に肉球のデザイン（柔らかい）のある靴を共通して着用。
これらの色合いは元の模様を反映したものになる。
クーの尻尾やダンシャクの顔など、分かりやすい特徴があれば元になった動物について判別が可能。
服は毛皮に相当するらしく、クーたちは毛づくろいで服を舐めて綺麗にできるのと、

カラスの服は水を弾くのを確認。
服は脱ぐ事もできるようだが、着用していない間は上記の特性を失うらしくカラスのチビ助が脱ごうとした瞬間特性を失ってずぶ濡れになった。
服じゃなくて、本体の能力？　乾いたあと着せ直せば特性が復活するのかは要検証。さらに尻尾や排泄物が服を貫通するのも確認。
ちょっと魔法じみた要素が多すぎて理解が追いつかない。
あと、獣耳の他に人間の耳もちゃんとある。確認したらどちらも機能していたので多分、可聴域が違う？
【変化した動物の能力】
ちょっと現実離れしてるレベル。女子中学生くらいの体格をしたクーの細腕で１０ｋｇの米袋２つを片手で苦もなくつまみ上げた。しがみつかれた時も引き剥がせなかったし、明らかに僕より圧倒的に力がある。
爪も超凄い、木製の柱がバターみたいにスパッとえぐれた。爪とぎの犯人であるクーは注意しておいたが、ちょっと怖い。
あと、擬人化した鳥は飛べるようだ。髪の一部が翼の役割をしていて、隕石の光に似たキラキラを撒き散らしながら飛ぶ。
大きさ的に翼は飾りで、恐らく隕石由来の不思議な力で飛んでいると思われる。不思

議すぎる。目の保養になる。

【変化した動物のコミニュケーション能力】

人間とは問題なく意思疎通が可能。会話が可能なためか、アライグマやカラスのような警戒心の強い種でも友好的に接することができた。

変化した動物は元動物から見て「同族の匂いがする人間」であるらしく（まゆげ情報）、元動物と接しても「仕草を見てある程度察する」程度の事しか分からない（ハナコ情報）

人馴れしない、警戒心の強い動物の場合たとえ親子でも通じ合うことは困難な様子（例：アライグマ）

……これ、群れをなす動物に大惨事が起きているのでは？

今のところ、わかってるのはこのくらいかな？

非常に濃密な一日だったし、なんかめちゃくちゃ疲れた。

クーはまだ起きてるみたいだけど、先に寝よう。

変化した世界
第七話　違和感

――気付けば僕は暗い部屋の中で横たわっていた。全身はきつく縛り上げられてでもいるのか、身動きが取れない。

「お目覚めかな?」

男の低い声が部屋に響く。視線だけで声の主を探すと、仰向けになった僕の頭の側に一人の男が立っていた。……不気味な男だ。

彫りの深い顔をした男の目元はサングラスで隠されており、その表情は読み取れない。

黒いスーツに身を包んだ男が、口元を歪めて笑う。

「早く吐いた方が身の為だぞ」

「絶対に、教えるもんか」

僕の口をついて出たのは、そんな言葉だった。……はて、何を教えてはいけないのだろう。まるで現実感がない。

男は僕の返答に不満らしく、顔を再び仏頂面に戻す。

「そうか、ならば吐きたくなるようにしてやらなくてはな。だがその前に、もう一度だけチャンスをやろう。猫の女はどこだ」
「……知らないね」
　猫の女……そうだ、クーの事だ。
「あとはアレさえ捕らえお前の記憶を消せば、今回の異変は無かったことにできる。人類はああいった存在を知らないほうがいい」
「黙れ！」
　男は大袈裟に肩を落とし、やれやれといった表情でため息をつく。
　……いつの間にか、男の両手にはそれぞれ何かが握られている。
　一つは真っ白な枕……枕？
　そして、もう一つは。
「や、やめろ！　それで何をするつもりだ！」
「頭蓋骨を削る。何度か繰り返せば、お前もお話がしたくなるはずだ」
　そうやって僕の目の前で、金属のやすりを揺らす男。錆に覆われたそれは、見るからに恐ろしく、僕は全身の血の気が引いて行く思いだった。男は僕の顔にふわふわした枕を押し当てる。
　……妙に柔らかくて心地がいい。だが、息ができない。

「さあ、まずは五回から行ってみるか。ひとーつ……」
「〜〜〜っ！」
ザリザリザリ……脳内に皮膚を削る音が響く。最初だから加減しているのか、意外と痛くはない。皮膚がヒリヒリする。
「ふたーつ……」
「〜〜っ!!」
同じ場所が擦られる。力加減は先程から変わらないが、先程よりも強い痛みが走り、思わず身悶えする。
——どこかから電子音が聞こえる。
「よーっつ」
「〜〜っ!!　あ〝っ！」
痛みは激痛へと変わり、体が痙攣する。呼吸ができない。
——甲高く耳障りな電子音が、脳を強く揺さぶる。
「いつ〜〜」
「〜〜〜〜〜ッッ!!!!」
「ひゃあ——!?」
死に物狂いで体を強くよじると、どこか聞き覚えのある悲鳴が耳に入り。

Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ　Ｐｉ――――カチャン。

「ううー、びっくりしたあ……」

目を開けるとすぐ横の床でクーがひっくり返っている。ゆっくりと辺りを見回せば、見慣れた自室のベッドの上であった。

「……痛っ」

「どうしたの？」

目覚ましに叩きつけていた手を頭頂部を触れると、そのあたりの髪の毛はぐっしょりと湿っており、頭皮はヒリヒリと痛んだ。

――ああ、つまりだ。夢だったらしい。

※※

「うう～っ、ごめんねっ！　痛くするつもりなんてなかったの！」

「わかってるよ、でもやめてね……でないとまたハゲちゃうから」

涙目で謝るクーの頭を撫で付け、シャワーの準備に取り掛かる。

あの悪夢の原因は、なんてことはない。仰向けに寝る僕の上に寝そべったクーが僕の頭をホールド、毛づくろいを始めた事だ。

ヤスリは彼女の舌で、顔を覆った枕は彼女の胸である。……小柄な割にはなかなかに。

ただの猫だったときも枕元に座って頭を舐めてくれていた事があるが、それが原因で小さなハゲが一時期発生した。しばらくナイトキャップを被って寝ていたらスッパリやめてくれたので忘れていた……。

言葉が通じる今ならば言えばやめてくれるので、やはり会話できるのは素晴らしい事だと改めて感じる。

「あれっ？　炊飯器が止まってる」

シャワー上がりに炊飯器を確認すると、米が炊けていなかった。

「クー、炊飯器触ったー？」

「すいはんきってなーにー？」

キッチンまで来たクーに見てもらったが、彼女は触っていないという。……押し忘れたかな？　一応後でチビ助にも聞いてみようと思いながらもお急ぎのスイッチを押す。

次はチビ助の服だ。

ずくずくに濡れたチビ助の黒いセーラー服その他は、洗剤で洗って大丈夫なものか分からなかったので脱水だけした後ベランダに干していた。

「――よし、しっかり乾いてるな。あとはもとの性質を取り戻してるかだけど」

脱ごうとした瞬間に撥水性が消えたので、着直したところで性質が戻るかは分からな

い。まあ、駄目ならこちらにはどうもできないけど。
「チビ助、起きてるか？」
「起きてるわ」
　彼女を泊めた父の部屋を軽くノックすると、返事があったのでゆっくりと扉を開ける。ダサいジャージ姿のチビ助が父の机に座っている。
　よく見ると、置きっぱなしにしていたアルバムが開いてあった。
「アルバムを見てたのか」
「うん？　ええ、ニンゲンがよく持ってるものが置いてあったから気になって。ニンゲンは景色を切り取ってしまっておけるのね」
「写真、っていうんだ。思い出を残すためのものだよ」
　ペラペラとめくれば、何枚もの懐かしい写真が目に入る。
「これ、あなたの親かしら？　なんとなく似てる気がするわ」
　彼女が指さしたのは子供の頃に父と並んで撮った写真だった。
「これが昔の僕で、こっちが父さん。……死んじゃったけど」
「そうなの？　ニンゲンって長生きだって聞いたけど」
「数年前に事故でね……それよりほら、乾いたから着替えなよ」
「あ、あたしの羽毛！　乾かしてくれたのね、ありがとう」

洗濯籠を渡すと、チビ助は嬉しそうに顔をほころばせる。やはり着慣れた……着て生まれた？　服の方が良いのだろう。
「それじゃ、僕は下降りてるから着替えたら降りてきて。ご飯にするから」
「ごはん！　わかったわ！」
いうが早いかジャージを脱ぎ捨てるチビ助に、僕は慌てて背を向ける。これだから彼女らは心臓に悪い……。
なおチビ助は服の着方が分からなかったらしく、数分後に辛うじて着れたらしいインナー＋パンツのみの姿で泣きついて来た。僕もセーラー服の着方なんて知らないよ!!

「なんか最初と違う気がするわね……」
「うん、スカーフがなんか変になってるのは僕にもわかるけど、どう付けるのが正しいのかよく知らないんだよね」
なんか絶妙にだらしない着方になってしまい、ちょっと不良っぽい姿に。これに関してはもう人間の女性に出会ったときに聞くしかない。
「とりあえず、朝ご飯にするか。用意してくるからクー起こしといて」
「まかせて！　ほらクー、起きなさい」
「うにゃー？」

ソファで寝ているクーを揺り起こすチビ助を後目に、キッチンへ向かう。まあ、朝だし簡単なものでいいだろう。

「お魚だ、おいしー！」
「甘くておいしい……」
ご飯としじみの味噌汁（インスタント）、そしてサバの味噌煮（缶詰）。ちょっと手を抜いたけど、普通に好評な様子。美味しいよね、サバの味噌煮。
サバの身をほぐし、タレに漬け込んでから口に含んでご飯を一口。咀嚼、嚥下。……うまい。
「あ、そうだ。昨日のオムライスとサバの味噌煮、どっちが好き？」
「お魚かなー！」
「……そっかー」
ニッコリと答えるクーに、内心崩れ落ちる。調子に乗って余計な事を聞かなけりゃ良かった……！
クーはどちらかというと味が濃いものが好みらしい。そういえば、鶏ガラスープのラーメンも美味しい美味しいと食べていた。
「あたしはオムライスかなー、あのトロトロした卵が好き！」

頬に手を当てて答えるチビ助に、グッ、と心の中でガッツポーズを取る。
メンタルへのダメージは最低限に抑えられた……チビ助、グッジョブ。
お行儀は悪いが、やいのやいのと喋りながら取る食事がこんなに楽しいものだとは、久しく忘れていた感覚だった。
テレビを見ながら、おかずをねだりにくるクーを押し留めながら食べる食事も悪いものではなかったが。
そうこうしているうちに、皆食べ終わり、後片付けの時間となる。
チビ助は昨日と同じく手伝いを申し出てくれたので、ありがたく受ける。そうしてやってきたキッチンで、チビ助がある物を目ざとく見つけた。
「……あら、これは何？　おコメの匂いがするけど」
「おにぎりだよ、外で主人の帰りを待ってる犬の子がいてね。お腹を空かせてるから持っていってあげるんだ」
「へぇ、おにぎりかぁ……」
話を聞きながらも、チビ助の視線はおにぎりに注がれている。
「……多めに作ったし、ひとつ食べるか？」
「いいの？　ありがとう！」
「洗い物終わってからね」

はーいと元気に返事する食いしん坊に苦笑をこぼしながら洗い物を進める。まあ、お駄賃代わりだ。

溜め込んでいるわけでもないので、皿洗いはすぐに終わった。

※※

「それじゃあ、僕は外出するけど……」

「お昼寝してるね！」

「あー、仲間がまだ怒ってるかもしれないから、あたしもちょっと……」

……けものなのに出不精なやつらである。

おにぎりと水筒、その他を詰めたリュックをスーパーのカートに載せ、二人に見送られながら出発する。

さあ、まずはシーザーにおにぎりのデリバリーだ。

朝の静かな道を、ガラガラと金属音を立てながらカートが進んでゆく。

空を見上げれば、擬人化した鳥と見られるシルエットが遠巻きにこちらを見ているのが見えた。音が気になったのだろう。

気まぐれに手を振ってみると、ちょっと間を置いて振り返してくれた。思ったより好意的な反応が帰ってきて嬉しくなる。

しかし、今日もまだ人の姿は見えない。いかに交通機関が動いてなかろうと、車なり

なんなりで帰ってくる事は可能だとは思うが……。

そんなことを考えていると、近くでガシャガシャという妙な音が響くのが耳に入ってきた。何事かと思って見に行くと、一人の少女が自販機の取り出し口から必死な様子で手を突っ込んでいた。

すわ自販機泥棒かと焦るが、少女の頭には翼がある。彼女も擬人化した鳥らしく、おそらく悪気はないのだろう。

「あのー」

「わっ、びっくりした……なに?」

余程夢中になっていたのか、こちらの接近に気づいていなかったらしい。声をかけると少女は酷く驚いた様子で振り向いた。

その風体はチビ助のそれと同じであり、彼女もまたカラスであろうことがわかる。

二人を並べれば「同じ高校の学生さんかな?」と思うだろう。

猫たちを見て察してはいたが、種族ごとに服装が決まっているのは確定らしい。

怪訝な顔をする彼女に改めて話しかける。

「驚かせてごめん。それはお金を入れないと中身を取り出せないよ」

「それは知ってる。今まで集めたキラキラを入れたのに出てこないの……」

そう言ってカラスの少女は握り締めていた物をこちらに見せつける。

どこかから拾い集めたであろう、ひどく汚れた小銭だった。一円玉や十円玉がほとんどだが、百円玉や五百円玉まで見える。

「この大きいのはレアなのに、もうみっつも入れちゃった……それなのに何も出てこないし……わたしのキラキラ返してよぉ！」

そう言って自販機を揺する少女。ホントにガタガタ揺れてるから驚きだ。

しかしそれだけ入れて出てこないとは、ボタンを押してないのだろうか。

そう思って自販機に目をやると。

「あれ、自販機の電源が落ちてる……？」

目の前の自販機は消灯されており、どうやら電源が入っていない様子。

もしやと思って釣り銭口を漁ってみると、ジャラジャラと大量の小銭が入っていた。

「あっ、それわたしのキラキラ！　どうやって出したの？」

「ここから出てきてたよ。今はこれ、使えないみたいだね」

「ええーっ、これ使えないの？　まあ、キラキラ戻ってきたならいいか」

彼女はがっかりした様子で小銭を受け取ると、隣にあるもう一台の自販機に小銭をジャラジャラと入れ始める。

しかし、やはりそちらも電源が入っておらず、釣り銭口から出てくる。

小銭を取り出すと、彼女はため息をついて項垂れた。

「うーん、こっちも駄目みたい……。あ、キラキラの取り出し方教えてくれてありがとね！　他に使える箱がないか探してくる！」

「あ、うん」

そう言って、彼女は飛び去ってしまった。……白、いや何でもない。

しかし、自販機が停止しているのは何故だろう。壊れたのか？

……いつまでもここにいても仕方がない早くシーザーの所へ行くか。

第八話　純白からの招聘

「待て……よしっ！」
「いただきますっ！」
勢いよく僕が持つおにぎりにかぶり付くシーザー。そのまま手渡して、もぐもぐと咀嚼する姿を眺める。
いや、これは彼女が「やらないとなんかムズムズする」って言うから仕方なくだね？
……こほん。まあ、そんなこんなでシーザーへおにぎりを届けに来た訳である。
お腹を空かせたシーザーは早くも二つ目に口をつける。
四つほど平らげたところでお腹が落ち着いたらしい彼女に蓋を開けたペットボトルを手渡した。
「これがおにぎり……色々な味があって刺激的ですね、美味しかったです」
「最初が鮭、二つ目が昆布、三つ目が梅、最後のがツナだね。何が好きかわからないから同じ数だけ入れてみたけど、ちなみにどれが好き？」
「こんぶ、が甘くておいしかったです」
昆布か、また渋いところを突いてきたな。次があったら多めに入れよう。

２Ｌあった中身の三割程が無くなると、彼女は満足そうな吐息を漏らす。
「美味しいご飯を頂いた上、お掃除までしてくださるとは……本当に、くおんさまには感謝してもし足りません」
「気にしないで、三隅さんには何かとお世話になってるから。あ、残ったおにぎりは置いておくから小腹が空いたらどうぞ」
おにぎりをビニール袋ごと手渡すと、彼女の尻尾が激しく左右に揺れる。
事実として、三隅さんから受けた恩は計り知れないものである。
父が死んだ時なんて、半ばパニックになって右往左往していたところを各種手配や手続など親身になって手伝ってくれた。
頼れる親戚がいない僕にとっては、とても有難いことだった。
「――そうだ、くおんさま。一つお耳に入れたい事があります」
庭を掃除していると、何やら真剣な表情をしたシーザーが急にそんな風に話し掛けてきた。
「今朝あたりから嗅いだ事のないにおいが町の中から漂ってきてるんです。はっきりとしたことは私にも分からないんですが……」
「嗅いだことのないにおい？」
「はい、ヒトやけものなどのにおいではないと思います。何に例えればいいか、ちょっと

思い付かないんですが……なんとなく、胸がざわざわします」
そう言って、不安そうにうつむくシーザー。その尻尾は脚に巻き付いており、何かに怯えているような様子が見えた。
「この後もお出かけを続けられるようですし、心配です」
「……うーん、よくわからないけどシーザーがそう言うなら気をつけるよ」
人とも獣とも違う、嗅ぎ慣れないにおい……ね。擬人化動物達のことを指してるのかと思ったが、彼女は今朝からと言っていた。それに彼女らは姿こそ変われどにおいは同じだと聞いている。
……これは、後で調べてみた方がいいのかもしれない。

※※

「……あれっ？」
カートを押してスーパーマーケットまで到着した僕は、すぐさま異変に気が付いた。
昨日訪れた時には点いていた照明が全て消えている。自動ドアも半開きのまま止まっており、停止していることが伺えた。
それらの事から、僕はようやく一つの事実にたどり着く。
「停電、してる……？」

停止した炊飯器、動かない自動販売機、そしてスーパーの現状。
どこからどこまでかは不明だが、大規模な停電が起こっているらしい。
我が家は幸いにも太陽光発電システムが搭載されているため、日が昇ってからは自立運転機能が働いていたはずだ。
昨日、僕が眠りについたのは２３時過ぎ。
それ以降に停電が起こって炊飯器が停止、日が昇って我が家の太陽光発電が開始されたのだろう。
なぜ、そんなにも長時間に渡って停電している？　そもそも、隕石の前後ではなく、一日置いてからこの大規模停電。
……一体、何が起こっているのだろう。
それに、シーザーが言っていた「嗅ぎ覚えのないにおい」とやらも気になる。ひょっとして、何かが――
「あっ、にんげんさん！」
「――うおあっ!?」
思考を巡らせている最中に大声で呼びかけられ、心臓が飛び跳ねる。
激しい動悸に思わず胸に手を当てていると、暗がりからひたひたと小さなシルエットが駆け寄ってきた。

入り口で差し込んだ陽によって嬉しそうな顔をしたアライグマ少女の姿が照らし出されたのを認識し、僕は胸を撫で下ろす。
「びっくりした……君かぁ」
「ふはは、わたしなのだ！　にんげんさんはわたしに何か用なのか？」
「いや、ちょっとカートを返しにね」
「……ん？　それはわたしのじゃないのだ」
そう言ってきょとんとする少女に、思わず苦笑がこぼれた。うん、まあ君にじゃなくてスーパーに返しに来た訳だからね。
「そうだ、ちょっと聞きたいんだけど、今朝までずっとこの中にいた？」
一応、停電がいつ起こったのかわかる範囲で把握しておきたい。
「昨日ここへ帰ってきてからはずっとナワバリ内で食べ物を集めていたのだ！　ただ、急に中が夜になったからびっくりして少しの間外に出てたけど……」
「それだ、その〝中が夜になった〟時、お月様はどの辺りにあった？」
得意げな顔で語っていた少女だが、そう尋ねると少し虚を突かれたような表情をした。
「うぇ？　うーん……たぶん、てっぺん辺りだった、かなあ？　よく覚えてなくてごめんなさいなのだ……」

「ああいや、大体のことが分かればいいから。どうもありがとう」
「そうなのか？　お役に立てたなら、わたしも嬉しいのだ！」
どうやら、昨日の件で恩義を感じてくれているらしい。彼女はなんだかキラキラとした表情でこちらを見つめていた。
……せっかくだし、もう少し色々と聞いてみようか。
「もう一つ聞いてもいいかな？」
「なんだ？　何でも聞いてほしいのだ！」
「うん、今朝からなんだけど、この辺りで〝人間でも獣でもない、初めて嗅いだにおい〟とか感じたりしてないかな？」
シーザーが感じ取ったという、人でも獣でもないにおい。それについて少しでも情報が欲しかった。しかし、少女は首を傾げる。
「うーん、今朝はほとんどナワバリの中に居たから外のことはちょっとわからないのだ。少なくとも、この中では変なニオイはしてないなぁ」
「そっか……うん、ありがとう」
これについての情報は得られなかったか。
あとは猫たちに聞くか、そこらの鳥に声をかけて尋ねるか……。
そんなふうに思案していると。

「ふうん、なにか変なものでもこの辺りに来てるのか？　そんなに気になるなら、わたしも探してみるのだ」
「え、いいの？」
「まかせるのだ！　わたしも、結構鼻には自信があるのだ！」
そう言って自信に満ちた表情で胸を張る彼女は、小柄ながらも頼もしく見えた。
ここは厚意に甘えて、頼んでみようか。
「それじゃあ、お願いしようかな。もしかしたら危険なものかも知れないし、十分に注意して。もし見つけても、無闇に近寄らないよう――」
「そうと決まれば、さっそく調査開始なのだ！」
言うが早いか、少女は近くにあった袋を引っ掴んで走り出す。
「あっ、ちょ……」
「きっと見つけてくるから、にんげんさんは楽しみに待ってるのだ――！」
慌てて注意を促そうとするも、その声は出入り口で振り向いた彼女の元気一杯な声にかき消されてしまった。
矢のような速さで飛び出した彼女を追いかける術は僕にはなく、急速に小さくなって行く背中を見送るしかない。
「危ないことにならなければいいけど……」

虚しく空を切った手をおろし、僕は小さくため息をついた。
とりあえず、ここに来た目的は果たしたし「停電が起きている」という現状も知ることができた。
……アライグマの少女だけに任しておくのも申し訳ないので、僕自身も少しだけ町内を探索してみようか。

※※

水のペットボトルを持てるだけ持った僕は（セルフレジが動かなかったので小銭は適当に置いてきた）重くなったリュックを背負いながら思い足取りで道を歩いていた。
水道局の発電機がいつまで持つかは分からないので、帰ったら水道が止まる前に水をできるだけ確保しなければ……。
町内は昨日と変わらず静まり返っており、人の気配は感じられない。
古いスニーカーが地面を踏む音だけが辺りに響く様は、妙なもの寂しさを感じずにはいられない。こんな時に限って辺りには擬人化動物たちはおろか、普通の動物の姿すら見えないときた。
……しかし、よくよく考えてみれば「人でも獣でもないにおい」とは何なのか。
何らかの物質が撒き散らされたのか、それとも未知なるなにかがいたりするのか。

どちらにせよ、嗅覚に優れているわけでもない人間（ぼく）が探し回ったところで見つかるわけが無い。

急に自分のトンチンカンな行動を自覚した僕は、一つため息を漏らして踵を返す。

さっさと帰って水を貯めなければ。

そう、思った瞬間。不意に、強い風が体に吹き付け、僕はたまらず目を瞑る。

――ざあっ。

「……っ!?」

風が凪いだので目を開けてみると、僕は竹林の中に立っていた。風になびいた葉の擦れ合う音がやけに大きく聞こえる。

足元は粗雑な石畳で舗装されており、目の前には小ぶりな鳥居が立っていた。

「――突然、呼びつけてしまって申し訳ありません」

突然の事態に硬直していた僕の背へ鈴を転がすような澄んだ声が届いた。

――聞く者を落ち着かせるような、そんな女性の声だった。

その声にどこか懐かしさを感じた僕は、意を決してゆっくりと振り返る。

「あ……」

……振り返った先にあった光景に、僕は声を、体の自由を失った。

見覚えのある、小さな社とこぢんまりとした狐の像。……そうだ、もう随分と訪れて

いないけど、ここは幼い時分に僕がよく遊び場にしていた場所。
そして、苔生した二匹の狐の間には女性が立っている。
――白。白い女性だ。
足元まで届きそうなほどに長く美しい白髪は、風を受け穏やかに揺れており。
その髪の隙間から白く大きな獣耳がピンと空を指していた。
首元にファーのついたブレザーやその下から覗くシャツ、そして膝上までのやや短いスカートや足袋、下駄やその鼻緒に至るまで、全てが純白。
左腿には白い紐が結わえられており、胸元を飾る赤いリボンとともに強い存在感を放っている。
「あの……あなたは……」
絞り出すように声を出すと、こちらを射抜いていた女性の金色の目が揺れる。
女性の背後に見える、これまた白く、巨大な尻尾が地面に垂れた。
尾に巻き付いた飾りであろうか、金色の輪が、陽を受けて煌めいている。
次の瞬間、僕の身体は自由となった。どっと汗が噴き出す。
「――重ね重ね申し訳ありません、力の抑えが足りていなかったようです」
そう言って、彼女は自らの失態を悔いるように目を伏せる。
目の前の強い気配を放つ擬人化動物は――いや、違うな。

「お久しぶり……いえ、貴方にとってははじめましてでしょうか」

――それは人ではなく、また獣でもない者。

「私（わたくし）は稲荷神。イナリ、とでもお呼び下さい」

正真正銘の神様が、微笑んでいた――。

第九話　視線

「本当に懐かしい……貴方が最後にここを訪れてから、もう随分と経ってしまいましたね。お元気そうで、なによりです」

そう言って、お稲荷様（オイナリサマ）は苔生した狐の像を撫でる。

……僕は小学校の高学年まで、この近くに住んでいたのだ。生来の性格や片親である事もあってか、当時の僕には放課後や休日に遊びへ誘ってくれるような友達も居なかった。

誰もいない家で過ごすのが嫌いだった僕は、一人の時間の大半をこの小さな稲荷神社……竹林で過ごしていた。

引っ越しゴミから椅子などをくすねてきてはここに設置し、自分だけの”秘密基地”のように扱っていたのだ。

……それが見落とされていた程には、この竹林の中の神社は寂れていた。

「管理者もろくに訪れないようなこの社の周りを、時折箒で掃いてくれましたね。あの、身の丈に合わない大きな竹箒で」

そう言って、彼女は当時を再現するかのように大きな尻尾で地面の落ち葉を払う。

「あの……あれは」

違うんです、それは自分の遊び場だからという理由で。心の中で言い訳をしていると、お稲荷様（オイナリサマ）はくすくすと笑った。

「まあ、そんな顔をしないで。ええ、知っています。ここが『秘密基地』だったからでしょう？　それでも、ここへ来てくれる貴方は私（わたくし）にとって愛おしいものでした」

彼女の慈しむような視線が、とてもこそばゆく感じる。妙な照れ臭さに思わず頬を掻いていると、彼女の目がいたずらっぽく笑う。

「でも、社の軒下を艶本の隠し場所にしたのはちょっと罰当たりですよ？」

指先を口元に当てて「めっ」とする姿に、僕の頬がかあっと熱くなる。

「いいっ!?　き、気付いてらしたんですね、申し訳ない……」

「当然です、ここに祀られた神ですから」

半ば忘れかけていた恥ずかしい事をよりによって神様に掘り返されて、耳まで火照っているのが自分でもよくわかった。

ある日クラスメイトが河原で拾った事を自慢げに話しているのを聞いて、自分でもいくつか探し出してここに運んだ記憶がある。

赤くなったり青くなったりしてるであろう僕に堪えられなくなったのか、お稲荷様（オイナリサマ）は口元を隠して笑い声をこぼした。

……よく笑う女性だ。

「うふ、ふふふっ……ええ、大丈夫、怒ってませんから安心してください。幼くとも男の子ですし、そういった事に興味を持って当然です」

むしろ男児たるものそれくらいで無くてはいけない、と彼女は笑う。

……さすがは神様、懐が広いと思わざるを得ない。

「貴方と過ごしたあの日々は、とても楽しいものでした。ここらを根城にする野良猫と戯れる貴方、宿題をする貴方、お昼寝をする貴方。そして、片親であることをからかわれて、ここで泣いていた貴方」

つかつかと歩み寄ってきた彼女の、ひんやりとした手が僕の頬をやさしく撫でる。

「……ずっと、見守ってくれていたんですね」

「ええ、ずっと。撫でてあげられない、声をかけてすらあげられないというのはいささか辛くもありましたが。だからこそ、仮染の肉体を得た今、こうしてお話できてとても嬉しく思います」

そうやって微笑むお稲荷様（オイナリサマ）。……しかし、神様とはいえ、全部お見通しという訳でもないらしい。

一つだけ、彼女は勘違いをしていた。

「――声は、届きましたよ」

「え？」

それは、今の住居への引っ越しを控えたたある日のこと。

「たった一度、それも最後の最後にですが。たしかに僕は聞いたんです」

秋口のお休みの日、ここで居眠りしていた僕に掛けてくれた言葉。

「〝風邪を引きますよ〟って……あれは、お稲荷様（オイナリサマ）の声だったんですね」

あの時確かに聞いた優しげな声は、未だに脳裏に焼き付いている。

「当時は、幻聴か何かだと納得していました。それでもその声が未だに心に残っているのは、あとでこう感じたからですかね」

口をぽかんと開けて固まってるお稲荷様（オイナリサマ）に、僕は言葉を続けた。

「もしお母さんがいたらあんな風に声をかけてくれるのかな、って」

……言い終えてから少しこっ恥ずかしい気分になってくる。それに、神様に対して〝お母さんみたい〟だなんて、不敬に取られないだろうか？

そんな風に思っていると、今までほうけていたお稲荷様（オイナリサマ）は口元に手を当ててころころと笑い声をあげた。

「ふふっ……。そうでしたか、あの声は、届いていたのですね」

だからあの日はちょっと慌てた様に帰ったのですね、と彼女は笑う。

……うん、善意で声をかけてくれたのに申し訳ないけど、あの時びっくりして半ば逃

げ出すようにそそくさと帰ってしまったのは確かだった。
「偶然とはいえ私(神)の声が届くなんて、貴方は少しばかり素質をお持ちなのかもしれませんね。この時代には珍しい事です」
「素質、ですか」
「現世(うつしよ)にあらぬ者を感じ取る素質です。遥か昔ならばいざ知らず、今となってはあまり意味のないものではありますが……こうして覚えていただけただけでも、私にとっては素敵な才能です」
そうやって嬉しそうに笑みを浮かべるお稲荷様(オイナリサマ)は、まさにこの世のものとは思えないほどに美しかった。
……ふと気がつけば、彼女の全身から見覚えのある虹色の光がゆらゆらと立ち昇っているのが見え始めた。
彼女自身それに気付いたのか、きらきらと光る自分の手を見つめた。
「――いけない、懐かしさのあまりに長々と話し込んでしまいましたね。あまり時間がないというのにまだ本題を話せておりませんでした」
「本題……?」
よく考えれば、思い出話をするためにわざわざ呼び出したはずもない。神様が一体僕になんの用があったのだろうか。

そう思っていると、お稲荷様はどこかからか拳ほどの大きさをした不思議な形の塊を取り出した。

「これは……？」

「流星の力――その結晶です」

そう言って僕の目の高さに掲げられたそれは、この世ならざる輝きを放っている。

……流星、つまりはあの隕石のことだろう。その力というと、これまでの事からある程度のことは推察できる。

「貴方もお気付きでしょうが、先日宙より降ってきた流星は不思議な力を持っております。これは、獣たちに人の姿を与えるもので……」

彼女が結晶を手の中で弄ぶ度に、その表面からは虹色の粒子が花火の様に散る。

とても不思議で、美しい結晶に僕の視線が釘付けになった。

「獣との強き縁を持っていれば、私のような幽世の存在にすらこうして器を与える、超常の力です。縁の強さから混じり合ったのか、伏見で私の本体が運良く狐の人型として器を得ることができました」

……よくよく考えれば、狐はお稲荷様の使いであって、そのものではなかったはずだ。

しかし彼女の頭には大きな狐耳が生えていて、後ろには立派な尻尾が揺らめいている。

「それで、本題とは？」

僕が訊ねると、彼女は手の中の結晶を僕に差し出した。……んっ？

「この結晶を貴方に授けます。この流星の力は人に変じた獣に活力を与え、傷や疲労を癒やします。獣に宿る〝力〟を使い過ぎた時も同様です」

その上で、お願いがあるとお稲荷様（オイナリサマ）は言う。

「流星の欠片は時が経てば空に溶けてしまいますが、この結晶には力の霧散を防ぎ同様の物質を取り込む呪（まじな）いをかけてあります」

そう言って彼女が指さした辺りよく見れば、結晶の中に紅く輝く鳥居のような不思議な文様が浮かんでいる。

「もし貴方が流星の欠片を手に入れた時はこれに取り込ませてください。そして、可能であればとある者たちに渡してやってほしいのです」

「……とある者たち？」

「その者たちは〝八咫烏（ヤタガラス）〟を名乗り、恐らくは鴉（カラス）を連れています。これを見せれば、彼らもすぐに分かるでしょう」

そこまで言って、お稲荷様（オイナリサマ）は吐息を吐く。

「しかし、これはあくまで〝お願い〟です。もし貴方が危険を感じたならば、無理をする必要はないのです。仮にこれを失おうとも、責めたりしません」

「……あっ」

僕の手に虹色の結晶が握らされる。それと同時に、お稲荷様の姿は急速に透明になり始めた。

急な事態に狼狽えていると、彼女は優しい微笑みを浮かべる。

「安心して下さい、この器を失ってもただ幽世へとずれるだけ。これからも私は変わらずここに居ます」

唖然とする僕の前でお稲荷様の姿は、足元から虹色の粒子へと崩れ去り、虚空へと消えてゆく。

「なので……もし、騒ぎが収まったら。時々でいいので、またここにお参りに来てもらえれば嬉しいです――」

「――ちょ、ちょっと待ってください、今世の中で何が起きてるんですか!?　騒ぎって一体……っ！」

慌てた僕の問いに「しまった」という風な表情に変わったお稲荷様は、何かを言おうと口を開くもののそのまま虚空へ溶けて消える。

最後の質問は回答者を失い、宙ぶらりんになってしまったらしい。

「……思い出話に熱中して肝心なことを言いそびれるなんて、お稲荷様も意外とドジっ子なんですね」

ポツリとこぼした一言に、返答はない。幼き頃と同じ奇跡は都合よく起こってはくれないらしい。

ただ、なんとなくお稲荷様（オイナリサマ）が傍で謝ってるような、そんな気がする。

鬱蒼とした竹林は、いつの間にかその先に道路が薄っすら見えるほどに小さなものとなっていた。

かつて運び込んだ物も当然残っておらず、引っ越してから経た十年近くの時は環境を大きく変えてしまったらしい。

子供の足には少し遠くともこうして来れない距離でもないのだから、たまには足を運べばよかった、なんて思いながら。

僕は少しばかり後ろ髪を引かれつつ、神社を後にした。

※※

「流星の力、か……」

お稲荷様（オイナリサマ）に渡された結晶を太陽に翳して見ると、美しい虹色の輝きを放っている。

この輝きは隕石が消滅した直後に周囲に見えたものや、擬人化した鳥が飛ぶ時に撒き散らすそれと同じに見えた。

形状としては透き通った虹色のキューブを乱雑に組み合わせたような、とても不思議

な形だ。隕石が運んできたか、あるいは隕石そのものがこれで出来ていたのだろう。
消滅時に飛び散ったこの破片が動物に当たり、人へ変えていった？
持ってみて分かった特徴としては、重そうな見た目に反して異常なほど軽い事が一点。
まるで空気のよう……いや、むしろ実体のない霊的物質とかそういう可能性もあるのではなかろうか。
神様にまで影響を与える物質だ、ひょっとしたら隕石の破壊に失敗したのもこれの持つ特性が関わっているのかもしれない。
「……それに、渡してくれって言ってもどこに行けば会えるのやら」
お願い事に関する肝心な情報が殆どこちらに伝わっていない。
お稲荷様（オイナリサマ）の意外なツメの甘さに、思わず笑みが溢れる。
僕の中での彼女の印象はもはや神様というより、ちょっと抜けた近所のお姉さんといった印象に変わっていた。

「アライグマちゃんは……まだいないっぽいなぁ」
スーパーの近くまで戻ってきた僕は、情報収集のために飛び出していった少女の姿を探した。出た時に閉めた扉は開いておらず、おそらく彼女がまだ戻っていないであろう

事が伺えた。

……とりあえず、一旦帰って夕方にでもまた出直そうか。

そう思って歩き始めた、その時だった。

「いやあ――――！」

絹を裂くような叫び声が僕の耳に飛び込んできたのだ。

妙な胸騒ぎがして、僕の足は自然と声の方へと駆けていき――そして。

「――――!!」

僕は、それを見てしまった。

――それは、例えるならば青く巨大な球体。

艶やかな表面は液体のように緩やかに波打ちながらもその形状を保っている。

その側面からは幾本もの太い触腕のようなものがうねっており、その先は鰐の顎のような形状だ。そのギザギザとした牙は容易に人体を両断しそうな凶悪さを見せている。

路地を塞ぐような形でふわふわと浮かぶそれが――。

『■■■■■――？』

――ぐるり、とこちらへ振り向く。

金属の管を通る空気のような低く震えたノイズ音が、発声器官も見当たらないそれから発せられ、僕の背筋を凍らせる。

青い球体表面の中央部には、立体感がない白黒の目玉状の何かが一つ波打っており、その視線がこちらをじっと射抜いていた。

――二日経ってなお帰ってこない人々

――人とも獣とも異なるにおい

――不可解な停電

――そして、お稲荷様（オイナリサマ）が言っていた〝騒ぎ〟の元凶。

それらの答えであろうモノが、僕の目の前に悠然と浮かんでいた。

第十話　怪物

「■■■……」

厚みの感じられない目玉がギョロリと動き、僕の全身を品定めするかのような視線が舐め回していた。

表情どころか口らしき物も無い相手ではあるが、もしあったなら舌なめずりをしているに違いない。

背筋を冷たい汗が伝う。足が震える。喉の奥がカラカラに乾いてゆく。

目の前のそれは危ないものであると、全身が危険信号を放っている。

触腕の先にある鰐口がウズウズとするように開閉していた。

――逃げなきゃ、でも足は動かない。身動き一つ、声一つ上げられない。

ゆっくり、ゆっくりと近づいてくるそれに対して、何一つアクションを起こすことができない。

もう終わり、逃げられそうにない……そう思った瞬間、目の前の怪物の背後で大きな羽音が立った。

「う、うわあああああ――!!」

悲鳴を上げながら、人型のシルエットが飛び立ってゆく。……どうやら、先程の悲鳴の主はまだ食われてはいなかったらしい。

その音に釣られて怪物の視線が後ろへ向いた瞬間、かろうじて足に力が戻った。

水ボトルの詰まった重荷（リュック）を放り出し、地面を蹴る。

「■■■■――？」

力いっぱい地を蹴り、走る、走る、走る！

――息が苦しい、酸素が足りない。だからなんだ、酸欠よりもよほど恐ろしいものが背後にいるのだから、そんなものは後だ！

走る、走る、曲がる、走る――！

背後から足音などは聞こえない。――当然だ、奴は浮いているのだから。

――ひょっとしたら、追ってきていないかもしれない。そんな事はわからない、確かめる勇気などない。振り返る余裕も……!?

……いつの間にか何かが顔に当たる日光を遮っていた。

「ツらあァッ――!!」

脚をもつれさせながらも、全力で真横へ跳び込んだ。

「■■■■■■――――!!」

「がっ――あアッ！」

直後、凄まじい衝撃と風圧が僕を襲った。
受け身など知るかとばかりに跳んだ体が、更にもみくちゃになってアスファルトへ叩き付けられる。
ただでさえしぼんでいた肺から根こそぎの吐息が押し出され、呼吸が止まる。激しく咳き込みながらも身体に鞭打ち目を開くと、先程まで僕が駆けていたであろう地面を砕いて青い球体がめり込んでいた。
……仮に跳んでいなければミンチだったな、と妙な笑いがこみ上げる。怖すぎて頭がおかしくなりそうだった。
半ば埋まった怪物がぬるりと地面を抜け出すところを視界の端に捉えながら、僕もよろよろと立ち上がり――そしてそのまま立ち上がれずに倒れ込む。
……どうやら、跳んだ拍子に足首をやってしまったらしい。
「うぐっ、クソっ」
それでも、近くの電柱伝いになんとか立ち上がる。立ち上がらなければ死んでしまう。
……目の前の怪物が人間を喰らうものなのかは知らない。だが今ので友好的な存在ではない事、人間を羽虫のように潰せるような相手である事はよくわかった。
「■■■■……？」

昨日で終わったと思ってた命、せっかく生き長らえたと思ったのに、こんな化け物に殺されて終わりなんて真っ平ゴメンだ。

……しかし。

地面を抜け出し周囲をぐるりと身渡した怪物の一つ目が、こちらの姿を捉える。

距離にして精々が4、5メートル、怪物の大きさや動きの速さを考えればあってないような距離。対するこちらは走れないと来た。

目前に迫った濃厚な”死”の気配を前に、頭に浮かんでくるのは、クーたちの顔だった。

「……ああ、クーたちの昼ご飯、作り置きしとけばよかったな」

野生児のチビ助はともかく、クーは大丈夫だろうか？　鼻が利くからドライフードを見つければしばらくは持つだろうけどその後が心配だ。

シーザーも僕が来なくなったら干からびやしないか、と心配は尽きない。

ああ、ここで死ぬのは、本当に……。

「■■■■■■」

目の前の怪物が、鰐口を大きく開けた触腕を振り上げた。

その数、四本。怪我した足どころか無傷の状態ですら避けられる気がしない……万事休すとはこの事だろう。

体から力が抜け、その場にへたり込む。
無機質な瞳でこちらを見つめる怪物が相手を嬲って楽しむような存在ではない事を祈りながら、僕は目を閉じる。
――ああ、せっかく、みんなと通じあえたのに。

「――くおんさまから……離れろッ！」

次の瞬間、耳に届いたのは怒声だった。
それに驚いて開いた僕の目に飛び込んで来たのは、虹色の光を纏って飛んできた人型のシルエット――そして、轟音とともにブロック塀を貫き転倒する怪物の姿だった。
怪物に強烈な体当たりをかましたそれが、僕の目の前で不格好ながらもしっかりと着地をする。
その姿に、僕は見覚えがあった。
「……シーザー!?」
僕がその名を呼ぶと、右足にしっかりと尻尾を巻き付け、恐怖に顔を強張らせた彼女がこちらに駆け寄ってくる。
夢中で走るうちに、シーザーの耳に届く範囲まで逃げてこれたらしい。

……しかし、この状況は。

「くおんさま、ご無事ですか！　は、早く逃げましょう！」

必死の形相で僕の体を持ち上げんと四苦八苦するシーザーの背後では、あの怪物が早くもその身を起こそうとしているのが見える。

僕は、彼女の肩を優しく押しのけた。

「……ありがとうシーザー。でもごめん、僕は逃げられない」

僕からの拒否に呆然としていた彼女が、顔を悲痛に歪ませる。

「どうしてですか!?」

彼女は悲鳴のような声を上げる。

「足を怪我して、歩くことすらままならないんだ。君は力持ちだろうけど、大荷物を抱えた慣れない走り方で逃げ切れる相手じゃない」

「それは……でもっ！」

シーザーはつい2日前まで犬だったのだ、いくら力持ちだろうと、この場で怪我した人間をうまく抱えて走れるはずがない。

それは彼女自身分かっているらしく、それでもなお葛藤するように声をつまらせるシーザーに、僕は嬉しく思った。

「君一人なら逃げられる。ご主人様にまた会うんだろう、だから早く……」

「――逃げません！」
たしなめる僕の言葉を吠えるような声が遮る。気付けば、今まで俯いて震えていたシーザーが、顔を上げて立ち上がっていた。
僕を真っ直ぐに射抜いているその目には、確かな決意が揺らめいていた。
「……くおんさまには、いつもお世話になっています。先日、ご主人さまが出かけられてからは特に、です」
彼女は僕に背を向け、ブロックの瓦礫から這い出した怪物と対峙する。
その尻尾は今も右足に巻き付いており、体は小刻みに震え、歯の根が合わないのか声も震えている。
しかし、それでもシーザーはその場を離れなかった。
「――犬は、仲間を決して見捨てません。受けた恩も、忘れません」
そう言って息を深く吸い込んだ彼女は次の瞬間、腹の底にまで響くような……力強い遠吠えを行った。
彼女の体から震えが止まり、尻尾が足から離れて垂れる。
……不思議と、僕にも勇気が湧いてくるような、不思議な声だった。
遠吠えを終えた彼女は、ゆっくりと振り返ると僕に微笑んでみせる。
「私はくおんさまのことが大好きですし、ご主人さまたちだってそうです。くおんさま

とお話するご主人さまはいつも楽しそうでした。だから……」

シーザーの咆哮に慄くように動きを止めていた怪物が、触腕を二つ持ち上げる。

危ない、そう注意する間もなく放たれたそれを――彼女の両手はしっかり受け止めた。

「だから、私は逃げません……！　やっ！」

掛け声とともに、二本の触腕が引きちぎられる。シーザーの髪の毛は逆立ち、両手からは虹色の光（りゅうせいのちから）がまばゆく立ち上っていた。

「■■■■■――!!」

「がああああああッ！」

怒りからか、おぞけの立つような咆哮を上げる怪物。

続けて放たれた触腕をシーザーは避け、弾き、時に強靭な顎で受け止め食いちぎる。

ちぎられた触腕は切り口から再び伸びてシーザーを襲い、それをシーザーがまた捌いてゆく。

……状況は拮抗しているようでいて、ややシーザーが圧されていた。

喰らいつかせはせずとも、避け切れなかった触腕の牙が確実にシーザーの身体へ傷を付けていた。手数が、違いすぎる。

「ぐっ――！」

触碗の一つがシーザーの横腹を殴りつけ、彼女の体が僅かに浮き上がった。
その隙を狙い、他の触碗が襲いかかる。
「シーザー！」
着地した彼女はすぐさま跳躍して触碗の一撃を回避する。硬く重いものがアスファルトを叩く音が辺りに響いた。
……真綿で首を締めるように、じわじわとシーザーは追い詰められている。
このままではいずれ彼女も怪物の餌食となってしまう。なにか、なにかないだろうか。
こんなレベルの争いでは加勢しようにも、邪魔にしかならない。
辺りを必死で見渡す。
――べしゃり、という音を伴って何かが目の前に落ちてきた。
シーザーにちぎられた怪物の触碗だ。
それは数秒のうちに無数のキューブへと崩れ去り、虹色の光へと還元されていった。
……なるほど。
その光景を見て察するに、この怪物もまた隕石由来のモノのようだ。
隕石は地球をかち割ったりはしなかったが、災いの種はしっかりと蒔いたらしい。
隕石が突然軌道を変えた理由を、なんとなく察してしまった。

「それが分かったところで……？」

ふと、ポケットに入れた物の存在を思い出して取り出す。

――先程お稲荷様（オイナリサマ）からもらった、流星の力の結晶である。

あの怪物もこれを力の源にしているならば、これを投げれば注意を引けるのでは無いだろうか……そこまで考えて、この策はナシだと気付く。

お稲荷様（オイナリサマ）はこれを擬人化動物の傷を癒やし、活力を与えるものだと言っていた。

それがあの怪物にも適応されるなら、これを奪われるのは非常に危険だ。

それに、一瞬気を引いたところで、シーザーにはあの怪物を一撃で沈める程の力は無く、焼け石に水でしかない。

他にシーザーの手助けになるものは――！

「あ、ぐぅぅっ……！」

「■■■■■――！」

耳に入った悲鳴に顔を上げると、触碗の牙がシーザーの右腕と左肩へ食らいついていた。鮮血の朱（あか）が、脳を焼く。

……もう、考えている時間はない！

僕は意を決すると、ふらつく体で立ち上がり、虹色の結晶を掲げる。

そして、注意を引くために声を上げようとした、その時だった。

「――足止めゴクローだ、犬っころ」
シーザーと怪物の間で、虹色の閃きが幾条も弾けた。
「……え？」
喰らい付いていた触碗はすべて切断されており、シーザーと怪物の間には二つの人影が悠然と立っていた。
「ここは私たちの縄張り、ですからね」
「訳のわからねー玉っころは失せろってな！」
指先を丸めた両手を構え、背中を丸めた独特の構えで怪物を牽制するその二人の姿には、見覚えがあった。
「おうおう、これまたデカブツが出たもんだ。このでかさで食えりゃあ少しは役にも立つんだがな」
「ええ……こんな臭いの食べたくないです」
「そもそも割ったら消えちまうからなぁ」
そしてその背後に降り立ったのは、目を引く黒と茶のツートンカラー。
……間違いない、まゆげとハナコ、そしてダンシャクだ。
「――にんげんさん、大丈夫か？」
「うおっ!?」

そう言って袖をくいくいと引いたのは、今朝別れたばかりのアライグマ少女であった。

この子にはよく驚かされている気がする。

「でっかいメダマに追っかけられてるのを見たときはびっくりしたのだ……もう食べられてたらどうしようと思ったけど、無事でよかったのだ」

心底ホッとした様子で言う少女に、こんなにまで心配して駆け付けてくれたことに対して深い感謝の念を抱かざるを得なかった。

「それでにんげんさんを追いかける途中であの三匹を見つけたから、やっつけてくれるよう〝お願い〟したのだ！」

感謝どころの騒ぎじゃなかった、本気で命の恩人……恩アライグマ？　だったらしい。

これはもう彼女ら五人には足を向けて寝られない。

「ホントにありがとう、おかげで命拾いしたよ。……でもどうやってあの子たちを説得したんだ？」

特に人懐っこい性格をしているハナコはともかくとして、ダンシャクやまゆげはそう簡単に力を貸してくれるイメージがない。

少女はキョトンとした顔になった後、意味深な笑顔を浮かべた。

「ふっふっふー、これもにんげんさんに教わったことなのだ！」
そう言って彼女がしたり顔でビニール袋から取り出したのは、なんと『テユール』であった。
「……なるほど、これを対価にお願いしてくれたのね」
「そうなのだ！　あの三匹はもともとメダマを退治して回ってたみたいだから、お願いしたらすぐ頷いてくれて助かったのだ……」
そう言って彼女は今も激闘を繰り広げる四匹に目を向けた。
ハナコ、まゆげ、シーザーの三名によって、あの厄介な再生する触碗の全てが見事に完封されていた。
「いい加減に……倒れろやァッ！」
ブロック塀を足場に天高く舞い上がったダンシャク。光を纏った手で怪物の無防備な頭部を切り裂くと、怪物の球体の上半分近くがブロック状に崩れて弾け飛んだ。
その抉れた内部に、質感の違う何かが見た気がした。
「――あれ？」
次の瞬間には抉れた箇所がじわじわと埋まり始め、やがては再び球体へと戻る。
その姿は初めて見た時より、二周り以上は縮んでいる。
「ちぃっ！　デカイのは面倒だな、ちびこいのは一撃で消し飛ばせたのに」

「やっぱ地道に削るしかないか？　思ったより厄介だぞこれ」
空中で見事な一回転捻りを見せて着地するダンシャクが唸る。
獅子奮迅の活躍を見せていた彼女らではあるが、今やみな肩で息をし始めており、流石に疲れが見える様子だった。
少し悩んだが、思い切って声を上げる。
「ダンシャク――！　ちょっといいか――！」
「何だボウズ、今忙しいのがわかんねぇのか！」
なかなか倒れない敵に苛つき始めているのか、棘のある口調を返してくるダンシャク。
「今怪物の頭が弾け飛んだとき、中に石みたいなものが見えた！　それを壊せば倒せるかもしれない！」
「ああ、石だぁ？　……よし、お前らちょっと抑えとけ！」
ダンシャクの号令を合図に、三人が一斉に飛びかかる。
連携もクソもないような一斉突撃に対して、怪物も全ての触碗を踊らせて迎撃する。
「そろそろくたばれやァ！」
再びブロック塀を蹴って高く跳躍したダンシャクの爪が、怪物の頭部を砕いた。
先程はそこで離脱した彼女だったが、今度はそのまま抉れた怪物の上に降り立つ。

「■■■■■――!!」

それには怪物も危機を感じたのか大きく体をよじるも、触碗を握るシーザーたちが暴れる事を許さない。

多少の揺れは猫にとっては軽いアトラクションでしかなく……破片が生み出す虹色の輝きを掻き分け、彼女は目的の物を見つけた。

「――これか。そおらトドメだッ！」

大きく振り上げられた拳が一層強い光を放ち、虹色の尾を引く流星の如きの様相で怪物へと振り下ろされた。

――ぱきん。ガラスが割れるような涼やかな音が、辺り一面に響く。

次の瞬間、あの恐ろしい怪物はぱかぁんという派手な音を立て、無数のブロックへと砕け散る。

やがて虹色の光となって霧散していった。

怪物がいた辺りには小石ほどの虹色のキューブが二つ、転がっているのが見える。

……正直死を覚悟したが、なんとか生き延びることができたらしい。

僕は強い安堵に胸を撫でおろした。

第十一話　届いた報せ

「すっごいのだ！　あんなでっかいメダマを倒しちゃったのだ！」
怪物の残り香たる光の粒子が辺りから消え去った瞬間、アライグマ少女が興奮したように飛び跳ねた。
緊張の糸が切れた様子で伸びをしたり、毛づくろいを始めていた三人の猫たちがその声に反応して彼女に歩み寄ってゆく。
「おうアライグマ、約束のモンはちゃんとよこせよ」
「もちろん、ちゃーんと渡すのだ！」
そう言って彼女はダンシャクたちにテュールを一袋ずつ、三人へ手渡してゆく。喜色を浮かべた三人は、早速中から包みを取り出し噛みちぎるように開けて食べ始める。これは落ち着くまでしばらく掛かりそうだ。
その場に立ち尽くすシーザーの元へ痛む足を庇いながら歩み寄る。
「助けてくれてありがとう、シーザー。……怪我は大丈夫？」
その場で放心していたシーザーの傍に寄り立ち、声をかける。
顔を上げた彼女と目が合うと、やや間をおいて端正な顔がくしゃくしゃになって涙が

溢れ出した。
その顔が、胸の中に飛び込んでくる。
「――うっ」
鳩尾に重い衝撃が走り、思わずよろめくものの、なんとか倒れずに体を支える。
「ご、ごわがっだですー！　目玉が！　う、ぐぅぅっ――！」
キュウキュウと犬のように（事実、彼女は犬ではあるが）鼻を鳴らしながらガクガクと震えるシーザーを、必死に抱きとめる。
今の彼女に先程怪物と真正面から立ち向かった勇ましさは感じられなかった。
シーザーは元々おおらかで、臆病な子だ。そんな彼女が勇気を振り絞ってあの恐ろしい怪物と立ち向かってくれた。
「――ありがとう、助かった。もしあそこでシーザーが来てくれなかったら、本当に危なかったよ。勇気を振り絞ってくれてありがとう」
「うぅ、ぐすっ……」
胸の中ですすり泣く彼女の頭を撫でながら、怪我の確認をする。
――近くで見た彼女の姿は、本当にボロボロだった。
鋭い鰐口に噛みつかれた肩と腕は真っ赤な血で染まり、露出した肌はどこも擦り傷や切り傷でいっぱいだ。

殴打された横腹も、おそらく服の下で大変なことになっているだろう。
「シーザー、怪我を診るから申し訳ないけど少し離れて」
「ぐすっ、はい……それは？」
僕が手に持った流星の結晶を見て、シーザーが首をかしげる。その奇妙な形と輝きに、テュールをキメて落ち着いた三匹もやってきた。
「なんだ、その石っころは」
「キラキラしてますねぇ、すごくキレイです」
お稲荷様（オイナリサマ）は、これに擬人化動物（かのじょたち）を癒やす力があると言っていた。
効力の程は使ってみないことには分らないが、神様がわざわざ渡してくれたからには期待できるはずだ。
「おお……！」
周囲から感嘆の息が漏れる。
結晶をシーザーの傷にかざすと、もはや見慣れた虹色の輝きが溢れ出し、彼女の体へと吸い込まれる。
――その効果は、僕の予想を遥かに超えた、まさに劇的なものだった。
まず、顔に付いていた擦り傷や切り傷がきれいさっぱり消滅した。
腕と肩に穿たれた咬み傷も瞬く間に塞がり、さらには身に纏っていた衣服にまで力が

及んだらしく、破れた部分が修復された。
「……すごい、すごいです！　全然痛くない！」
その場でくるくると回りながら自分の身体を確認するシーザー。僕自身、予想を超える完全回復っぷりに少し驚いている。
僕は気を取り直すと、しげしげとこちらを見ている三人に向き直った。
「ダンシャクたちも、一応やっとこうか」
「うん？　オレらは別に怪我はしてないが」
「疲れにも効くらしいよ。助けてもらったお礼がしたいんだ」
流星の力は疲労も癒すと言っていた。ダンシャクたちにも一人ずつかざしてみると……シーザーの時ほどでは無いが虹色の光が溢れ出して彼女らの体へ吸い込まれてゆく。
今度は外見上に変化は見られなかったものの、少し上がり気味になっていた彼女らの呼吸がすぐに整った。
しばらくの間、確かめるように手を握ったり開いたりとしていたダンシャクは、やがてグッと背伸びをする。
「ほぉ、疲れが取れたな……よし、ナワバリをもう一巡りするか」
「えーっ！　まだやるんですか!?」

ダンシャクの宣言に、ハナコが抗議の声を上げる。トレードマークたる立派な眉をひそめ、まゆげも不満そうな表情だ。

「確かに疲れは取れたけど……またでかいの出てきたら嫌じゃん」

「馬っ鹿、あんな気色悪いのが我が物顔で歩いてる方が嫌だわ、行くぞ！」

ダンシャクかそう言ってずんずんと歩き出すと、残された二人は肩を落としてそれに追従する。

途中で振り返って手を振ってくれたハナコに対して手を振り返す。

「くおんさま、お怪我は大丈夫でしょうか」

小さくなっていく三人の背中を見送っていると、横に立っていたシーザーが思い出したように切り出した。

「あー、とっさにジャンプした時に捻った足首くらいかな。他の怪我は転がったときに付いた掠り傷とかちょっとした打ち身くらい」

「その傷はさっきの石で治せないのか？」

アライグマ少女の言葉を受け、結晶を痛む足首にそっとかざしてみる。が、予想通り結晶はなんの反応も見せない。

身に着けていて反応しない時点でわかりきってはいたが……少し残念だ。

「だめみたいだね」

「そうですか……ど、どうしましょう」
「一人で歩くのは辛いから、家まで肩を貸してもらえるとありがたいかな。ついでに、うちでお昼ごはん食べていきなよ」
頼めるかな、と尋ねるとシーザーは尻尾を振って頷いた。
「アライグマちゃんはどうする？」
少しでも恩を返せれば思ったが、彼女は静かに首を振る。
「三匹が小さいメダマもあちこちにいると言ってたのだ。ナワバリが心配だから見に行きたくて……誘ってくれたのにごめんなさいなのだ」
そう断って、彼女は申し訳なさそうに表情を曇らせる。
あの怪物が何を食べるのかはわからないけど、もしもあれらが雑食性でせっかくの食料が全滅してしまったら大変だろう。
身体的に僕より優れている筈ではあるものの、見た目の幼い彼女をこの状況で一人帰すのは不安が残る。しかし無理に引き止めることもできないと思った。
「そっか……小さいのの強さは分らないけど、十分気をつけてね」
「わかったのだ！　にんげんさんたちも気をつけて帰るのだ――！」
そう言って、少女はスーパーマーケット方面へ走り去ってゆく。
その背が角を曲がって消えるまで見送り、僕はシーザーに向き直る。

「じゃあ行こうか……あ、ちょっと待って」
帰ろうとした瞬間、ふと怪物が残した物の存在を思い出した僕は地面に転がる虹色のキューブを拾い上げた。
「あっ、あのオバケが落したやつですね。拾ってどうするんですか？」
「うん、多分だけどこうやると――」
二つのキューブを手元の結晶に触れさせる……すると、それらは溶け込むようにして消えてしまった。
「消えた……どうなったんですか？」
「この石をくれた人が言ってたんだ、同じものを吸収させられるって」
結晶をポケットに仕舞うと、僕はシーザーに肩を借りて家へ歩き出した。

※※

「悪いね、家を空けさせちゃって」
「いえいえ、おうちも大切ですが、くおんさまも大切ですから」
シーザーの肩を借りて歩くこと数分、三隅夫妻の家の前を通り過ぎる際に家をちらりと見る彼女に申し訳ない気分になった。
彼女は首輪が外れているというのに、自らが飢えようが雨が降ろうが決して家の前を

離れることはなかった。
　しかし、怪物に襲われる僕を感知した彼女は主人の不在時に家を空ける罪悪感も、未知なる存在への恐怖をも押さえつけて助けに来てくれたのだ。
「――家についたら、お礼になにか美味しいものを作るよ」
「楽しみです。でも、お怪我されてるのですから無理はしないで下さいね」
　そう言って微笑む彼女の笑顔に少しどきどきしてしまう。そんな自分のちょろさに少し呆れながらも、傷む足を引きずりながら歩みを進める。
　――そんなときだった。
　不意に顔にかかる陽が遮られ、先程の出来事を想起した体が硬直する。
「おおーっ！　ヒトを見つけたでう！」
　とっさに身構えた僕に降ってきたのは怪物の巨体ではなく、そんな気の抜けるような少女の声だった。
　ばさばさという大きな羽音を伴い、緑のスカートをふわりとはためかせて一人の少女が僕たちの目の前に着地する。
「ええと、あなたは一体……」
　困惑気味にシーザーが尋ねると、少女は頭から生えた黒い翼を広げ、右の掌底をびしっと空に突き出す謎のポーズを決めた。

「ウミウのウッティだう！」
カウボーイみたいな名前だな君。エメラルドグリーンの大きな瞳をくりくりとさせる少女はウミウらしい。
前髪が黒で中央の一房はクチバシを表しているのか光沢のある黄色。後ろ髪は白く、そこから黒い翼が生えている。
衣服は黒いブレザーで、二重になった緑のスカートが印象的だ。
「……えーっと、それでウッティさんはなんのご用事で？」
「お仕事でう！　今日は魚採りじゃなくてお使いなんだうー」
そう言って持っていたプラスチックバッグをこちらに差し出す。その中にはホチキスで綴じられた書類が詰まっており、僕はその内の一部を取り出してバッグを返す。
その表紙を見て、思わずたまげた。
「……政府からの緊急速報？！」
「おやぶんがえらいヒトからお願いされたんでう。それでウッティたちもこうやってはぐれたヒトを探して飛んでるんだうー」
紛らわしいのがいっぱいいるから大変だ、と愚痴をこぼすウッティ。
どうやら停電は思った以上に深刻らしく、書類によると現在は全国的、下手すると全世界的に電気がほとんど使えない状態に陥っているようだ。

故に苦肉の策として宮内庁経由で鵜匠、他にも伝書鳩協会などの力を借りたりして原始的な情報伝達を行っているらしい。
書類を軽く流し読みしただけで現状の深刻さが伝わり、血の気が引いていくのが自分でもよくわかった。
「……あの、くおんさま?」
そんな僕の様子を見て、恐る恐るといった様子でシーザーが顔を覗き込んでくる。
……これを伝えれば、おそらく彼女は取り乱すだろう。
しかし、隠しておく訳にもいかない。
「……あの怪物が、あちこちに出現していろんな場所で混乱が起きてる。三隅さんが避難した先でも、大きな被害が出てるらしい」
「――――――」
シーザーの顔から、色が失われて行くのが見ててわかった。
思わず走り出しそうになる彼女の腕を掴むと、僕を引きずるわけにも行かないと思ったのかすぐに立ち止まってくれた。
僕はぽろぽろと涙をこぼすシーザーをそっと抱きしめる。
「気持ちはわかるけど落ち着いてくれ。シェルターの中にまでは侵入されていないようだから、三隅さんはきっと大丈夫だ」

「で、でもっ！」
「……シーザーだけじゃ、場所も分らないだろう？　闇雲に走り回って迷子にでもなったら、三隅さんとも二度と会えなくなるかもしれない」
だから落ち着こう、そう言って諭すと、彼女も悲しげに耳を伏せながらもやや落ち着きを取り戻してくれた。
僕はそっとシーザーを離すと、目をまんまるにしているウッティに向き直る。
「……ウッティさんはシェルターのある街にも行ったの？」
「行ってないう。ヒトがいっぱいいる所は外して、なるべくはぐれたヒトを探してこれを渡してほしいって頼まれたんだう――あっ」
急にウッティが空を見上げたのでつられて視線をやると、彼女と同じ服装をした少女がこちらに手を振っていた。
「ウッティのかたらいが呼んでるみたいだう！　それじゃあウッティはそろそろ行くでうー」
そう言うが早いか、彼女は止める間もなく飛び立って仲間の少女と連れ立って飛び去ってしまった。……できれば、もう少し話を聞きたかった。
「ご主人さま……どうかご無事でいて下さい……」
力なくうつむき、祈るようにつぶやくシーザーに、胸が痛んだ。

しかし、衝動のままに行動しても自体は好転するどころか最悪の展開を招いてしまう。今の日本……いや、世界は決してこれまで通りの場所ではないのだ。

「シーザー、まずは予定通り僕の家へ行くよ、慌ててもどうにもならない。落ち着いて行動を考えないと、三隅さんと会うのは難しいんだ」

「……はい」

こくりと頷くシーザーの顔色は真っ青だった。あの怪物と戦った彼女はその恐ろしさを身にしみて知っており、それが大発生している現状の危うさに絶望しているようだ。

何とかして安心させてやらなければ、今にも彼女は宛もなく走り出す。——そして怪物に出会って、命を散らしてしまうだろう。

僕は一つの決意を胸に懐くと、シーザーの両肩に手を置いて真正面から彼女の目を見つめた。

「——シーザー、よく聞いてくれ」

おずおずと、シーザーがこちらの目を見つめ返してくれるのを待って、僕は口を開いた。

「必ず、僕が君を三隅さんの元へ送り届ける」

「……っ！」

シーザーの目が見開き、力なく下がっていた耳と尻尾が立ち上がる。
「だけどね、そのためには十分な準備が必要なんだ。だから、準備が整うまでの間、少しだけ我慢して待ってくれないか？」
シーザーの瞳が揺れる。信じてもらえなければ、きっと彼女は一人でも飛び出してしまう。だから精一杯の気持ちを言葉に乗せる。
シーザーに救われた命の分、精一杯の恩を返したい。そんな想いを。
そしてしばらくの沈黙の後、彼女は静かに頷いてみせた。
「わかりました、くおんさまにおまかせします。だから――」
シーザーは涙で言葉を詰まらせながら慟哭した。
「だからどうか、私をご主人さまたちに会わせて下さい――！」
「……まかせて」
――こうして、僕は危険に身を投じて旅立つ覚悟を決めたのだった。

第十二話　出発準備

「おかえ……ど、どうしたのにーちゃ!?」

満面の笑みで迎えてくれたクーの表情がたちまち驚きに染まる。

視線の先にある僕の姿はというと、転がった時に肘や膝を衣類ごと擦りむいた傷に加えて顔にも幾つか傷がある上、捻挫した足首の痛みでシーザーの肩を借りている有様だ。

クーの悲鳴に釣られて出てきたチビ助も驚いている様子が見て取れる。その視線はみるみる険しいものとなり、僕に肩を貸すシーザーへと向けられた。

「帰り際、見たこともない怪物に襲われた。こっちのシーザーがいなかったら正直危なかったと思うよ」

シーザーに警戒の目を向けていたチビ助は説明を聞いてすぐに視線を和らげる。

そして彼女は少し思案顔をすると、小首を傾げて訊ねてきた。

「見たこともない……その怪物ってのはひょっとして、丸っこくて1つ目の変なやつ?」

なにやら、怪物に心当たりのあるらしい。チビ助が両手のひらでボーリングの玉ほどの空間を作ってみせた。

おそらくだが、これがダンシャクの言う〝ちびこいの〟の大きさなんだろう。
「チビ助もあれを見てたのか」
「ええ、昨日仲間に追っかけられてた時にね……でも、あれそんなに危ないの？　小さくてトロいし、猫一匹捕まえられそうにない感じだったと思うけど……」
小型の怪物は、どうやら大した脅威ではないらしい。僕は頭を振ると、先程出会った怪物について説明を始める。
「いや、さっきのはもっと大きかった、大体僕がひと飲みにされそうなくらい。しかも、大きな顎のついた長い腕がたくさんついてて、それを自在に動かせたんだ」
僕の説明で怪物がいかに凶悪か理解したらしく、二人は顔を青くする。
そんなとき、横から遠慮がちにシーザーが声をかけてきた。
「あの、くおんさま？　早く治療をしたほうがよろしいのでは……」
「ああうん、ありがとう。それじゃあ、とりあえず上がろうか」
初対面のチビ助の視線にそわそわしているシーザーに促されて、僕らは家に上がった。
とりあえず、治療を終えたら今のうちに水の確保をしなくちゃね。

※※

「にーちゃ、大変だったんだね」
「ホントにね……痛たっ」
停電で少し溶けたのか、氷は冷凍庫の底にベッタリと張り付いていて固まっており、使い物にならなかった。
代わりに保冷剤を患部に当てているが、幸いにも捻挫は重篤ではなさそうで、痛みはあるものの変色はしていない。多分、明日には問題なく歩けるようになるだろう。
傷は軽く消毒し、ひどい所には大きめの絆創膏を貼り付けて処置した。
我ながら中々に傷だらけである。
「それにしても、くおんさまのお怪我が大事なさそうで良かったです」
不器用に握ったフォークで四苦八苦しながら麺をすするシーザーの表情からはようやく緊張の色が消え始めている。
……本日のお昼は袋麺だ。ごめんよ、美味しいお昼の予定が手抜きになって……立ち仕事が思いの外辛かったんだ。
「うまく歩けないって聞いてびっくりしたわ。安静にしてなきゃダメよ」
「うん、そうするよ。……あっ、クー！　ヒジにコップが――」
「――わっ、あぶなかった」
クーが動きを止め、落とす寸前だったコップを中央に寄せたのを確認し、浮かせた腰

を落として苦笑する。
　こうやって並んで食事する姿を見ると、同じ元動物の彼女らではあるがテーブルについた時のお行儀の良さに差が出るらしい。
　クーは肘杖を付き、フォークで小皿に移した麺を口元に付けてすすっている。
　逆にシーザーは口を丼に近付けフォークで持ち上げた麺をすすっている。
　そして意外なのがチビ助で、器用に箸を使ってお上品に食べている。どうやら、僕の食べ方を見て覚えたらしい。
　一番上手に食べるのがこの場で唯一の野生児なのがまた面白い。
　そんなふうに観察していたのが悪かったのか、視線に気づいたチビ助が箸で掴んだ麺と僕の顔を見比べ始めた。
「……なに、食べ足りないの？　少しだけ分けましょうか」
「ああいや、上手いこと箸使ってるなって思っただけだよ。ゆっくり食べて」
　一人食べ終わってジロジロ見ていたものだから勘違いされたらしい。
　その言葉に納得した様子で麺を口に運んで飲み込んだ彼女は、周囲を見渡して一つため息をついてみせた。
「たしかにみんな食べ方がなってないわね。……ほら、せっかくニンゲンになったんだから食べ方もちゃんとしなきゃ。クー、零してるわよ」

「うにゃー？」

口の端からこぼした汁がクーの白い服を汚したのを見かねて、チビ助が布巾で拭いてやる。猫じゃらしの件といい、彼女は意外と面倒見がいいらしい。

ふと考えてみれば、チビ助のマナーは僕を見て覚えたもの……これはお手本としてあまり行儀の悪いことはできないな。彼女がなにか変な覚え方をしないよう気をつけないと。

そんなことを思っていると、にこにことしたシーザーがチビ助に話しかけた。

「チビ助さんとクーちゃん、とっても仲がいいんですね」

その言葉に、布巾を握る手を止めたチビ助は少しだけ考える素振りをして答える。

「んー、そうねぇ……会ったときからなんとなく気が合うのよね」

「ねー！」

満面の笑みで同意するクー。面倒見の良さそうなチビ助と、寂しがりやで甘えん坊なクーはなかなかに相性が良いようだ。

彼女らを留守中二人きりにしてしまう事が少し気がかりではあったが、この様子なら何も問題はないだろう。

いささか、チビ助には負担を強いてしまうかもしれないが――。

「――それで、話ってなんなの？」

そんな思考を読んだのか、食べ終えた丼を置いたチビ助がこちらの顔を見つめていた。

クーも冷ました麺をすすりながら視線と獣耳をこちらに向けている。

僕は同じく麺を食べ終えたシーザーと目をを合わせると、二人に事情をかいつまんで説明しはじめた。

※※

「多分、早くても三日は不在にする事になる。おにぎりはなるべくたくさん握っておくから残ってる間それを食べてくれ。日が昇れば電気も使えるようになるし、そしたらこのケトルでお湯を沸かしてその袋から……」

「ねえ」

僕が不在の間の食事について説明していると、今まで黙って聞いていたチビ助が、おもむろに口を挟んできた。

「……つまり、そのミスミってヒトを探しにわざわざ出ていくのよね？」

チビ助はやや困惑した様子で首を傾げてそう問いかけてきた。

同じく黙って話を聞いていたクーも、どこか不安げな表情でこちらを伺っている。

「にーちゃ、お外は危ないんでしょ？　目玉のオバケが出るってさっき……」

「ねえ、危険を冒してまで探しに行く必要はあるの？　そのヒトとは別に親子ってわけでもないんでしょう？」

怪我をして帰ってきたというのにまた外に出て行くのかとクーが問い、家族でもない人のために危険を冒すのかとチビ助は問う。

僕の横で、シーザーが不安そうに俯いているのが見えた。自分の都合で僕を危険に晒す事を気にしているのだろう。

俯く彼女の頭を軽く撫でると、口を開く。

「人はね、支え合わないと生きていけない生き物なんだよ」

不安そうなクーと、困惑するチビ助の目を見つめ返し、僕は話を続けた。

「だから、人は大人になって巣立った後でも親子同士……もっと言えば、血の繋がった他の親族とも縁で結ばれている。そして支え合うための縁は血族だけじゃなくて、いろんな人と繋がってるんだ」

こうして、クーやチビ助たちとも縁がお互いの関係を繋いでいるのだ。

「……三隅さん達には、昔からとても良くしてもらってきたから。それにシーザーにはさっき命がけで助けてもらった。その恩を今、返したいと思ってるんだ」

「くおんさま……」

感極まったように甲高く鼻を鳴らすシーザーの頭を再び優しく撫で付けてやると、僕

は静かに二人の反応を待った。
　しばらくの間黙って考え込んでいた二人だったが、やがてチビ助が大きく頷いてから顔を上げる。
「ニンゲンの社会については正直まだよくわからないけど……うん、そのミスミってヒトがあなたにとって大事なのはわかったわ」
　すっかり冷めたお茶の入った湯呑を指先で弄びながら、彼女はそう言った。
「そもそもあなたが行くって言ってるのに、あたしには止められるだけの理由なんてないわ――ただし」
　キランと、チビ助の目が光った気がした。
　彼女は湯呑の中身をグッと飲み干すと、口を開く。
「あたしもついてくから」
「クーも行く！」
　そう宣言したチビ助、そして間髪入れずに追従したクーに、僕は思わず呆気に取られてしまった。彼女らは人の姿を得て、人と同等の思考力を持っているとはいえ、これまで動物としての倫理観で生きてきたのだ。
　クーやチビ助にとっては見ず知らず、あるいはそれほど関わりのない誰か。
　そんな相手のために危険へ飛び込む僕をたしなめはすれど、同行を申し出るとは露と

も思わなかった。
「意外、って顔をしてるわね？」
そんな僕の内心の驚きを読まれたのか、チビ助はクーと顔を見合わせてくすりと笑みを浮かべた。
「うん、君らには危険を冒してまで僕についてくる義理はないと思ったし。水も食料もある家に居れば、危険な外に出る必要も――」
「そうね、確かにただのカラスだった頃なら、ついていこうと思わなかったでしょう」
僕の言葉を遮り、彼女は言う。
「自分の身が一番大事だもの。あたしの知らない人の為にわざわざ危険な所へ一緒になって飛び込んでいくなんて、ね」
だけど、と。空になった湯呑を細い指先で弄びながら、彼女は言った。
「この姿になって、あなたたちと過ごしてみて、なんとなくわかったわ。おともだち、ってそういう感じなんじゃないの？」
綺麗な顔で柔らかな微笑みを浮かべながらそんな事を言ってのける彼女に、僕は思わず硬直してしまう。
――おともだち、お友達。昨日、確かに僕はそう言った。
実際、先延ばしのために言ったような言葉ではあったが、人に近づかんとする彼女は、

彼女なりに考えてくれていたらしい。
「ていうか、さっきの話に出てきたカイブツにまた出くわしたらどうするつもりだったのよ、四匹がかりでやっとだったんでしょ」
チビ助は呆れた表情でそんな事を言うが、それについては僕にも考えがあった。
「シーザーの鼻なら近付く前にわかるんだ。なにもいちいち戦う必要は――」
その説明を、彼女は頭を振って否定する。ええ、なにが駄目なんだろう。
「風下から来たらどうするのよ。それにどうしても避けられない状態になったときはその子一匹の足ならともかく、あなたを抱えてだと逃げるのも難しいんでしょう？」
「……あ」
耳の痛い言葉だった。
確かに、いかにシーザーの鼻が利こうとも匂いの届かない方向から来られたり、囲まれてしまったら先程の二の舞となる。それに、今度は援軍など来ないのだ。
少々考えが足りなかったかもしれない、僕も少し焦りが過ぎたようだ。
そうやって言葉に詰まっていると、彼女は少し笑って言った。
「あたしなら、たぶんあなた一人くらいなら抱えて飛べるわ。それなら、緊急のときにもまだ逃げやすいんじゃないかしら？」
目的地までずっととかは無理だけど、と補足が入るが、ありがたい申し出だった。

僕というお荷物を抱えて飛べる彼女が居れば、クーやシーザーなら簡単に逃げられる。

仮に戦いが避けられなくなったとしても、空から奇襲ができる彼女がいればかなり有利になるはずだ。

「――ありがとうチビ助、実は結構不安だったんだ。クーも、おうちにいなくても大丈夫？　かなり歩くと思うけど」

クーは生まれてこの方、ろくに外に出たことのない、正真正銘の箱入りだ。ベランダから地上を見下ろしはすれど、玄関が開いても出たがったりする事もない。

「うん、だいじょーぶ！　むしろ一人でおうちにいる方が寂しくて嫌かな」

考えても見れば、クーを置いて何日も家をを空けたことなどない。精々が一泊二日だったはずだ。

「それに、にーちゃがまたおおケガして帰ってくるほうが嫌だから……」

そう言って俯くクーに目には薄っすらと涙が浮かんでおり、それほどまでに心配をかけてしまった事に申し訳なくなった。

「……うん、心配かけてごめんね。だけど、二人が一緒ならもう大丈夫だよ」

……幸いにも、これで道中で怪物に襲われた場合にもある程度の対処ができるだけの人手が図らずとも確保出来た事となる。

少しだけ、安心した。
「くおんさま、クーちゃん、それにチビ助さんまで……わたしのためにすみません。この御恩はきっと返します」
感激した様子のシーザーが涙ながらにそう言うと、チビ助は少し照れくさそうに頬を掻きながら手をひらひらと振る。
「まあ、あたし的にはクオン（おともだち）についていくだけだし、別にあなたが気にすることはないわ」
「おじちゃんたちの事も心配だからね！　シーザーと一緒に来たときはいつもおやつくれたし、遊んでくれたし！」
クーも笑顔でシーザーに応えた。以前は度々シーザーを連れてうちを訪れていた三隅夫妻は奥さん特製の手作りおやつを持参してくれていた。
よく考えれば、クーにとってもそれなりに三隅夫妻は思い入れがあるのか。
「……さて、日が暮れる前に準備をしてしまわないと。手伝ってもらっていいかな？」
僕らは食事の後片付けを終えると、出発の準備に取り掛かった。
明日の朝にはここを発つ。それまでにしっかりと準備をしなければ。

星野久遠の手記　2

■月▲日　曇り

隕石の消滅から二日目。今日は衝撃的な事があまりにもたくさんあり過ぎて正直どうまとめていいものか非常に悩む。

一日の濃さや衝撃度合いで言えば、昨日を抜いてぶっちぎりの一位だ。どう要約しても長くなりそうだしじっくりと書きたい事がたくさんあるけど、明日に備えて休まなきゃいけない上に疲れ過ぎて眠気がすごい。

とりあえず、思い出せる範囲で時系列順に書いていこうと思う。

1，全国的に大規模な停電が起きている

今朝、買い物カートを返しにスーパーに行ったときに停電に気づいた。

その時はまだ全国で起きているとは知らなかった。我が家は太陽光発電が備わっているので、日が出てる間は一応電気は使える。

水道もいつまで持つかわからないので水も確保してある。

後で書くが、これは怪物が原因らしい。

2，神様は実在した

危ない事とか他にも色々とあったけど、たぶんこれが一番の衝撃。

子供の頃に遊びに通ってた小さな稲荷神社にいつの間にか立っていたと思ったら、お稲荷様が目の前にいた。

あの感覚は言葉に言い表せないけど、間違いなく本物だと感じた。

あの神社において僕しか知らないはずの事を見ていたように語ってくれたし、なによりも目の前に立ってるだけで圧倒されて体が動かないとか、はじめての感覚だ。

お稲荷様は服から髪から全部が真っ白な女性だった。実体化したのも例の隕石が原因らしくて、彼女は白狐の擬人化動物の姿をしている。

キツネは遣いであってお稲荷様そのものではないはずだけど、彼女の話を聞く限り狐との縁から隕石による異変に便乗する事ができたらしい。

お稲荷様から聞かされた話は三つ、一つはかつて僕があの神社へ通っていた頃の思い出話。これは、まあ割愛しよう。

もう一つは流星、つまりは隕石の力について。流星の力は獣や、獣と強い縁を持った存在に人の姿を与え、それらの怪我や疲労を癒やす力がある。

お稲荷様はその力の塊（透き通った虹色のキューブをたくさん寄せ集めたような拳大

の結晶）を僕に預けた。
彼女から伝えられた傷や疲労を癒やす効果は、その後に起こった出来事で実証済み。
三つ目は、預けた流星の結晶を……えーと、たしかヤタガラス、八咫烏？　に渡してほしいというお願いだった。
駆け足で言われた上、その後にいろいろあったせいでちょっと記憶が曖昧だ。
八咫烏、といえば三本足のカラスの姿をした神様だと記憶している。たしか京都に神社があるとか聞いた覚えがあるような。
その八咫烏もお稲荷様と同じように人の姿で実体化しているのだろうか。
とにかく、京都はちょっと目的地を過ぎてだいぶ離れてる。
無理する必要はないし結晶を失っても責めないとか言われたけど、神様からのお願いなんて貴重な体験ではあるし、時期を見て京都に行ってみよう。
お稲荷様はそれを僕に手渡すと、すっと消えてしまった。
……この事についていま考えてみたら、この擬人化現象は永続じゃない可能性があることに気づいた。
お稲荷様も他の動物と同じように流星の力で擬人化（実体化）しているなら、その力を取り出し手放したから消えてしまったなら、他の……クーたちも体の中の流星の力が尽きてしまったら、もとの動物へ戻ってしまう？

それは、ちょっと嫌かもしれない。
どちらの姿であろうと、本質的には変わらないのだろう。だけど、言葉を交わして仲良くなれた今となっては、あの子達と話ができなくなるのはとても寂しいと思う。
特にチビ助はあの姿を手に入れたことを喜んでいて人としての振る舞いを自分なりに学ぼうとしているようだし、それをあとになって取り上げるのは……自然現象みたいなものとはいえ、残酷だと思う。
これについては情報が少なすぎるし、とりあえずは保留だ。

3，隕石由来の怪物が辺りを徘徊している。
お稲荷様と別れてから、鳥か何かの擬人化動物を襲っている所に遭遇した。
【久遠手書きの図：触碗の生えた丸い巨大な目玉のようなもの】

簡単に手書きしてみたけど、大体こんな感じだったはず。サイズとしては直径数メートルで、触碗はかなり伸縮する。
先についてる鰐口はホントにワニの口くらいはありそうで、人が噛まれたら恐らくひとたまりもない。
色合いは青全体的に均一な青色で、目の部分のみ白と黒。

表面はゼリーのように波打ってるけど、見かけ通りじゃないと思う。
1～2メートルほど空に浮かんでいて、結構な速さで追いかけてくる。こっちは道なりに逃げなきゃいけないのに、向こうは一直線に飛んで来るから逃げるのは容易ではない。ぶっちゃけ死にかけた。
体は相当重たい様子で、飛びかかってきた勢いでアスファルトを砕いてしまった。
アスファルトやブロック塀を壊すほどの勢いでぶつかっても損傷が見えなかったことから相当頑丈、もしくはゼリーみたいな質感通りに傷がついてもすぐにくっつくのだろう。触碗はちぎれても新しく生えてきたし。
ちぎられた触碗や砕かれた体の一部が虹色の輝きに分解されたことから、この怪物も擬人化動物たちと同じく流星の力が由来だと推測できる。（まあ、それ以外ないけど）
襲われた所に駆けつけてくれたシーザー、ダンシャク、まゆげ、ハナコら擬人化動物にたちによる攻撃によって退治されたため、同じ流星の力を持った彼女らであれば攻撃が通りやすいのかもしれない。
ゼリー状の体は砕いても砕いても小さくなるばかりで中々倒すことはできないものの体内には硬質な核のようなものがあり、それを破壊することで完全に倒すことができるらしい事がわかった。

4，政府からの報せ

政府からの報せがウミウの擬人化動物によって届けられた。

長ったらしいので内容の一部を要約すると

・隕石の消滅の直後から怪物が現れ始めた。公的には敵性不明生物と呼称（長いのでここでは怪物で統一する）。

・怪物は一見ゼラチン質のように見えるが、衝撃に対して非常に強靭。

・怪物は人の密集する地域や、発電所等の近くに多く出没する。

・怪物は人を捕食する場合があり、その後数分から数十分程度で排出する。捕食されると記憶の一部を失ったり、昏睡状態に陥るなどの症状を起こす。

・怪物はエネルギーを求める性質もあるのか発電所を襲って破壊、全国的、ひいては世界的に大規模な停電が発生、その為通信手段も制限されている。自家発電にも反応する場合があるので大掛かりな発電は控えること。

・自衛隊が人員を集めて対処に当たるも、状況は芳しく無い。

・怪物が車両やヘリ等を捕食しそれらを模した姿を取ることが確認されたため、動きのおかしい車両やローター音のしないヘリなどには近づかないようにすること。

怪物に関しては上記のような内容となる。

やはり、停電は怪物によるものだったらしい。自衛隊の手にも余る戦闘力に加えて擬

態能力まで備えるとなると、遭遇を避けるためにも細心の注意を払う必要があるだろう。

捕食に関しては……うん、状況によっては捕まってしまっても死なないこともあるという事で前向きに見ようか。

次に、政府が把握している擬人化動物に関する情報をまとめると

・怪物よりも後の話となるが、動物の擬人化現象が確認された。

・大半が十代の少女の姿をしており、現状は男性型も一切確認されないため公的には「アニマルガール」と呼称。（長いので以下略）

・人型ではあるものの変化前の性質を残しており、強靭な身体能力や飛行などの特殊能力を持っている。

・言語によるコミニュケーションが可能であり、友好的な交流が可能。

・怪物は人間より擬人化動物を優先して襲うが、彼女らには怪物を撃退する能力を持っていること。

・怪物に捕食されると、元の動物の姿に戻ってしまうこと。

・擬人化動物は変化前の記憶を維持しており、飼い犬が元となった擬人化動物等は怪物から積極的に飼い主を守る傾向がある。

・現在、警察犬や警備犬による怪物対策を進めている。

要約すると、彼女らに怪物から守って貰えと言うことだろうか。
隕石騒動の直後で人員の確保が難しいだろうとはいえ、自衛隊が手こずるなら、同じ超常の存在に頼るしかないというのはわかる。
政府がウミウや伝書鳩の擬人化動物を伝達手段としてさっそく取り入れているところから見ても、状況が切羽詰まっているのが見える。
怪物が人の密集する場所に集まるということは、避難先であるシェルターのある町は確実に怪物が集まっているだろう。
実際、被害が確認されている地域の中には、三隅さんの避難先もある。
……シーザーが心配しているというのもあるが、僕としても三隅さんの安否は気になっている。
明日、シーザーたちとともに三隅さんの避難先へ出発する。
シーザーの鼻を頼りに三隅さんと合流できたら、とっとと帰るつもりだ。
人に寄って来るらしい怪物がいる以上、こちらのほうが恐らく安全だろう。ひょっとしたら、シェルターを破壊して侵入できるような怪物も出てくるかもしれない。
さて、準備も終わっていることだし、そろそろ明日に備えて寝よう。

恩人を探して
第十三話　雷雨　1

けものわーるど　13話「雷雨　1」

雨垂れが激しく打ち据える音が響く。周囲を覆っている闇は時折思い出したように真っ白に塗りつぶされて――。

ぴしゃぁん、と鋭い音を周囲に響き渡らせる。凄いかみなりね。

「ひゃぁあああ――!!」

耳をつんざく音と衝撃が響く度に情けない悲鳴を上げ、全ての耳を両手で器用に抑えて震え上がるシーザー。

深くため息をついて腕の中の重みに視線を落とすと、そこには激しく震えながら浅い息を繰り返す白い顔――クオンの姿がある。

……その肌は普段からひんやりとしてはいたけど、今の彼はそれを通り越してぞっとするほど冷たいものになっていた。

濡れた毛皮をすべて剥ぎ取って、既に乾いていたあたしの羽毛やシーザーの毛皮を一部外して彼をくるんでいる。

そして一番体が暖かくて怪物が来ても飛んで逃げられるあたしが抱えて温めてはいるのだけど……彼の震えは一向におさまらない。

ヒトの体の事について詳しく無いあたし達でも、これが良くない状態であることはっきりとわかった。

「くおんさま、ごめんなさい……私のせいで……」

かみなりの音に怯えながらクオンの冷たい手を握るシーザーの目からはぽろぽろと雫が垂れていた。

その手を彼は眠りながらも弱々しく握り返す。

「あなたのせいじゃないわ、天候なんてどうしようもないもの。それより、怪物がこないかちゃんと見張っててね」

「ごめんなさい、ごめんなさい、雨でニオイも分かりにくくて……」

そう言って俯くシーザー。

さっきからずっとこの調子だ。

「わかってるわ。でも、あたしたちの中で一番鼻が利くのはあなたなの、万一の時に素早く逃げるためにお願いね」

「はい……」

申し訳なさそうにうなだれるシーザーの姿にあたしはため息をついて、クーが出て

行った出入り口に視線をやる。
……あの子は「見たことあるから大丈夫！」なんて言ってたけど、本当にヒトの〝おくすり〟を探してこれるのかしら。
怪物に鉢合わせたり、他の子のナワバリに踏み込んで喧嘩になったりしたらと思うと心配だけど……今はあの子に頼るしかない。
荒い呼吸を繰り返すクオンの体をぎゅっと抱き寄せたわたしは、その冷たさに身震いする。
「……どうして、こんな事になったのかしら」
かみなりの鋭い音とシーザーの悲鳴を聞きながら、あたしはどしゃ降りの天を透明な壁ごしに仰いだ。

※※
激動の二日目から一夜明けて、出発の朝が来た。
玄関の外でクーたちの黄色い声が聞こえる。女三人寄ればとは言うが、それは元が動物であっても変わらないらしい。
元オス二匹と性別不明だけど。そして僕はというと、忘れ物が無いかの最終確認を一人行っていた。

「……食料(おにぎり)よし、水よし、着替えよし、地図とコンパスよし、と」

クローゼットから埃のかぶった大ぶりのリュックサックを三つ見つけ出し、昨夜の内に用意したものは詰め込み終えた。

水と食料は消費量を調節すれば三日程度は軽く持つはずだ。

かなり重くなってしまったが、頼もしい事にクーとシーザーが軽々と持ってくれた。

他に必要そうな懐中電灯も電池ごと確保したし、コンパスもとりあえずは北を指してるし、地図は……かなり前のものではあるが、まあ大丈夫だろう。

絆創膏や消毒液、ガーゼや包帯も一応入れてあるし、幸いにも着替えが必要なのは僕だけなので荷物はかなり抑えられたはず。

……こうやっていざ準備してみると、どんな物が旅に必要なのか想像以上に迷ってしまったな。これでも抜けがありそうで怖い。

しかし、不謹慎ながら少しワクワクしている自分もいた。

事情が事情だけに楽しむ余裕などないだろうが、こういったアウトドア的な行いは子供の頃、父に数回連れて行ってもらった日帰りのキャンプ以来だし。

野山に出る訳でもなく、舗装された道をひたすら歩くだけとはいえ普段全くしないような事だからなぁ……。

履き慣れたスニーカーの紐をキツめに結び自分の荷物を背負うと、僕は玄関を開けて

外で待つ三人に……三人に、あれ、いない？
確かに声はしていたはずなのにと、周囲を見渡していると頭上からクーの楽しげな声が降ってきた。
「おーい、にーちゃーー！」
「えっ……おっふ」
声につられて天を仰ぐと、煌々と輝く太陽の横にいろんな意味で眩しい光景が広がっていた。
頭上には楽しそうにはしゃぐクーを背負い、引き攣った顔のシーザーを両手で抱えるチビ助がふわふわと浮かんでいる。
……なるほど、二人を抱えても飛べる能力があるならば、いざという時に僕を抱えて飛んで逃げるという提案も実行可能か。
しかし、相変わらず彼女らは無防備というかなんというか、これについての指摘をするべきなのかどうなのか。
まあ、仮にしても理解してもらうのは難しいだろうけど。
「今そっちいくねーー！」
ぼんやりと考えていると、クーがそんなことを言い出した。
「あ、ちょっとー」

「ちょ、危な――」
　クーはチビ助が制止する間もなくその背中から手を離し。
「えいっ」
　お向かいの家の屋根へ音もなく着地すると……。
「ほっ、よいしょ！」
　軽々とブロック塀を経由し、虹色の粒子を足元から散らしながら僕の前へ降り立ったクーが誇らしげにポーズを取った。
「どう!?　すごいでしょー！」
「ああ、うん……凄いけどちょっと心臓に悪いかな……」
　ドヤ顔のクーの背後に、呆れた顔をしたチビ助と、いろんな意味でほっとした様子のシーザーがゆっくりと降りてくる。
「もう、いきなり手を離したらびっくりするじゃない」
「クーちゃん、いくら猫でもあの高さは危ないと思う……」
　続いて着地した降りてきた二人に、クーは笑顔を向ける。
「ごめんね！　でもへーき、これくらいひょいっといけるよ！」
　ほら、というやいなや、ブロック塀を踏み台に高く跳躍したクーが空中で数回転をしたのち地面へ華麗に着地する。

そしてドヤ顔。

……どうやら、普通の猫だったときと比べても飛躍的に高まった身体能力に気づいてややテンションが上がっているらしい。

ずっと家の中にいたからあの跳躍力も発揮できなかったしな。

「すごいすごい。……さ、クオンも飛んでみましょうか」

「えっ」

やる気ない褒め言葉に続いて出てきた言葉に僕は面食らう。

何という無茶振り。猫でも雑技団員でもないのであんな動きはできっこないのだ。死んでしまう。

「僕はあんな曲芸できないけど」

「いや、そうじゃなくて。あたしが抱えるから試しに飛んでみましょって事よ、何かあった時にいきなりじゃ不安でしょ?」

と、思っていたら違ったらしい。

なるほど、たしかに今のうちにちょっとでも抱えられて飛ぶ事に慣れておいた方ががいいのかもしれない。

「慣らしておいたほうがいいですよ。私もやってもらいましたが、地に足がつかない感覚というのはこう、ちょっと慣れないです……」

シーザー的には先程の空の旅もちょっと辛かったらしい。よく見れば彼女の顔色はどことなく青く、膝もぷるぷると笑っている。
「ふぅん、翼を持たないけものには新鮮かもね。さ、クオン？」
「あ、はい。……お願いします」
リュックを下ろしてしゃがむと、彼女はシーザーにやっていたように背後に回り僕の脇から細い腕を回し、しっかりと抱きしめた。
「おっふ……」
「ん？　どうしたの？」
突然奇声を漏らした僕に、チビ助の腕の力が緩む。
「あの、いや……なんでもないです」
「そう？　苦しかったら言ってちょうだいね」
そう言って彼女は再び腕に力を込めた。
見た目は華奢なのに、そのしっかりした保持はまるで遊園地の固定具の如き力強さを感じる。
それでいていろいろ柔らかいというか……なんていうかね、この体勢だとどうしても当たるんだ。
煩悩が脳を駆け巡っていると、体がぐっと持ち上げられた。

「さっ、飛ぶわよ！」
「よろしく――っ!?」
言い終わるかどうかくらいのタイミングで、体へGが掛かる。
急速に遠のいて行く地面を視界に捉えながら、背後の彼女に身を委ねてじっとする。胸元を締め付ける細腕は微塵も揺るがない。
……この分なら落ちる心配は必要なさそうだが、所在なくぷらぷらと揺れる足元が心もとなく、少しだけ怖かった。
地面がある程度遠のくと速度は徐々に落ちてゆき、やがてチビ助は上昇をやめて一定の高度に留まった。
足下のはるか下では小さくなった二人が手を振っているのを眺めつつ、冷たい風が体の隙間を吹き抜ける感覚に少し身震いする。
「はじめての空はどうかしら？」
緩やかな羽音と共にどこか楽しげな囁きが耳元をくすぐる。
「風が気持ちいい、でも足元に何もないってのは結構怖いかな」
正直な感想を述べると、チビ助はくすくすと笑う。
「ああ、慣れない内はそうかもしれないわね、でも落としたりしないから安心してちょうだい。……さ、旋回しながら降りるわよ」

彼女はそう言うと大きく螺旋を描くように飛びながらゆっくりと下降し始めた。朝焼けの中、ひんやりとした風を全身に受けながら見る地上の景色はとても清々しい。
空に浮かぶ小さな雲の群れを眺めつつ、僕らは地上へ舞い戻る。

「みんな荷物はちゃんと持ったな？」
はーい、という元気な返事を聞きながら三人の姿を確認する。
水入りペットボトルが詰まったリュックをシーザーが、おにぎりや缶詰め等の食料を詰めたリュックをクーが背負っている。
空からの偵察役兼、緊急時の離脱要員であるチビ助は双眼鏡を首から下げるのみと軽装だ。双眼鏡の使い方を教えると、彼女は夢中になってレンズを覗き込んでいる。
「これ、スゴイわね！　遠くの景色がすぐ近くにあるみたい」
「その分視野は狭くなるからそこは気をつけるようにね。それじゃ、空からの偵察は頼んだよ」
「まかせなさい！」
笑顔で頷いた彼女は軽く膝をかがめると、頭の翼を広げて力強く地を蹴る。虹色の粒子の尾を引きながら空へ翔けたチビ助は上空でしばらく周囲を見回ると、やがてこちらへ顔を向けて叫んだ。

「近くに大きな怪物は居ないみたいよー！」
　それに大きく手を振りながら返事をする。
「わかったっ、疲れが出ないよう適当に降りて休憩挟んでなー！　……それじゃあみんな出発しようか！」
「はいっ！」「しゅっぱーつ！」

「そういえば『りーど』なしで出歩くのってちょっと新鮮ですね。ちょっと違和感あって落ちつかないです……じーっ」
「絵面が悪いし話が通じるなら必要ないからね！」

「なにこれ！　お水がいっぱいー！」
「アレは川だよ。……そっか、クーは生まれてから外出た事がないんだもんなぁ、川も海も知らないか」
「うみー？」
「昔ご主人さまご夫婦に連れて行っていただいた事があります！　しょっぱいお水がたくさんある所ですよ、あの時ははしゃぎ過ぎて溺れかけちゃいました……」

「はは……落ち着いたらみんなで行こうか、海」
「やった！」

―――――――――――――――

「クオン、ちょっといいー？」
　前回の休憩から三十分ほど経った頃、頭上から僕の名を呼ぶ声とともにチビ助が目の前に降り立った。
「おつかれさま、結構長いこと飛んでたな」
　虹色の粒子が舞う中、彼女は頭の翼を手櫛で羽繕いする。民家の屋根や電柱で時折休んではいたものの、飛続けるのは疲れそうだ。
　日は既に高く登り、今の季節とはいえ喉が渇くだろう。
　リュックからペットボトルを取り出すと、キャップを開け呼吸を整えている彼女に手渡した。
「ありがとう……この辺り見通し悪いからね。それでなんだけど、そこを右に曲がって少し進むと小さいのが一匹いたわ」
　ボーリングの玉が入る程度の大きさを作る彼女に、ついに出たかと顔がこわばるのを自覚する。

「この辺には居ないのかと思ってたけど、居るんだな……」
あの怪物の危険性は身を持って知っている。なにせ、昨日殺されかけたばかりだ。
「偶然かもしれないけど、こっちの方に来てるのよね」
「こちらが風上なので気づかれてるかもしれませんね。小さいのは大したことないって話ですけど……どうします？」
不安げに眉をひそめながら尋ねるシーザー。あるいは、僕が首から提げている巾着に入った結晶を感知されるかもしれない。
「そのくらいのサイズならクーでもやっつけられそうじゃない？」
「……わざわざ戦う必要もないだろ。若干遠回りにはなるけど別の道を通ってやりすごそう」
準備運動として手をニギニギするクーに、僕は首を降った。
ダンシャクたちは大したことがないと言っていたが、警戒するに越したことはない。なにせ、相手はこの旅で最大の障害なのだ。

「この住宅街を抜けてしばらく行ったら、この高速道路に乗ろう」
「こーそくどーろ？」

通りかかった公園のベンチに腰掛けながらのお昼休憩。おにぎりを片手に地図を見つつ、僕は皆に説明する。

「自動車専用の道だな。とはいえ今なら車も走ってないだろうし、地上と比べても見通しがいい。万一怪物が陣取ってもチビ助がいれば簡単にやり過ごせるし、いいことずくめだ」

そして何より道が単純だ。紙の地図のややこしさに、いかに今までスマホの地図アプリに頼っていたかがよくわかった。

可能な限り間違えにくい大きな道を選んでチビ助という文字通りバードビューな視点の補助を得てなお分かりづらいところが何度かあったし。

「へえ、見通しがいいならあたしも飛びっぱなしにならなくて済むだろうし、いいんじゃない？」

「ふーん、じゃあそっちにいこっか」

もぐもぐと頬張っていた鮭おにぎりを飲み込んでチビ助とクーが同意。昆布おにぎりを咀嚼しながらシーザーも尻尾で賛同する。

「高速道路でまっすぐ行けば明日の昼過ぎには目的地の辺りまでは行けるはず。さっさと行って三隅さんと合流しよう」

「はいっ！」

「って思ってたんだけどなぁ。……っくし！」

――雨。それもバケツをひっくり返したような土砂降りだった。

高速道路を渡り始めて数時間、迷う心配もなく意気揚々と歩いていたらこれである。降り始めてすぐ慌ててチビ助に高架下へ下ろしてもらったものの、開幕土砂降りだったため時既に遅し。

……というか天気予報も見れず聞けずで長距離歩くのに雨具忘れるとか迂闊にも程があるぞ、僕。

「ひゃー、久しぶりにすごい雨ですねぇ」

「うー、びしょびしょ……」

ブルブルと全身を振り水気を飛ばすシーザーと、必死の形相で毛づくろいをするクーを尻目に、僕はリュックを開けて天を仰いだ。着替え、全滅である……ビニールか何かで包むべきだった。

地図も濡れてしまったが、高速道路沿いなら迷わないだろう。

そんなことを考えていると、誰かが僕の服の袖を引っ張った。

「……ちょっとクオン、大丈夫？」

「うーん、ちょっと雨宿りしてからの移動になるかな」

「そうじゃなくて。震えてるじゃない、アナタ」
僕の服の袖をつまんでチビ助はそう言った。可能な限り絞ったとはいえ、じっとりと水を吸い込み体に張り付いた服は風が吹くたびに震え上がる程冷たい。
「うん、正直めっさ寒い。どっか屋内に入らないと風邪引きそう」
「やっぱりね……ヒトの毛皮って、全然水を弾かないんだもの。水が染み込むとどれだけ冷たくて気持ち悪いかこの間よく分かったし」
そう言うと、彼女は冷水シャワーの一件を思い出したのか身震いした。水を弾く羽根をもつ彼女らにとって皮膚までずぶ濡れは未知の体験だったのだろう。
「濡れた毛皮は脱いだほうがいいんじゃない？」
「いや、着替えも濡れちゃったからね。着てたほうが早く乾くし」
「……そう？　とにかく、雨も風も凌げる場所を早く探しましょう。クー、シーザー、なるべく濡れずに行ける場所、探すわよ！」
その言葉に横で聞いていた二人は力強く頷く。
程なくしてシーザーが見つけた高架下のコンビニに僕ら一行はお邪魔する事となった。
順調だと思っていた旅路は既に遅れが出始めている。なるべく早く雨が止んでくれるといいんだけど……。

第十四話　雷雨　2

「うへぁ、凄い荒らされてるなぁ……」
「まあ、雨風しのげるなら上等じゃない？」
雨宿りに入った無人のコンビニは酷い荒れ様だった。
表のガラスはひび割れの跡が散見し、動かない自動ドアをこじ開けて中に入ってみれば商品の大半が持ち去られ、棚が薙ぎ倒されたり、カラーボールが壁に叩きつけられと散々な有様だった。
「な、何があったんでしょうか」
「隕石騒動末期は放棄された無人の店で悪ふざけするのがヤケになった連中に流行ってたからな。ここに来る途中の店もやられてたし」
ビクビクしながら周囲を見渡すシーザーに説明しつつも外からの僅かな明かりを頼りに着替えを探すが、不発に終わってしまった。
僕が着られそうな物は一つも残っていない。それならばと外へ出るための傘を探してみるもこちらも全てへし折られている始末。
「ダメか……地図と食べ物が多少残ってるだけ御の字だな」

引き倒された雑誌の陳列棚から無事な地図本を見つけられたものの、肝心なものは何も残っていない状態だった。
「どうする？　他の場所探す？」
床に散らばった雑多なものを拾っては戻しを繰り返していたチビ助の質問に、外の様子を一瞥して首を横に降る。
「……いや、探しに出て余計濡れるより素直に雨が止むのを待とう」
少なくとも、扉を締めておけば風に晒されることは無いのだ。
ひとまず天候の回復待ちつつ体を休めて、明日に備えるのがいい。
「そう？　それで大丈夫ならいいけど……」
心配そうな表情を浮かべる彼女に苦笑を浮かべつつ、ここで休むための準備を始めた。

※※

「家がこの辺りで、予定だとこの辺まで進んでから夜を迎える予定だったんだけど……今はこの辺りかな」
「かなり、遅れが出てますね……」
床に広げた地図を指さしながら説明すると、シーザーが顔を曇らせる。一刻も早く三

隅さんと合流したいのは山々ではあるが……。
「この雨じゃ仕方ないわ。無理して体調を崩したら大変だもの」
「そう、ですよね……」
チビ助はそう言ってうつむくシーザーにもう一つおにぎりを押し付ける。
受け取ったシーザーは彼女に感謝の言葉を述べつつ、もそもそと食べ始める。
「あめ、やまないねー」
おにぎりを咀嚼しながら、ガラス越しの空を見上げたクーが零す。
灰色の空はすっかり黒く染まり、大地を洗う分厚い雲は月の気配すら隠してしまっている。店内で見つけた非常用ロウソクの揺らめく僅かな明かりだけがこの場所で唯一の光源となっている。
店内の邪魔なものを退けた僕らは、バックヤードで見つけたダンボールを敷いた床に腰を下ろして夕食をとりながら話し合っていた。
「……これだけ雨音がうるさいと、怪物が近づいて来ても気づけないかも知れないわね」
「はい、これじゃにおいもほとんどわからないですし……」
チビ助とシーザーも不安そうに外を眺めている。二人の危惧する通り、人智を超えた感覚を持つ彼女らの索敵すら鈍らせる悪天候は怪物の接近を感知できない。
オマケに停電中で真っ暗な中でここだけ明かりが付いているとなれば、それを頼りに

怪物が寄ってくる可能性も否定できない。
かと言って明かりを消せば真っ暗な闇で何も見えなくなってしまう。
そこまで考えて、ふと思う。彼女らは揃って真っ暗な外へ視線をやっているが、もしかして動物だった頃と変わらず夜目が効くのか。
そう思って訊いてみるとやはり三人とも頷いた。
「うん、普通に見えるよー」
「雨で視界は悪いけど、ある程度はね」
「私もそれなりには……」
……流石は元動物と言ったところか。
怪物が正面からやって来てもこれである程度感知できる訳だ。
水を一口飲み込み、体に広がる寒気に身震いする。多少は水気が飛んだ感じはあるものの、服は未だにジットリとした湿気を含んでおり、すっかりと身体が冷え込んでしまった。
乾きやすい彼女らの服もとい毛皮が本当に羨ましい。
「もう九時か、大分時間が経ったけど止む気配がないというか……」
「むしろ、強くなってる気がします……」
普段ならニュースなりなんなりて大雨洪水警報が出ているであろうレベルの雨だ。

停電で都市機能が低下してる所にこれって大丈夫なんだろうか、近くに氾濫しそうな河こそないが、雨そのもので水没しそうで怖くなってきた。この辺は平気だろうか？

不安な気持ちを頭を降って振り払う。今考えても仕方がない。

「とりあえず、明日に備えて寝ようか。外の見張りは……」

「見張りならあたしたちでやるから、クオンは休んでなさい」

チビ助の言葉に驚いていると、三人は笑みを浮かべる。

「そもそもアナタ、夜目が効かないんでしょ？」

「そうそう、それにクーは夜行性だからね！」

「なので、くおんさまはゆっくりとお休み下さい。かなりお疲れのようですし、みんな心配してますよ？」

少しだけ考えて、僕は彼女らの言葉に甘える事にした。三人の手前痩せ我慢をしてはいたが、実際かなり疲れが溜まっている。

普段長距離を歩くことはしないからか、足にはいくつかマメができているし、冷えすぎて手足の感覚は薄れてる、筋肉痛も確定だ。

……冷静に考えるとなかなかの疲労困憊っぷりだな、ここは素直に甘えて明日に備えるとしよう。

「ごめん、それじゃあお言葉に甘えさせてもらおうかな」

「ええ、そうしてちょうだい」
「怪物が来たら私たちが知らせますのでご安心ください」
「小さいのだったらクーがやっつけちゃうからね！」
頼もしい言葉に安堵しつつ、広げたダンボールを被り横になった。
普段なら寒くてなかなか寝付けなくなりそうなものだが、たまりに溜まった疲労感はいとも簡単に僕の意識を眠りへ落とした。

※※※

「……寝たみたいね」
だんぼーる？　に包まってほんの何呼吸かの間に寝息を立て始めたクオンを見てあたしはほっと胸を撫で下ろす。
「いつもならまだ起きてるけど、今日はすぐ寝ちゃったねー」
「ずっと『ちず』を見て私たちが迷わないよう、ずっと気を張って下さってましたから。きっととてもお疲れなんでしょう」
並んで胸を上下させるクオンを眺めていたあたしたちは、その眠りを妨げないようそっと離れると『ろうそく』の火を吹き消す。
暗くなった視界はやがて二人の顔が浮かび上がらせた。

「もう、一番疲れてるでしょうにあたしたちにばっかり気を使って。足も痛めたみたいだし、寒そうにしてるのに『平気平気』って痩せ我慢しちゃってから……」
「昔から優しいお方ですから。今までずっと甘えっぱなしなので、こうして少しでもお役に立てることがあれば嬉しいです」
「普段はにーちゃが何でもしてくれるもんねー」
そう言って顔をほころばせるシーザーたちに、私はふと思った疑問を投げつけてみることにした。
「そういえば、アナタ達はどうクオンと出会ったの？」
この中で一番クオンとの付き合いが浅いのはあたしだ。彼女らとクオンがどう出会い、過ごしてきたのか気になってたのよね。
「にーちゃと？　うーん、覚えてる限りだとずっとにーちゃと一緒だったからなー。わかんないや！」
「わたしは、まだただの犬だった頃にですね……恥ずかしながら、ご主人さまの家を飛び出し迷子になってしまった事がありまして」
ゴシュジンサマってのは、いま探しに向かってるヒトの事ね。
「その日の朝も今ぐらい荒れた天気だったのをよく憶えています。当時のわたしは雨の降り込まない外の小屋で過ごしていたんですが、突然おうちの前にある石の木にかみな

りが落ちまして……」

　そう言って、シーザーは当時を思い出したように耳を伏せ身震いする。かみなり、たしかに怖いわよね。

「それはもう、言葉にできないくらいすごい光と音でした……！　とっても驚いて何がなんだか分からなくなってしまったわたしは、とにかく無我夢中で走り出しました」

「そうして気づいたら、いつの間にかわたしは全然知らない場所で一人ぽつんと立ちすくんでいました。雨でにおいもわからなくて、遠くでかみなりの音がなる中、見知らぬ場所で一人きり……」

「それはもう、とても恐ろしい経験でした……。毛が濡れて寒くて、かみなりの音が恐ろしくて、ただただ心細かったのを憶えています」

「ただひたすらに叫んで、ご主人さまを呼んで。声はご主人さまに届かなくて……もう二度と、会えないのかと泣いていました」

「そうして途方に暮れていた時、通りががったくおんさまが助けてくださったんです」

「くおんさまのお宅へ上げられて、濡れた毛皮を拭いて温かい風で乾かしていただいて、ご飯まで頂いて……」

「そのまま疲れて眠ってしまったんですけど、聞き覚えのある声で目を覚ましたら目の前にご主人さまがいて！」

「もう嬉しくて嬉しくて……くおんさまは、どれだけ感謝をしてもし足りないくらいの恩人なんです」

そう語るシーザーの顔は、外の天気とは裏腹に晴れ上がるような笑顔だった。

そしてその感情に釣られて尻尾がゆらゆらと穏やかに揺れていた。そっか、クオンは昔から優しかったのね。

「そんなことあったんだ、知らなかったー」

「ふふ、クーちゃんがまだ生まれてなかった頃のお話ですから」

「そーなんだ？」

目を丸くするクーの様子に、シーザーはくすりと笑う。

「クーちゃんは産まれたての赤ちゃんだった頃くおんさまのおうちに来たんですよ？お散歩の途中でくおんさまのお宅へ寄った際、よちよち歩きのクーちゃんをくおんさまに見せていただいたのを、よーく覚えています」

「赤ちゃんだった頃かー、覚えてないや」

そう言って首を傾げつつも幸せそうに笑うクーと、それを見守るシーザーの様子を見て羨ましさを感じる。

クオンにとってあたしは餌付けしていた群れ内の一羽でしかない。

だけど、今は言葉で通じ合えるようになった。二人に負けないくらいの思い出を積み

重ねていけたらいいな、と漠然と思った。
そんな風に彼女らの思い出話に夢中になりながら過ごしていると、不意に視界が白く染まった。
――それから少し遅れて、ズドンという大きな音が響き渡る。
「きゃあああああ!?」「ひゃあ!?」
その爆音に、シーザーとクーが文字通り飛び上がる。
「落ち着いて、ただのかみなりよ」
ゴロゴロという地響きが止むと、あたしは縮こまっている二人にそう言った。クーが恐る恐る伏せていた顔を上げると、再び暗い空が白く染まる。そして、再度響き渡る音。
「ひぃぃぃぃぃ……!」
縮こまったまま震えるシーザーと、なんとか落ち着きを取り戻したクーにあたしは小さくため息をついた。
「……クーはもう平気かしら?」
「う、うん。ちょっとびっくりしたけど」
「そう。シーザーは?」
おずおずと耳を立てながら返答するクーに対し、シーザーはその場で丸まって震えている。驚かさないようゆっくりと近づいてその場にしゃがんだ。

「大丈夫？」
「だ、駄目かもしれませ――ひっ！」
再び鋭い光が走り、シーザーはますます震え上がる。
……どうしたものかしら、このままにはしておけないし。
「シーザー、かみなりの時はいつもどうやり過ごしてたの？」
そう耳元で語りかけると、シーザーはビクビクしながらも顔を上げてこちらへと視線を向ける。
「ご、ごしゅじんさまやおくさまに抱きしめてもらってました……」
ゴシュジンサマ、つまりは人間ね。この騒ぎじゃクオンも目が覚めるでしょうし、悪いけどちょっと手を貸してもらいましょうか。
「クオンもそのゴシュジンサマと同じくらい好きなんでしょう？　ちょっとこっち来なさい、ほら！」
「あ、あわわわ……！」
怯える彼女の手を引き、横になるクオンのところへ向かう。
再び響いたかみなりの音に驚いてしゃがみこんだシーザーを一旦放置して、横になったクオンへ声をかける。
「クオン？　ちょっと申し訳ないんだけど、シーザーがかみなりに怯えちゃってるから

抱いて寝てやってくれない？」

寒がってたしちょうどいいでしょう。そう思って彼の肩に手を掛けると、湿った服越しにわかるほどその体が冷たい事に気付いた。その体は小刻みに震え、カチカチと歯のなる音が雨音の中でかすかに聞こえている。

「ちょ、ちょっとクオン？　大丈夫？」

奥を向いて横になっている彼を慌てて抱き寄せるとその体は驚くほど冷え切っていて、激しく震えていることがはっきり分かる。

どうすれば良いのかとうろたえていると、クオンが薄目を開けた。

「……ちびす、け？」

カチカチと歯を鳴らしながらかすれた声であたしを呼ぶクオン。

「ちょっと、寒い、だけ。ごめん」

そう答えた彼の様子は明らかにおかしく、危険な状態になっているのは明らかだった。あたしはとっさに彼の体を抱きしめて叫ぶ。

「シーザー、クー！　クオンがおかしいの！」

窓にへばりついていたクーも異変を察知してこちらへ駆け寄り、耳をふさいで丸まっていたシーザーも顔を上げた。

「にーちゃがどーしたの？」「くおんさま……？」

訝しげな様子の二人にクオンの様子を見せると、彼女らは目を見開いてこちらへ詰め寄ってきた。
「な、何があったんですか!?」
「体が冷たくて、すごく震えてるの！　ヒトがこうなったときどうすれば良いのかアナタたち知らない!?」
動揺する二人に尋ねる。
「あ、そっか、濡れたから冷えちゃったんだ……！」
「寒がっているなら、体を温めましょう！」
二人の言葉に、あたし自身も取り乱していた事を自覚する。
先日、冷たい水が毛皮に染み込んだとき、彼は驚いてすぐに毛皮を外して温まっていた。濡れた毛皮は体を冷やしてしまう。
なら、早く外さないと！
「二人とも、クオンの毛皮を外すわよ！」
「わかりました！」「わかった！」
意識がはっきりしないながらも僅かな抵抗を見せるクオンだったけど、三人がかりで湿ってへばりついた毛皮をすべて剥ぎ取る。
「よし、取れたわね。次は……そうね、あたしたちの羽毛や毛皮で彼を包むみましょう、

そうすれば少しは温かいはず！」
あたしたちの体はもう乾いている。それで包めば今よりは温かくなるはず。
あたしは自分の羽毛を外し、彼の体へ巻いてゆく。二人もそれに習い首から下をすっかりと覆ってしまう。
濡れた毛皮を着ていた頃に比べればかなり温かいハズだけど、それでもクオンの震えは止まらない……どうしよう。
「あとは……どうすればいいか、わかる？」
ヒトと暮らしていた二人なら、何かわかるかもしれない。そう思ってすがる思いで聞くと、二人は頷いた。
「うん！　にーちゃが体調崩して寝るときはいつも『おくすり』っていうのを食べてたのを覚えてるよ！」
「『おくすり』！　私も病気で苦しい時とかにご主人さまが『おくすり』を食べさせられたのを覚えてます！　きっとあれがヒトが病気を治すときに使う食べ物なんですよ」
二人は自信有りげにそう言うが、あたしはその『おくすり』とやらを知らない。それはどうやって手に入れるのかしら。
そう思って尋ねると、二人は首をひねる。
「ええと、白くて小さくて、まあるい形をしていたかと……」

「たしかそういう形だったね、箱の中で銀色の板にひっついてたのを見たことある、落ちてるので遊ぼうとしたら怒られたから覚えてるよ。でも、どこから取ってくるのは分からないや……」

そう言って二人は顔を見合わせる。

「その『箱』はここには無かったの？」

「うーん、さっきいろいろ漁ったときそれらしいのは無かったなぁ」

少なくともここにはない、と。

それなら、外へ探しに行くしかないだろう。そうなると――。

「うん、クーがおそとに探しに行くよ！　だからシーザーとチーちゃんはにーちゃを守ってあげて」

そう言って、彼女は両手の拳を握った。暗い中きらりと光る目は決意に満ち溢れているのがよくわかる。

「でもクーちゃん、一人で大丈夫なの？」

「うん！　おくすり箱を覚えてるのはクーだけだし、めだまオバケが来たとき飛んで逃げられるチーちゃんと、一番つよいシーザーがにーちゃを守ってくれるならクーも安心だし！」

そう語るクーに、今はそれが最適だと納得するしかなかった。

あたしはシーザーと目を合わせると、ゆっくりと頷いた。
「はいっ、クオンさまのことはわたしたちにおまかせください！」
「……そうね、クオンはあたしたちで守るから『おくすり』を探すのはクーにまかせる。外は寒いし怪我するといけないから、アナタの分の毛皮はつけ直した方がいいと思うわ」
毛皮を外すと地肌がほぼ剥き出しになるからとても寒い。それに毛皮がなければ傷も負いやすくなるだろう。
「そっか！　じゃあ……これ……どうやるんだっけ」
「任せて、クオンに少し教わったから」

「みゃー、なんかちょっと違う気がする」
「そう？　見た目的にはあまり変わらないと思うけど……」
クーの毛皮をつけ直したものの、どことなく違和感があるらしい。
でも今はどうしようもないし、我慢してもらおう。
「気になるなら病気を直したクオンに見てもらいましょ」
「……そだね！」
彼女は力強くうなずくとその場でグッと伸びをし、外を見据えた。

「……じゃあ、開けますよ？」
シーザーが外へ続く透明な壁を横へずらすと、雨音が強くなり風が吹き込んでくる。クーは一歩外へ出ると、こちらを振り返る。
「それじゃあ、行ってくるね！」
「クーちゃん、『おくすり』のことよろしくお願いします……！」
「クオンは任せて。アナタも、気をつけるのよ」
「うん！」
彼女は力強く頷くと、外へと飛び出して行った。

「……とはいえ、大丈夫かしら。あの子、ずっとクオンの巣の中で育ってきたんでしょう？」
「あ……き、きっと大丈夫ですよ、クーちゃんなら。『きらきら』も持ってることですし……ひゃあ!?」
「……アナタはあまり大丈夫じゃなさそうね」
再び空が強く光り、シーザーがひっくり返る。……この子、体は大きいのに気は小さいのよね。
あたしは入り口を閉めると、シーザーの手を引いてクオンの傍まで戻る。今は少しで

も彼を暖めてあげないと。

第十五話　クーの冒険

けものわーるど　15話「クーの冒険」

「うー、ここにはないなー……」

みずが入らないように耳を伏せながら、あめの中へ戻る。

あたりの建物はどれも同じように見えて、どこに『おくすり』が置いてあるのか、さっぱりわからない。

だから、入れそうなところにはできるだけ入って確かめてみる。でも、見つからない。

「ここにもない……」

にーちゃが家に帰ってきた音をすぐに聞き分けられる自慢の耳も、にーちゃがごはんを用意してくれてるのが分かる鼻も、今はどっちも役に立たなかった。

それに、『おくすり』はあんまりニオイがしない。

「ここには――ひゃっ！」

入り口の開いてるところへ顔を覗かせた瞬間、かみなりの音が響いて思わずちぢこまる。シーザーほどかみなりは怖くないつもりだったけど、お外で聞くとやっぱりびっくりする。

「こわくない、こわくない……」
　あらためて入り口から中に入って、水と怖さを一緒に振り払うように全身を震わせてから辺りを見渡した。
　でもここにあるのはニンゲン用の毛皮の『ふく』ばっかりで、おくすりらしき箱は見えなかった。
「うー、ここにもないなぁ……」
「――なにがないんだ、お嬢さん？」
「ぴゃっ!?」
　後ろから聞こえてきた声に思わずその場で飛び上がってしまう。
　そのまま反転して声の方へ振り返ると、そこには大きな耳をピンと立ててこっちを見ているニンゲン……じゃなくて、ニオイからしてイヌの子がいた。
「おっと、驚かせちゃったか。ネコの連中はこの雨でみんな引きこもってる中で駆け回ってる姿を見かけて気になってな」
　入り口にもたれかかっていたイヌの子はそう言って笑みを浮かべると、中に入ってきて体を振るって水を飛ばした。
「……っと、失礼。いや、ホントに嫌な雨だなこりゃ」
「ええと、クーに何か用？」

そう聞くと、イヌの子は少し笑って首を横に振った。
「警戒させたみたいで悪かった。別に何もないさ、さっきも言った通り見かけて気になっただけだ。……っと、オレはジョン。ただの雑種犬さ、ただし父は血統書付きのシェパードらしいぜ」
そう言って、ジョンは顔を近付けて匂いを嗅いできた。
……怖い子じゃなさそう。
「それであー、クーは何を探してたんだ？　こんな土砂降りの中」
その質問にハッとして、ジョンの両肩を掴んだ。
「そうだ、ジョンは『おくすり』がどこにあるのかしらないかな!?　ずっと探してるのに見つからないの！　あめは、冷たいしかみなりは怖いしでもう参っちゃって……」
「ちょっ！　待て待て落ち着け、揺らすな！」
※
「なるほど、クーの飼い主がこの雨でブッ倒れたからクスリを探しに来たと。はぁー健気なもんだ……それに羨ましい話だ」
「羨ましい？」
そう聞くと、ジョンは遠い目をしながらため息をついた。
「いいや、この辺じゃよくあることさ。飼い主たちがオレを置いてどっか行っちまった。

こちとらずーっと待ってたのに帰ってこねーモンだからこうして家出しちまった訳よ」
「そうなんだ……でも、ニンゲンはみんないんせき？　が怖くて隠れただけで、それがなくなったからそのうち帰ってくるらしいよ」
「……そうなのか？　それじゃあ、後でちょっと行ってみるかね。ああそうだ、クスリ探してんだったな？　飼い主が散歩のついでに寄る場所に置いてあると思う、時々持って出て来てたからな」
「ホントに!?　助かったよ、もう全然わかんなくて……」
　ジョンに会えてほんとに良かった、ひとりじゃ絶対見つからなかったよ……。コレでにーちゃが元気になる！
「いいって事よ。そんじゃあ、そのクスリがありそうなとこまで連れてってやるよ。どうせ暇だしな」
「ありがとう、お願いね！」
「おう、任せとけ！」
　尻尾を振りながら歯を見せて笑うと、ジョンは意気揚々と雨の中へと踏み出して行った。その背を追って一緒に飛び出す。
　さっきまでは冷たくて嫌だった雨も、今だけは気にならなかった。

「ジョンのかいぬしさんはどんなニンゲンなの？」
　雨の中を歩きながら少しだけ気になった事を聞いてみると、ゆらゆらと揺れるジョンのシッポがまた少し強く揺れた。
「お？　うちの飼い主か、まあ普通の女の子だ。アイっつってな、オレがチビの頃から一緒なんだ。毎朝散歩してくれるのは嬉しいンだけど、すっトロくて鈍くさいしグイグイ引っ張ったらコケそうになるから気を遣ってしゃあないんだわ」
　そんなことを言いながら、ジョンのシッポはブンブンと揺れてる。
　声も弾んでいて、アイちゃんがとっても大好きなのが分かった。
「ジョンはアイちゃんが大好きなんだね！」
「まあな。アイの両親は全然家に居ねぇからよ、代わりにオレが護ってやらねぇと駄目なんだわ。……置いて行かれたけどな」
　ジョンの尻尾は揺れを止め、力なく垂れ下がった。
「いや違う、アイはオレと一緒に残ろうとした。けど、アイの両親はアイを強引に連れて行っちまったのさ」
「……」
　ぎゅっとジョンのこぶしが強く握られる。なんて声をかけてあげればいいのかなって迷ってると、ジョンは気まずそうな顔でこっちを振り返った。

「……そうだ、『いんせき』とやらがニンゲンたちが隠れた原因なんだっけか？　それってどんなものなんだ？」
「あ、うん。えーっとね、昨日にーちゃに教えてもらったから知ってるよ。クーやジョンがニンゲンになる前、お空がピカってひかったでしょ？　あれはおっきな石がお空から落ちてきてたんだって」
　そう答えると、ジョンは目を丸くした。
「でっかい石が降ってくる？　はー、それは確かに大変だな」
「だよね。そのいんせきが普通じゃなかったから今みたいになってるけど、ホントだったら落ちてきた石がぜんぶ壊しちゃうはずだったんだって、おうちもニンゲンや動物のいのちも、ぜんぶ」
「そりゃ、おっそろしい話だ。そうなってたら、オレもアイも……」
「うん、すっごくこわい。でね、ニンゲンはみんな地面の下にあるとっても頑丈なおうちに隠れたんだって。そのおうちはニンゲンが少しでも入れるようにニンゲンだけしか入れてもらえないって」
　だからシーザーもジョンも一緒に連れて行ってもらえなかったんだって思うと、ちょっと悲しくなる。
「……ああ、それでか。それなら、オレを置いてアイを連れてったアイツらは正解だな」

そんな事を考えていると、ジョンは納得したようにそう言った。
「え？」
「だって、そこへ逃げ込めばアイは助かるんだろ？　それだったら、それは正しいことだ。アイツらはアイを幸せにする義務があるし、オレもアイを護るのが仕事だからな」
そう言って、ジョンは誇らしげに笑って見せた。でも、にーちゃが同じようにクーを置いて出ていったら、悲しいとおもうな。
「……うーん、そうなのかな」
「ああ、そうだともさ。それによ、アイたちは帰ってくるんだろ？　だったらなんの問題もない……っと、ここがそうだな」
そう言ってジョンが指し示した先には、一つの建物があった。
「やった、ここに『おくすり』があるんだね！」
「多分な……っと！」
嬉しくてジョンに抱きつくと、驚きつつも抱き止めてくれた。
早くおくすりを見つけて、にーちゃに飲ませてあげないと！
「本当にありがとう！　じゃあ、探してくるね！」
「ああ、気を付け――っ！」
建物へ入ろうとしたとき、ジョンの顔が突然こわばる。

「どうしたの？」
「――早く入って扉を閉めるぞ。オレも入る」
慌てた様子のジョンに肩を押されて建物へ入る。どうしたんだろ。
真っ暗な建物の中へ入ると、ジョンはゆっくりと入り口を締めた。
「……風上の方、アレのニオイがしたんだよ」
「えーと、『アレ』って？」
「お前もここに来るまでに見たこと位あるんじゃないか？　デカい一つ目の変なバケモンだよ、アレのニオイがした。それに微かだが足音も聞こえて来る。クソ、多分こっち来てんな」
耳を澄ませてみると、あめの音に混じって微かにがしゃがしゃ変な音が聞こえてくるのがわかった。
それに、少しずつだけど嗅いだことのない、嫌なニオイが風に乗ってやってきたのも気づいた。
「……念の為、通り過ぎるまで息を潜めるぞ。アイツらはオレたちを狙ってくる、見つかったら厄介だ」
息をひそめて入口の陰に隠れていると、じわじわ音が近付いてくる。がしゃがしゃとうるさい音は建物のすぐ近くまで寄ってきた。

足音はそのまま入口の近く、壁を隔てたすぐ横まで来たかとおもったら、ピタっと音が止んだ。

しばらく無音が続いて、思わずジョンと顔を見合わせる。

「なんだ？　急に止まっ――」

様子を伺おうと、物陰からそっと覗き込もうとした、次の瞬間。

耳が壊れそうなほどの大きな音がして――気がつけば、体が空を飛んでいた。慌てて腰をひねって全部の足を伸ばす。

「ぐあっ！」「……よっ、と！」

色々なものが散らばった地面に、しっかりと着地する。

そうして、壁があった方へ目を向けると……そこには『くるま』があった。ほら、あの、『ビョウイン』へ行くときに乗せられるの。

でも、おうちの窓から走っているのを見かけるものとはぜんぜん違った。動くときに回る丸いやつの付け根が伸びて足になってる。ぴかぴかと夜に光る目はついてなくて、代わりに大きな目玉が一つだけあった。

しかもくるまのとは違う、嗅いだことのない嫌なニオイがする。

「クソッ、今までは物陰に隠れるだけでやり過ごせたのにっ……！　どうしてバレたんだ!?　しかも、出口が……！」

起き上がったジョンが目を見開く。車のオバケは入り口のすぐ横の壁を壊して入ってきた。奥の方には出口はないみたいだし、完全に追い詰められちゃった……？　ど、どうしよう！

チーちゃんが見かけたってヤツよりずっと大きいし、にーちゃが食べられかけたやつくらい大きいのかも。

「戦える大きさじゃねぇぞコレ、どうにかして逃げないと……」

すぐ横までやってきたジョンはガタガタ震えながら言う。そうは言っても、横をすり抜けるにはせまいし、今もオバケはジリジリと少しずつこっちに近づいて――足をぐっと屈めたのが見えた。

「■■■――！」

「――危ないっ！」「うおっ！」

とっさに体ごとジョンを突き飛ばして跳ぶ。すぐに後ろで色々な物が壊れる音がした。ジョンと一緒に地面から起き上がって振り返ると、車のオバケがさっきまでいた場所に突き刺さってる。

これでオバケが塞いでいた外への逃げ道ができた！

「突っ込んで来やがったか……！　わりぃ助かった、逃げるぞ！」

そう言ってジョンが掴んだ手を振りほどく。

「何やってんだ!?　早く逃げないと――」
「ジョンは先に逃げて！　クーは、おくすりを探すから、じゃなきゃにーちゃが元気にならないもん！」
「はぁ!?　こんな時に何を言っ……クソッ、しゃーねぇなぁ！　おいこらバケモノ、相手してやらァ！」
　ガシガシ頭をかいて、ジョンはオバケに向き直ってそう叫んだ。
「ジョン!?」
「コイツはオレが引きつける、クーは早くクスリを探せ……おい！　こっちだっつってんだろ！」
　でもオバケはジョンを完全に無視してこっちを見てる。ジリジリと距離を詰めて来るオバケから目が離せない……これじゃおくすりを探せないよ！
「こっちを、向けっ！」
「■■■■■――!!」
　ジョンが後ろから飛びかかってオバケの背中に乗ると、オバケは大きな叫び声を上げて暴れた。
「この……うあっ！」「ジョン！」
　前足をバネにして大きく跳ね上がる怪物に、ジョンの体が跳ね飛ばされる。外の濡れ

た地面に叩きつけられたジョンに駆け寄った。
「だいじょうぶ!?」
「……わり、全然引き付けられてねーわ」
「ご、ごめんなさい、クーのせいで……」
「いいって、オレがお前の立場でも同じ事したからな。それより、来てんぞ……クスリ探すならまずコイツをどうにかしなきゃな」
ジョンの体を起こして振り返ると、オバケは壁を壊しながら外へ這い出して来る所だった。そうだ、このオバケが近くに居たんじゃ、おくすりを探す余裕なんてない。どうしよう……!
這い出して来たオバケは相変わらずジョンを無視してこっちをじっと見てる。
何を考えてるのか全然わからない大きな目が、とても怖い。
「しゃあねぇ。イチかバチか、やってやろうじゃねーか」
「……二人だけで、できるかな?」
「わかんねぇ、だけどあいつはどうもお前にご執心だ。お前がヤツの気を引いて、後ろから俺が叩く……それでいいか?」
どうしてオバケがこっちを狙うのかはわからないけど、今はそれしか思いつかない。
「……うん!　あ、オバケは体の中に『石』みたいなのがあって、それを壊せばやっつけ

られるってにーちゃが言ってたよ！」
「なるほど、弱点があるんだな。わかった……っ来るぞ！」
「わっ、と！」
飛びかかって来たオバケをジャンプで避けて壁を蹴る。ジョンが避けた方向と逆に着地すると、オバケはやっぱりこっちを向いた。
「今だよ！」
「よし来た！　らあああああ！」
高く跳び上がって光る手を大きく振りかぶるジョン。
ジョンの攻撃が決まると思った瞬間、オバケが急に前足を跳ね上げて立ち上がった。ジョンは、急に距離が近づいた大きな背中に弾き飛ばされてしまう。
ジョンの体は小石みたいに弾き飛ばされて、すぐに地面に叩きつけられた音が聞こえる。
「ジョン……ひっ！」
ジョンに気を取られていると、オバケが振り下ろした前足が目の前に迫っているのが見えた――避けられる距離じゃない。
思わず縮こまって、ギュッと目をつぶった。
「■■■■■――!?」

でも、攻撃はなかなか来ない。恐る恐る目を開けると、オバケは前足を振り上げたまま固まってる。

よく見てみると、透明の壁がオバケの攻撃を止めていた。

「……全く、自動車を真似るなら変形の一つもするべきだろうに。浪漫と言うものをわかっていないエイリアンだ」

後ろからの声に振り返ったら、二人のヒトが立っていた。ニオイからすると一人はニンゲンのおねーさんで、一人はカラス、かな？

でも、チーちゃんや道中で見たカラスの子達とは見た目が違う。胸元に白いふわふわしたのが付いてるし、へんな帽子被ってるし。

「いや、擬態はしてるけどアレ別に機械生命体とかじゃないでしょ。それよりキン、さっさと仕留めるわよ。ほら、急急如律令（はやくして）！」

「全く、式神使いの荒い主様だ……っと！」

カラスの子はすごい勢いで飛び上がって、目にも止まらない速さでオバケの上まで移動した。チーちゃんより早い！

上を取られた事に気付いたオバケが前足を振り回すけど、カラスの子はそれをひょいと避けたり、手に持った棒で弾いたりと防ぐ。

「■■■！」

「さて、核は……そこか」
そうつぶやいたカラスの子は、前回りしながら急降下してオバケの背中を勢いよく蹴りつけた。
「■■■■■――!!」
背中から爆発したみたいに虹色のキラキラを撒き散らしたオバケは、背中に乗ったカラスの子を振り落とそうと大暴れする。
でも、カラスの子は全然振り落とされない。
「見つけた」
「■■■■■■――!!?」
キラキラが飛び散る中、カラスの子が背中から何かをもぎ取った途端に、オバケは大きな叫び声を上げて粉々に砕け散った。
キラキラがその場から消えると、カラスの子はおねーさんのところまでカツカツという変な足音を立てながら歩いていった。
「調伏完了だ、ご主人」
カラスの子はそう言って、何かをおねーさんへ差し出す。
「ご苦労さま。……さて」
それを受け取ったおねーさんはこっちへゆっくりと近づいて来る。

「災難でしたね、お怪我は……特になさそうで良かったです」
おねーさんはホッとした様子でそう言った。
……そうだ、もう少しでオバケの大きな手でぶたれる所だったんだ。あんな大きな手でぶたれたらきっと大怪我をしてた。
そう思うと急に怖くなる。
「ううぅ……もう駄目かと思ったけど、なんか透明な壁のおかげで助かったよ。あれ何だったんだろう?」
その場にへたりこんで居ると、おねーさんは手を差し伸べてくれた。その手をとって立ち上がったとき、まじまじと眺めてふと気がつく。
こんな雨の中でも濡れていない。じっと眺めてみると、まるで避けるように雨が動いていて、とても不思議だ。
見とれていると、おねーさんは説明をしてくれた。
「あれは結界と言います。まあ、普段ならばあのように物理的な干渉まで出来るものでは無いんですけどね」
「けっかい……ひょっとして、おねーさんが助けてくれたの?」
そう聞いてみると、おねーさんは笑顔で頷いた。
「ええ、そうですよ。それより――」「ありがとーっ!」

思わず飛びつくと、びっくりしながら受け止めてくれる。
身体を離すと、おねーさんの白い服に水のシミがぐっしょりとついていた。あれ？雨には濡れてなかったのに……。
「ご、ごめんなさい」
慌てて謝ると、おねーさんは苦笑いして首を振った。
「いえ、構いません。……それより、聞きたいことがあります」
こほん、と一つ咳をすると、おねーさんは真面目な顔になる。
「申し遅れました、私は宮内庁の者です。急な話で申し訳ありませんが、こういう『石』をお持ちではないですか？」
そう言って、キラキラした大きな石を取り出した。
それは、おくすりを探しに出る前、シーザーから渡されたおまもりにそっくりだった。

第十六話　ヤタガラスの使者

おねーさんが見せてきた石は、出発するときにシーザーが持たせてくれたおまもりにそっくりだった。
「石の反応を追ってきた場所であの怪物に襲われていたあなた方のどちらかはこれと同じものを持っていると思うのですが」
「えーと、ひょっとしてこれ、かなあ?」
首からかけてた小さな袋を毛皮の隙間から取り出して、中身を見せるとおねーさんはぱあっと顔を明るくなった。
「そう、それです!　私達は先程あなた方を襲っていた怪物を排除するためその石を集めているのです、それで……」
この石でどうやってあのオバケを退治するんだろう、そう思っていると、カラスの子に支えられてジョンがこっちにやってきた。
「いてて……悪い、助かった」
「構わない、物の怪を調伏するのもまた我々の役目だからな」
ジョンは怪我してるみたいで、片足を引きずってる。石のことは一旦置いておいて、

ジョンに駆け寄る。
「ジョン！　大丈夫だった!?」
「ああ、ちょっとばかり足を挫いちまったが大体無事だ……そっちもどうやら平気みたいだな」
「怪我したの!?　ちょっと見せて、えっとね……」
慌てて確認するとジョンの足首が赤く腫れ上がっていた。
怪我した足におまもりを近づけると、きらきらした物がおまもりから溢れ出してジョンの足首に吸い込まれていった。すると見る見るうちに腫れは引いて、あっという間に治ってしまった。
シーザーの言ってた通りだ、すごい。
「うぇっ!?　なんだこれ、痛みが引いた……？」
「これはね、お守りなんだって。怪我を治せるの！　凄いでしょ！」
そう言って胸を張ると、ジョンはしげしげと石を眺めたあと、おねーさんの方に向き直った。
「へぇ、便利なもんがあるんだな……ところで、そっちの人間のねーちゃんは誰なんだ？　このカラスの飼い主か？」
「あ、そうだ。このおねーさんはえーと、くない……？」

くない、なんだっけ。そう思って顔を見上げると、おねーさんはまだ苦笑いを浮かべた。
「宮内庁という所で働いている賀茂　涼子と申します。そちらの式神――カラスはキン。私達は訳あってこういう石を集めているのですが、あなたは持っていませんか？」
目の前に出されたそれの匂いを嗅いだジョンは、首を横に振る。
「ほーん……いや、オレは持ってねぇな。あー、そこのカラスがちっこいの拾ってたのならさっき見たが」
「ほう、見ていたか。いかにも、あの怪物共が落とす石こそ我々が集めている物だ……尤も、適切に処理しなければたった数時間で跡形もなく空気に溶け消えてしまうのが困り物だが」
カラスの子はため息をつくと、こっちに手を差し出してきた。
「という訳でだ、その石を渡して貰えないか？　その石からは稲荷神の力を感じる。君があの御方が仰っていた運び手だろう？」
そう言って伸びてくる手から、とっさに石を抱き込んで守る。
「えっ、だ、だめだよ。これはにーちゃのだもん！」
「む？　どういう事だ？」
「これはにーちゃの持ち物なのっ、持ってたらケガが治るからってシーザーがおまもり

に持たせてくれてるだけなの」
　そう言うと、ふたりは困ったように顔を見合わせて、おねーさんが一歩進み出て膝をかがめて目線を合わせてくる。
「うーん、そのお兄さん？　は人間の男性ですよね？」
「え、そうだけど……なんで？」
「私達はとある神様――お稲荷さまから人間の男性にその石を預けたと伺っているんです。私達〝八咫烏〟へ受け渡すように頼んだと」
「そしてその石からは確かに稲荷神の力を感じる。それは君の兄が我々に届けるため所持していた物だとこちらは思っている」
　二人の言葉にどうしようと迷っていると、二人との間にジョンが割り込むように立った。
「まあまあ、それならコイツの飼い主に直接聞けばいいだろう？　それでその飼い主はちょっと雨で体調崩してるらしくてさ、クスリ探しに来てんだけど、どれが必要か教えてやってくれねえか」
　……そうだ、お薬を探しに来てたんだった！　すっかり忘れてた。
　ヒトのおねーさんならにーちゃに必要な薬も分かるだろうし、一緒に探してもらえばいいんだ！

「雨……ふむ、石を運ばせておいてそれを助けないというのは忍びない。ここは助けるのが筋だと思うが、どうかなご主人」
　キンちゃんが聞くとおねーさんは少し考えてから頷いた。
「そう、ですね。この事態とはいえ、わざわざ危険を冒してまで石を運んでくれた方に礼の一つもしないまま受け取って去るのは良くないですね。兄弟子達には少し待ってて貰うことにしましょう」
　やった！　これでにーちゃを治すおくすりが探せる！
「それで、そのお兄さんの症状を教えていただけますか？」
「えっとね……」
　雨に濡れたこと、体が冷たくなっていたこと、激しく震えていたからみんなで服を脱がして毛皮で包んで温めたことを伝える。
「聞いた限りでは軽度の低体温症でしょう。クーさんたちの対処も的確で問題ありません、安静にしていれば元気になるはずですよ。となると、必要なのはまず乾いた着替えと雨具、温かい食事といったところでしょうか？」
　おねーさんの言葉で、肩の力が抜ける。
　よかったぁ、にーちゃは大丈夫みたい。やっぱり寒いときはあっためるのが正解だよね。

「この気温の中濡れた服を脱がずに過ごすとはなんとも浅はかな。大方周りが女だらけで気後れしたのだろうが、中身は獣なのだから気にする事もなかろうに……」

呆れたようなキンちゃんに、おねーさんは苦笑いする。

「まあ、こうもかわいい女の子に囲まれてちゃ緊張もするでしょ。幸いにもここは商店街だし必要なものはすぐに揃うわ、手早く集めちゃいましょう。……さて、クーさんはそのお兄さんが着ていたものと同じくらいの大きさの服と、下着も忘れずに探して下さいね。ジョンさんは雨具をお願いします。『傘』は分かりますか?」

おねーさんがそう聞くと、ジョンは頷いた。

「雨の日にニンゲンが持ってるやつだろ? それならわかるぞ」

「ではお願いします。私達は温かい食事を作るためのものを集めてきますので、各自確保できたらここに集まりましょう」

「わかった!」「ちゃっちゃと探してくるか」

さっきの服があった場所に急ごう、はやくにーちゃを元気にしてあげなきゃ!

「……はい、とりあえずこれでひと揃えありますね。サイズが合うかは分かりませんが、とりあえず凌ぐ事はできるでしょう」

「よかったぁ!」

持ってきた服をおねーさんに見てもらったけど、問題はなさそうでよかった。
何本か傘を抱えたジョンは自分でも頭の上に傘を広げていて、かなり弱くなった雨粒が跳ねる小さな音を立てている。
そういえば、かみなりももう鳴ってないね。
「必要なものは揃ったな、とっとと向かおう。場所はどこだ？」
キンちゃんが袋を抱えながらそう言うと……。
あれ、そういえばどっちから来たんだっけ……？
「ど、どうしよう、どっちから来たかわかんなくなっちゃった！」
「ええっ!?」
おねーさんはあんぐりと口を開けて、キンちゃんは手のひらで目を覆う。だって、だって、必死に走ってきたから……。
どうしようどうしようとあわてていると、ジョンが苦笑いを浮かべながら近づいてきた。
「たしか、クーの仲間の中に犬のやつがいるって言ってたよな？　この姿になる前、どんな大きさの犬だった？」
「え？　えーと、すごく大きかったよ」
「大型な。ちょっと、これ持っててくれ」

差し出された傘を受け取ると、ジョンは深く息を吸う。そして暗い空へ向けて力強い遠吠えを上げた。長い声が響き渡ると、しばらくして遠くからいくつかの遠吠えが返ってくる。

ジョンはその声に耳を傾けて、しばらくすると頷いた。

「……よし、多分あっちの方だ」

「えっ、今のでわかるの!?　すっごい！」

びっくりしてそう言うと、ジョンはほっぺたを掻きながら顔をそらした。……あれ？

「まあ、確実かって言われるとちょっと自信ないけどな」

「えー」

「そんなハッキリと意思疎通できるわけじゃないからなぁ。まあ、なんの宛もなく駆け回るよりはマシだろ」

たしかにそうだけど……うー、大丈夫かなぁ。少し不安に思っていると、キンちゃんがこほんと咳払いする。

「まあ、空から探せば見覚えのある場所くらい見つかるかもしれん。ご主人とキミの二人くらいなら同時に運べるが……」

「オレはここでお別れだな。ついていってやりたいのは山々だが、オレには家で家族を待つという仕事がある。家主の留守に家を守るのも番犬の役目だからな」

そう言って、ジョンは笑顔を浮かべた。
……寂しいけど、仕方ないよね。短い間だったけど、ジョンにはこれまでたくさん助けてもらっちゃったもん。
ジョンに向けてこっちも精一杯の笑顔を返した。
「……わかった。ここまでたくさんありがとうね、おくすりの場所も、オバケから守ってくれたのも、傘を探してくれたのも！」
「困ったときはお互い様さ。オレも隕石とやらの事を知らなきゃ、アイたちを疑ったまま不安な日々を過ごすハメになってたからな。こっちこそ、ありがとうだ」
ジョンが笑顔で差し出してきた手を、ぎゅっと握る。
「落ち着いたら、また会おうね！」
「ああ。その時はアイを紹介してやるから、お前も飼い主さんたちを紹介してくれよ、きっと仲良くなれるさ」
「うん！　じゃあ、またね！」
おねーさんたちの側に駆け寄ると、後ろを振り返ってジョンへ大きく手を振る。ジョンも笑って振り返してくれた。
「もういいんですか？」
「うん！　にーちゃたちも待ってるから！」

「わかった。それじゃあ、私の背中に掴まってくれ」
服を入れた袋と傘をしっかりと背中にくくりつけて、キンちゃんにしっかりとしがみつく。それを確認したキンちゃんはおねーさんを抱えると、頭の翼を羽ばたかせてゆっくりと上昇し始めた。
「あまり速度を出すつもりはないが、落ちないようにな」
「うん！　……あれ？」
変なことに気づいた。まだ少しだけ雨が降っているのに、全然体に当たらない。それに、風も全然ないみたい。
ちーちゃんの背中につかまって飛んだときはすごく冷たい風が吹いていたのになんでだろう。
「……あ、雨風が避けていくことが不思議なんですね？」
首を傾げていると、おねーさんがキンちゃんの肩越しに覗き込んできた。その表情はなんだか得意そう。
「雨風を避ける術を使っていますので、こうして空を飛んでいても濡れないし寒くもないんですよ」
だからおねーさんは雨の中でも濡れてなかったんだ。こんな高さを雨の中移動してたらすごく寒そうだし、すごくいいな！

「これ無しでこんな移動をすれば、人間など凍えてしまうからな。なかなか使えるだろう？　流星の力抜きでは五分と持たないが」
「……キン～、余計なことは言わないの。むしろ、五分でも使えるだけ褒めてほしいくらいだわ」
　おねーさんは拗ねたようにそう言う。
「ほんの数百年前まではこの程度の術を使えた程度で威張れるものではなかったんだがなぁ。やれやれ、陰陽師も落ちたものだな」
「まだ妖怪がその辺を歩いてたような時代と比較しないでよ……あ。ご、ごめんなさいね、目の前でごちゃごちゃと……」
　そう言って謝るおねーさん。でも、なんだか二人とも楽しそう。
「二人ともとっても仲良しなんだね！」
「ふっ、ご主人がまだオムツをしていた頃から知っているからな、気持ち的には親戚の子のようなものだ。あの頃は――」
「やめやめ！　初対面の子にまで私のおもしろエピソードとか語らなくていいから！」
　顔を真っ赤にしてそう言うおねーさんに、キンちゃんが笑う。
「いや、クー殿を退屈させてはいけないと思ってな。……おっと、下はちゃんと見ているか？　飛び始めてしばらく経つが」

あっ、そうだった、にーちゃたちの待ってる場所を探さなきゃ！

「えーと、えーと……あっ！　あの橋の下に見えるやつだよ！」

周りを見渡すと、少し先に探していた場所がちょうど見えた。

すごい、ジョンはちゃんと合ってたんだ！

「わかりました、高速道路の高架下に見えるあのコンビニですね。キン、あそこへ降下して」

「あいよ、ご主人」

キンちゃんがゆっくりと下へ降りていく。まっててねにーちゃ、もうすぐあったかいもの持っていくからね！

第十七話　目覚め

「クーちゃん、大丈夫かなぁ」
「……流石に、少し心配になってきたわね」
かすかに震えるクオンの体を抱き寄せながらシーザーの言葉に同調する。クーが薬を探しに出てからもう随分と時間が経つ。
あれほど強かった雨の音もすっかり弱くなって、雷も遠のいた。
「もしかして、迷子になってるんじゃあ……」
心配そうに眉を寄せるシーザーに、私も同じ不安を感じている。あの子は生まれてからずっとクオンの巣の中で暮らしてきたって話だし、外の歩き方もろくに知らないはず。
不安要素は迷子だけじゃない。あの怪物だって危険みたいだし、他の子の縄張りに踏み込んで、喧嘩になったりしても大変だ。
……どうしよう、役割分担間違えたかしら。でも、薬がどういうものか知ってるのはあの子だけだし、クオンを抱えて飛んで逃げられる私が残らないといざというとき、危ないし……。

そんな不安が頭をぐるぐる回っていたとき、微かな犬の遠吠えが外から聴こえてきた。

入り口近くのダンボールに寝そべって外を眺めていたシーザーがそれに反応して大きな耳をひくつかせる。

「あえっ？　この声は……ちょっと失礼しますね」

「どうしたの？　わっ……」

むくりと体を起こした彼女がそっと扉を開けて外へ出ると、体を震わせながら力強く遠吠えを返した。何度か声が反響するのを聞きながら、シーザーが中へ戻ってくる。

「何だったの？」

「うーん、お互いの居場所を知らせ合う感じの声ですね。ひょっとしたらクーちゃんがどこかの犬を頼ったのかも……」

「結構たくさんの声が聞こえてたけど、わかるの？」

お互いに位置を知らせると言っても、あちこちから返事が帰ってきてもわかるものなのかしら？

「えっと、知り合いの声ならなんとなく伝わるとは思うんですが、ここらの犬に知り合いは居ないので……」

「……クーがちゃんと道を覚えてる事を期待しましょ。というか、今ので怪物が寄って

きたりしないかしら？」
「あっ」
……備えはしておいたほうがよさそうね。眠るクオンをぎゅっと抱きしめると、触れる肌からやや温もりを取り戻し始めているのを感じて少し安心した。
「……あっ！　チビ助さん、上から何かが近づいてきます！」
遠吠えからしばらく経ってから、シーザーは再び体を起こした。
「翼の音が――それと、このニオイはクーちゃんだ！」
入り口から空を見上げていた彼女は歓喜の声を上げる。
外に出て両手を大きく降る彼女の前に重なった人影が降り立つと、そのうち一つがシーザーに飛びついた。
尻尾をピンと立てたその白いシルエットは間違いなくクーだ。無事に帰って来てくれてよかった……。
それにしても、一緒に居る二人は誰かしら？　一人はあたしと同じカラスみたいだけど……。そう思っていると、クーに急かされるようにして一行が中へ入ってきた。
「おかえり、雨の中大変だったでしょ。薬は見つかったかしら……それにそっちの二人は？」

「ただいま！　おくすりも拾えたし、それに助けてくれるヒトたちもついて来てくれたよ！」

そう言って前に出てきた二人を近くで見て見ると、どうやら人間とカラスみたいね。

……それにしても、どっちも不思議な姿をしている。人間の方は入ってくるなり目を見開くと、慌てた様子で目を逸して頭を下げた。

カラスの方はそれを見て笑っている。一体なんなのかしら。

「え、ええ、クーさんに助けを請われてここへ来ました。私は賀茂　涼子と申します、こちらの鳥はキン……」

「くく、ご主人はこの年でおぼこでな。どうやら若い男の裸に緊張しているらしい、挙動不審なのは許してやってくれ」

くつくつと笑いながらそう言うカラス――キンに、リョウコとやらは顔を赤くして拳を握りしめる。……頼れるのかしらこの二人。

「この……！　ん、こほんっ、早速ですがそちらの男性を軽く診させていただきますね。失礼します……」

彼女は一つ咳払いをするとなにか棒状の物を取り出して、あたしとシーザーの毛皮の一部をどけてクオンの脇に挟んだ。

その様子をシーザーとクーが不安そうに見守っている。

「どう、ですか？」
「見たところ、容態は安定しているようですね……本当はちゃんと病院で診て貰うべきなんでしょうが、この状況ですから」
「ビ、ビョウイン……」
　彼女の言葉に、何故かクーとシーザーが震え上がる。どうしたのかしら？　しばらく待って脇に挟んだ棒を引き抜いて確認すると、リョウコは表情を緩めた。
「やや低めの体温ですが、正常の範囲です。重篤化する前に気づいたのと的確な対処が効いたのでしょう。じきに目を覚ます筈です」
「やったっ！」「無事で良かったです……！」
　手を取り合って喜ぶクーたちに、肩の力が抜ける思いだった。
「さて、そうとなればとっとと持ってきた服を彼に着せてやろう。君らもその格好じゃ寒かろう？」
「そうね、流石に冷えたわ……」
「はい、私もちょっとさむいです……」
　クオンを温めている内にあたしの体もすっかり冷えてしまった、早く彼に新しい毛皮、服を着せてしまおう。
　そう思ってキンが持ってきたものを確認する……これは一番最初に足から通すやつ

だったかしら……？　ええと確か……。
「ああご主人、食事の支度は頼んでいいか？　私は彼らの着替えを手伝おうと思う、どうにも手間取りそうなのでな」
「わかったわ、終わったら手伝ってね？」
あたしたちが迷っているのを見てキンが手を貸してくれた。
「……正直、助かるわ。これちょっとわかりにくいもの」
「うぅー、外す時は慌ててたからやり方を覚えてなくて……」
「おいおい慣れるさ。まずこれだが、この丸いボタンのついている方が前だ。中身を取り出す用でな……」
そんな風にキンの指示通りにクオンと、ついでにあたしたちのも綺麗に着せてもらった。

※※※

――鼻孔をくすぐる良い匂いに、意識が覚醒していくのを感じた。
寝る前に感じていた湿った衣服の嫌な感触も消えていて、暖かな感触に包まれている。すっかり乾いたのだろうか？
まだ体が重く、強い倦怠感に包まれているが状況が状況だ、起きなければ。そう思っ

て身体をよじると。

「……ん、起きたの？」

真後ろから、そんな眠たげな声が聞こえてきた。

「……うん？」

何事かと思ってキョロキョロすると、いつの間にか毛布で体が包まれていることに気づく。というか体勢もおかしい、なにかにもたれかかっているような……そう思って体を起こそうとすると。

「本当に目が覚めたみたいね、良かった……」

「あれ!?」

どうやら、僕はチビ助に抱かれる格好で眠っていたらしい。

少し混乱した頭で絶句していると、チビ助が僕の体を抱きしめたまま眠たそうな声で説明してくれた。

「アナタ、テータイオンショーとかで寝込んでたのよ」

「てーた――低体温症？」

低体温症って体が冷えすぎるとなるんだっけ、無事な替えの服もなかったしそのうち乾くだろうと思ってたけど迂闊だった……ん？

「なんか違和感が……」

「あっ、にーちゃが起きてる！」「え、本当ですか!?」
違和感の正体を探る前に、床のものを蹴飛ばす音を響かせながらやってくるクーとシーザーの声に思考が遮られた。
「ちゃんと目がさめてよかったぁ。にーちゃ、もう平気……？」
「よかった、ほんとによかったです……！」
がばっと抱きついてきた二人に、思わず目を白黒させる。
どうやらとても心配をかけてしまったらしい、反省しないと……。
「……ごめん、なんか心配掛けたみたいだ」
「体はとってもひやっこいし、どれだけ呼んでも起きてくれなくてすごくこわかったんだよ」
「私のわがままのせいで、くおんさまがどうにかなってしまったらと思うと、本当に……！」
ピスピスと鼻を鳴らしながら胸元に顔擦り付けてくる二人に少し気恥ずかしく思いながらも、させるがままにする。そうしていると、耳元でチビ助が囁いた。少しくすぐったい。
「クーがね、薬を探しに行ってくれたのよ」
「薬を？」

「ええ、あの子はアナタが薬を飲む姿を見て形を知ってるからって。結果的には薬は必要なかったみたいだけど、代わりに――」

そう言って彼女が指さした方向には、こちらを見て赤面している――唐衣（からぎぬ）に額当（ぬかあて）という神事の最中にでも抜け出してきたような格好をした――女性が立っていた。

「え、えっと……？」

予想外の事態に戸惑っていると、女性はハッとした様子で咳払いをして僕の目の前に両膝をついて座った。

「気が付かれたようですね、体のお加減はいかがでしょうか？」

「え？　はい、ええと、少しだるいですが大丈夫です」

「そうですか、安心しました。……とても良い縁に恵まれたようですね、皆さんとても心配していましたよ？」

そう言って彼女は僕にくっついてる三人へ柔らかな視線を送る。

「自己紹介が遅れました。私は加茂　涼子、宮内庁の者です」

くないちょう……宮内庁!?　宮内庁ってあの宮内庁？

なんで？　という疑問が脳内を埋め尽くしているが、とりあえずは一旦それを胸の中にしまい込む。

「あの、ええと、星野　久遠です。ええと……」

ヤバい、なんか口が回らない。冷や汗を流していると、加茂さんが口元に手を当ててくすりと笑う。

「ふふ、別に緊張しなくて大丈夫ですよ、ただの公務員ですから。……そちらのクーさんに助けを求められてこちらへ来ました」

「え、クーが？　あ、看病していただいたんですね、すみません」

「いいえ、私はほとんど何もしてません。それよりも――」

加茂さんは改めて三人へ視線を向けた。

「星野さんの冷えた身体をずっと温めていたチビ助さん。怪物が来ないかずっと気を張っていたシーザーさん。そして雨の中を駆けて助けを求めに来たクーさんをしっかりと労ってあげてくださいね」

「……はい」

視線を落とすと、いつの間にかクーとシーザーが膝の上で寝息を立てていた。彼女が言うように、皆僕の為にずっと気を張ってくれていて疲れたんだろう。

「……さて、私達はクーさんに呼ばれて来たのもありますが、実はもともと貴方に用がありました」

膝の二人を眺めていると、加茂さんがそう言った。

「ええと、僕に用ですか？　一体何の……」

そこまで言って、一つピンときた。神職の女性が僕に用事とくれば、アレしかないだろう。
「もしかして、〝ヤタガラス〟とは……」
「はい、お察しの通り私たちの事です。お稲荷様より、流星の結晶を預けた若者が居ると伺っております」
そう言って頷いた加茂さんに、やっぱりかとひとりごちる。
どこで誰に渡せばいいかと迷っていたけど、まさか相手側からこんな形で接触してくるとは思わなかった。
「ええと、それなら確か……あれ？」
巾着袋に入れて首から提げていた筈の例の結晶を探すが、どういう訳か見当たらない。
「ああ、結晶はクーさんが持っています。怪我を治すお守りとして借りていたそうなので――ほら、そこに」
「あー、ホントだ。ちょっと待ってください……よし」
クーの首元から放り出された巾着から結晶をそっと取り出すと、加茂さんへそれを差し出した。
「ありがとうございます。それではこれを……」

加茂さんはそれを大事そうに受け取ると、懐から一回り大きな結晶を取り出して二つを重ねる。

すると、二つの結晶は淡い光を放ちながらまるで溶け合うように融合し、一つの大きな結晶となった。

「……ん？」

カタリ、という硬質な音を立てて、結晶を構成する立方体の一つが床へ転がり落ちる。かすかな光を放つその結晶の中心には紅い鳥居のようなものが見える。

それをしばし見つめていると、やがて加茂さんが口を開く。

「……どうやらお稲荷さまが貴方へ、と仰っているようですね」

「え、でもいいんですか？」

「ええ、一粒くらいなら支障はありませんから。それに、他ならぬお稲荷さまのご意向です、どうぞお受け取り下さい」

……ひょっとしたら、この結晶を通してずっと見守ってくれていたのかもしれない。そんな事を思いながら、僕はその一粒をそっと拾い上げて再び巾着へ戻す。

「さて。お三方の寝しなで悪いのですが、温かいおかゆを作りましたので冷めないうちに――」

「……ごはん？」

その言葉を遮るように、寝ていた筈のクーががばっと顔を上げた。そういえば、ぐっすり寝ているように見えても好物のおやつの袋を開ければすぐさま起き出してくるような子だったな。

加茂さんと目が合い、互いに苦笑する。クーがシーザーとチビ助を起こしたのを確認して、揃って起き出した。

※

商品棚を挟んだ反対側へ行くと、今度は山伏の格好をした女性がカセットコンロに掛けられた土鍋の前に座っていた。

「ふむ、顔色も先程より良さそうだな。ああ、粥を炊いたので冷めないうちに食べるといい」

「炊いたの私なんだけど……コホン。紹介します、こちらはキン。私の、えー、同僚？のようなものです」

「あ、どうも、星野　久遠です」

黒い鈴懸（すずかけ）に脚絆（きゃはん）と黒ずくめの中で胸元で揺れる白い梵天が映える。

よく見れば、被った頭襟を挟んだ左右の髪はここ数日で見慣れた翼のような形をしている。……多分、カラスかな？

唐衣と山伏、ヤタガラス、宮内庁。えーと、もしかして――。

いや、やめておこう。探らなくていい藪をつつくもんじゃないし。

「キンちゃんがね、空を飛んでここまで連れてきてくれたんだよ！　おねーさんのジュツ？　のおかげで雨も風もみーんな避けて飛べて寒くないの！　あ、他にもケッカイ？　とかであの目玉のオバケから守ってくれたんだ！」

とか思ってたらクーがそんな事を言い出した。……うん、見えてる地雷にツッコんだりはしない。お前は知り過ぎたとか言ってカラスの山伏（エージェント）からおもむろに取り出した機械でピカッとされても困るし。

「……えーと、お忙しそうなのに食事まですみません。クーの事も危ないところを助けていただいたようで」

「なに、気にすることはないさ。結晶集めにずっと飛び回っていてこちらも少し羽根を休めたかったところでな……っと、ほれ」

そう言って白いおかゆを紙ボウルによそってくれる。

「ありがとうございます」

「熱いから火傷に注意したまえ、特に猫舌のクー殿」

「フーフーするからだいじょーぶ、ありがとね！」

それぞれに湯気の立つ器が行き渡ったのを見て、プラスチックの匙でおかゆを掬っ

た。
「いただきます」
　少し息で冷ました匙を口に入れると、優しい塩味が口いっぱいに広がった。まる一日ぶりの温かい食事は、それだけで気力が回復していくような心地のよさだった。
「あっちゅい！」
「クー、気をつけるように言われてたでしょ。ほら、お水」
「あったかいごはんってほんと良いですよねぇ……」

※

　土鍋の中身が空っぽになる頃には冷えた体も少し温まっていた。
　……やっぱり疲れが溜まっているのだろう、クーたちは空の器を手にゆらゆらと船を漕いでいる。
　気分もほぐれてきたところで微かな金属音がコンビニ内へ響く。
「さて、それでは我々はそろそろ行かねばな」
　見るとキンさんが錫杖を持ち、静かに立ち上がっていた。
「そうですね。疲れも取れたことですし、あまり悠長にしている時間もありませんから」
　手早く身支度を整えた加茂さんを見て、僕も立ち上がる。

「お急ぎの所助けていただいて、本当にありがとうございました」
「いえ、お陰様でこちらの目的の物も得られましたし、いい具合に休息も取れましたのでお気になさらないでください」
　こちらのお辞儀に対し、加茂さんは柔和に笑みを浮かべる。
「それよりも、星野さんたちはまだしばらく休んでから出発した方が良いでしょう。皆さんお疲れのようですし、あなたもまだ本調子ではないはずです」
　……急ぎたい気持ちはあるが、たしかにそうだった。みんな疲れ果てているし、僕自身まだ体が重い。
「それと怪物のことは心配しなくていい、簡易的なものだが結界を張ってある。騒がなければそう見つかりはしないし、仮に何かが侵入を試みてもすぐに気付けるようにした。安心して眠るといい」
　キンさんが悪戯っぽい笑みを浮かべながらそんなことを言い出したので、思わず周りを見渡してしまった。
「ふふ、どうも気を遣って知らんぷりをしてくれて居るようだが、この装束を見ての通り別に隠してる訳でもないのだよ」
　そう言っておかしそうに笑うキンさんと、苦笑する加茂さん。
「なに、これから神話が再来するのだ。ヒヨッコ陰陽師や妖怪烏の式神が堂々と出歩い

ていても問題はあるまい」

気になることを言いながら、彼女はコンビニのドアを開く。

「……え、それってどういう？」

「それはあとのお楽しみだ、運が良ければ拝めるだろうさ」

そう言ってパチリとウインクするキンさん。

「微力ながら旅の無事を祈らせていただきます。星野さんたちもどうかお気をつけて」

そう言ってお辞儀をした加茂さんを横抱きに抱えあげて、二人は飛び立ってしまった。意味深なキーワードだけを残して。

……神様が実在した時点で今更だけど、陰陽師や妖怪を実際目にする日がくるとは、なんか感慨深いものがあるなあ。

僕はコンビニのガラス戸を閉めて中へ戻ると、いつの間にか寄り添って眠っている三人へ毛布を掛けてやった。とりあえず結界とやらを信じて、もう少し眠ることにしよう。

番外編

ハロウィン特別編　けものとヒトのハロウィン祭り　1

「はろうぃん？」
そう言って、クーはカレーを頬張りながら首を傾げる。
「それって先月辺りからやってるヤツでしょ？」
アルバイトや買い出しなどでそれなりに町中を出歩くチビ助が少し得意げな表情で言うと、その少しズレた解釈に久遠が苦笑する。
肌寒さが本格的になり始めた十月末のとある日、星野家の食卓ではそんな会話が行われていた。
「……ああうん、商業的には一月前からハロウィンムード出し始めてるけど、実際には31日がハロウィンの日なんだよ」
久遠がそう答えると、チビ助は分かったような分かっていないような曖昧な表情で頷く。
「ふーん。……それでそのハロウィンって何の日なの？　カボチャが関係あるのは分かるけど」

「クーはカボチャ好きだよ！　ミスミのおばあちゃんの作ったカボチャのやつ、甘くておいしかったし」

カボチャと聞き、クーは三隅夫人が時折差し入れてくれる南京の煮付け――得意料理らしい――を思い出して目を輝かせる。

「カボチャも関係あるっちゃあるけど。ハロウィンは海外のお盆……あー、まあお祭りみたいなものかな。簡単に言うと、オバケの格好をして練り歩いてお菓子をもらうイベント」

「おかしがもらえるの!?　クーもやるーっ！」

二人のためになるべく噛み砕いて久遠が説明すると、一部分に反応してクーがテーブルに身を乗り出す。

「どうどう……それで近所の商店街でもちょっとしたイベントがあってな。仮装して行くとお菓子が貰えたりするんだけど、それを聞いてシーザーが張り切って衣装を作ってくれたらしいんだ」

「ああ、そういえばあの子裁縫が趣味だったわね。少し前にあたしたちのサイズ測ってたのはそれかしら……」

シーザーは三隅夫人から裁縫を習っており、趣味で自作したものをよくプレゼントしてくれるのを思い出してチビ助が納得する。

「と、言うわけで３１日はみんなでお出かけな」
「いいわね、楽しそうじゃない……それにしても」
そう言って微笑むと、チビ助は横に座る――鼻歌交じりにカレーを頬張っている――クーをちらりと見て苦笑を浮かべた。
「おっかしー♪　おっかしー♪」
「クーは仮装よりお菓子が楽しみみたいね……」
「……うん、まあ、クーらしいな」

※

そしてハロウィン当日昼過ぎ、三人は三隅家の前に立っていた。
久遠がチャイムを鳴らすと、インターホンからは「はあい」とシーザーの少し弾んだ声が聞こえてくる。
「星野です、二人連れて来ました」「きたよー！」
『はーい、くおんさまにクーちゃんとチビ助さん、今開けますね！』
しばらくすると玄関の鍵が開く音が聞こえ、ガチャリとドアが開いて中から出てきたのは。
「うー、がおーっ！」

両手を顔の前に上げてガオーのポーズをしながら、いたずらっぽく笑うシーザー。その両肩には可愛らしい犬の顔の形をしたお手製のぬいぐるみが張り付いていた。
「ふふ、どうです？　ケルベロスにしてみました」
「……あー、うん。首から下がいつもの普段着なのが若干残念だけど、かわいいと思うよ」
その場で彼女がくるりと回ってみせると、どうやらリュックのように背負った二匹寄り添った犬のぬいぐるみ――普通に体があり、両肩から顔を出す形で固定されている――の他はフレンズ化したときから着ている普段着らしい。
「あはは、ケルベロスの三つ首以外の要素が思いつかなくて……わたし自身犬なのであとはそのままでいいかなあと」
「わんちゃんのリュックかわいいー！」
「へぇ、単体でもぬいぐるみとしてかわいいんじゃない？」
それぞれの賛辞に耳をピンと立て、ブンブン尻尾を振って答えると、彼女は嬉しそうにはにかんだ。
「ありがとうございますっ、それじゃ外は冷えますし中へどうぞ！」
「おじゃましまーす！」
クーの元気な声に続き、二人も一緒に中へと進む。

靴を脱いで玄関へ上がり、途中でシーザーと別れて居間へ行くとソファに座った三隅氏が彼らに気づいて破顔した。
「おお、久遠くんにお二人さん、いらっしゃい」
「お邪魔してます」「おじーちゃん、こんにちはー！」
片手を上げて気さくに挨拶する三隅氏にそれぞれが挨拶すると、向かい合うソファへ座るように促される。
「いやぁ、シーザーに付き合わせてすまないね。妻に教えられて以来すっかり裁縫に夢中でなあ、着てやってくれると嬉しい」
「いえ、こちらこそ誘っていただいて……ところで、三隅さん夫妻は参加されないので？」
シーザーの張り切りっぷりなら夫妻の分まで縫い上げてしまっていそうなものだが、三隅氏は普段通りの装いだった。
「いやあ、あの子は作ってくれると言ったんだが、この歳で仮装は少々照れくさくてね、遠慮したよ。それに近頃二人して膝がなあ、商店街まで行くのも億劫なんだ」
「ああ、それは仕方がないですね……」
彼が少し気まずそうにしていると、お盆を持ったシーザーと三隅夫人が居間へと入ってきた。

「あ、お邪魔してます」
「いらっしゃい、シーザーの為に来てくれてありがとうねぇ」
「おばーちゃんこんにちは！　おかし？　おかし？」「こーら」
　二人の持つ何かに興味津々で尻尾をピンと立てたクーをチビ助が窘めていると、お盆を持った二人はクスリと笑う。
「うふふ、さあみんな。ハロウィンでお菓子が欲しい時は何ていうのかしらぁ～？」
　三隅夫人が楽しそうにそう言うと、クーとチビ助は顔を見合わせ。
『トリック・オア・トリート！』

ハロウィン特別編　けものとヒトのハロウィン祭り　2

三隅夫人とシーザーによる手作りカボチャプリンを堪能した後、四人はそれぞれの身支度を整えて三隅家を出発した。

商店街への道すがら、シーザーの手作り衣装を身に着けた一同は、本人らの容姿も相まって中々に様になっていると久遠は感心する。

クーが身に着けた着物は黒地に赤の肉球模様が裾から上へと螺旋状に連なる模様が色鮮やかで、中々いい生地を使われているらしい。

動きやすさを重視してか丈がやや短いものの、寒がりの彼女を考慮してか足元は温かいタイツで覆われていた。

「んふふー、かわいい？　かわいい？」

嬉しそうに身に着けた着物を見ながらくるくると回るクーに、製作者であるシーザーも満足げだった。

「うん、似合ってる。……和装も縫えるんだから凄いなぁ」

「ふふ、奥さまは元々和裁のお仕事をやっていたそうなので、実はわたしが習っているのも主に和裁なんです。生地は奥さまが趣味で集めているものからクーちゃんに似合う

ものを選んでいただきました」
「うはー、コレクションの生地とかいいお値段しそうだな……なんかお返し考えとかないと。ところで、これって何の仮装なんだ？」
　可愛らしい着物姿ではあるもののこれといった仮装要素が見当たらず首を傾げる久遠に、クーはにししと笑った。
「ネコマタ！　ほら、しっぽー！」
　そう言って片足を上げ両手を丸めた猫のポーズを取りながらクーが背を見せると、彼女の自前のものとは別にもう一本長い尻尾が垂れ下がっていた。
　帯にくくりつけられる形なので、外せば普通の着物として使えるようにもなっている。
「なるほど、尻尾を増やしてネコマタね。んで、チビ助の方は……」
　久遠がクーの隣へと視線を移すと、チビ助は金剛杖を手に自らの格好を見下ろす。山伏衣装に手作りの翼を背負ったその姿は。
「カラス天狗、だったかしら。あの時会ったカラスの格好よね？」
　そう言って彼女が思い浮かべたのは例の大騒動の最中に出会ったヤタガラスの使者の片割れだった。
「はい、同じカラスですし、何より格好よかったので！」

久遠は直接見ていないが、錫杖を片手に大型の怪物を退治する姿はさながらヒーローのようだったとクーから聞かされていた。

錫杖がなかったためか手に持っているのは三隅夫妻が昔お遍路で使った金剛杖であったが、その中々の再現度に久遠は舌を巻く。

「本人曰く天狗じゃなくて妖怪烏らしいけど。中々様になってるな」

「本物に背中の羽は付いてなかったし、下駄ももっと長いやつだったけど。かなり良くできてると思うわ」

「うんうん、かっこいーよね！」

口々に飛び出す賛辞にシーザーの頬は紅潮し、背中で隠しきれないほどにブンブンと尻尾が左右に揺れていた。

「えへへ、ありがとうございます！　ただ、その分くおんさまの衣装にかけられる時間がなくなってしまいまして……」

そう言うと尻尾の揺れが収まり、少しだけシュンとなってしまう。

久遠は彼女に頼まれて持ってきた高校時代の詰め襟と学帽――着用自由だった為ほとんど着たことはないが――の上に羽織ってほしいと渡された黒い外套を身に着けている。

彼は三人を見渡す。ネコマタの仮装のクー、カラステングの仮装のチビ助、そしてケ

ルベロス（？）の仮装のシーザー。
（……ひょっとして、ラ〇ドウのつもりなのかなこれ）
ふとそんな事に気づいた久遠は苦笑する。
数ヶ月前、テレビゲームに興味を持った彼女へ使わなくなって久しい旧世代のゲーム機をソフトごとまとめてプレゼントしたのだが、渡した中にこんな格好の主人公が悪魔を味方にしながら戦うものがあったのを彼は思い出したのだ。
（三隅さんたちとパーティゲームで遊んだってのは聞いてたけど、意外とこういう系のゲームもやるんだな）
きゃいきゃいと楽しそうに戯れる三人を率いながら久遠はいつもの商店街へ向けて歩みを進めた。
※
クラシカルな魔女の仮装をしたカラスのフレンズ――箒に腰掛けている風に見せる姿勢の維持が辛いのかプルプルと震えている――が頭上を飛ぶ姿を眺めつつ、久遠たちは商店街へと足を踏み入れた。
「思ったより客入り多いわねぇ」
カラフルな衣装に身を包んだヒトやフレンズの群れがごった返す商店街を見渡して、チビ助が感心したように言う。

「フレンズもヒトも基本お祭りが好きだからなぁ。クー、慣れた場所ではあるけどはぐれないようにな」
「はーい！　おっかしー、おっかしー☒」
「言っとくけど、大したものは貰えないわよ」
貰えるお菓子への過剰な期待でウキウキした様子のクーに苦笑しつつ、一同はイベントをやっている場所まで歩みを進める。
「はえー、結構みんな凝った衣装着てますねぇ」
周囲をキョロキョロと見渡して他の仮装客を眺めながらシーザーは感嘆の息を漏らした。
ヒトもフレンズも一緒くたになって様々な仮装をしており、定番のお化けのコスプレをはじめとしてアニメ等のキャラクターの仮装、そしてフレンズのコスプレ――本物を借りて着ている者もいそうだ――をするヒトや、衣装を交換したらしいフレンズの姿も見受けられた。
「既製品の衣装も出来のいいのがあるからなー、シーザーみたいに和装を自作してるガチ勢とかそうそういないと思うよ」
「そうでしょうか？　でも、来年はもっとスゴいの作ってみせます」
「あんまり変なのはやめてね。……あら？」

そんなチビ助の声を皮切りに、一同は道端に大きな人だかりができているのを発見する。
「あれ、お菓子配ってるのはもう少し先でしたよね？」
シーザーが小首を傾げる。
「となると、何か出し物でもやってるのかもな」
「うにゅにゅ、おかし……でも、気になるから見にいこ！」
お菓子への欲望に後ろ髪を引かれつつも好奇心を発揮したクーに連れられて一同が人々の輪に加わると――。
「……うえっ!?」
久遠は目の前の光景に思わず妙な声を上げる。
近頃の彼はもはやちょっとやそっとの出来事では驚かない自信を持っていた、なにせ擬人化した動物から始まり、神様から怪物、陰陽師やその式神と、短期間で様々な奇妙なものを見てきたことで耐性を得たつもりでいたのだが。
「あソレソレ！」「ソイヤソイヤー！」
人だかりの中心では、細い手足を生やした真っ赤な二体の達磨がくるくると踊ってい
た。
片方は久遠の胸ほどの背丈で、もう一体は膝ほどの背丈しかなく明らかにきぐるみな

どではない。
大きい方の達磨がぽふんと煙に包まれると、今度は大きな番傘を持った信楽焼のたぬきが大きな達磨のいた位置に立っている。
たぬきが傘を広げて回し始めると、小さな達磨が大きく跳躍し傘へと飛び乗る――とその姿はいつの間にか鞠へと変わっている。
「はいぃ、いつもより多めに回しておりますぅ」
眠たげな少女の声で決まり文句を言いながらコロコロと器用に傘回しをする信楽焼――よく見ると時々傘から転げ落ちた鞠が自力で傘へ戻っているように見えるが――の姿に、観客たちは思わず拍手を送っていた。
「やー」というちょっと気の抜けた掛け声とともに鞠は高く跳ね上げられ、そして地面に落ちる寸前にぽふんと一際大きな煙を上げ信楽焼もろとも覆い隠し――次の瞬間ブレザー姿の少女と黒の長髪で和装の女性の姿に変わっていた。
少女の頭部にはピンと獣耳がそびえ立っており、灰色字に白い模様の入った髪型からして――。
「どうもぉ、タヌキの変化ショーでしたぁ」
「どうぞ、おひねりはこちらへお願いしまぁす」
へにゃりと笑ってお辞儀する女性の横で、ザルをもったタヌキの少女が拍手を送る観

客たちからおひねりを集め始める。
（……なるほど、タヌキのフレンズか。フレンズ化すると変化までできるとはサンドスター恐るべし）
　そんな事を思いながら久遠が財布を取り出していると、目をキラキラさせたクーが女性に駆け寄っていた。
「こんにちは！　すっごくすごかったよ！」
「あらどうも、楽しんでくれたようで嬉しいわぁ」
　いきなり近付いてきたクーに対しても女性はにこやかに対応する。
「あの、変身するやつってどうやるの!?」
「ふふ、今の嬢ちゃんにはちょっと難しいわぁ。まあ、猫やったら二十年くらい生きればできるようになるかもー？」
「そうなんだー」
　そんな風に言って笑う彼女に、残念そうにうなだれるクー。
「そっちのぽん吉はこの姿になってようやく化けられるようになったんよねぇ。豆狸未満の若造でもここまで化けられるんやから、ほんま流星の力はスゴいわなぁ」
　そんな事を言っていると、一通りおひねりを集め終えたらしいタヌキの少女――ぽん吉――が会話へ混ざってくる。

「とはいえ、オイラは今の姿から背丈の違うもんには化けられんから。はよう姐さんみたいに化け上手になりたいわぁ」
「ふふ、ならもっと修行せななぁ。……それじゃ、そろそろウチは山へ戻るけど、ぽん吉はどうするん？」
「うーん、せっかくやしちょっとだけ街を見て回ってから帰るわぁ」
受け取ったザルの中身を唐草模様の風呂敷へ包んで首に巻きつける女性に、ぽん吉は少し考えてそう言った。
「そか、ほな先帰ってるから車に轢かれんよう気いつけて帰りなぁ」
彼女はそう言うと、クーたちへ向き直って微笑む。
「変化ショーは定期的にやるから、お客さんらも見かけたらまた見たってなぁ。ほな、ウチはこれにてどろん！」
そんな言葉とともに女性の姿は煙に包まれ、煙の中から風呂敷を首元に巻き付けた一匹の狸が飛び出し山の方へと駆けて行った。
走り去っていく狸の姿に、遠巻きにそれを見ていた久遠はしばしフリーズする。
「……えっ、フレンズじゃなくてマジモンの妖怪の方？」
やがて久遠は呆然としてポツリとつぶやく。
その横ではシーザーが何やら少し感動した様子で小さくなってゆく狸の後ろ姿を見

送っていた。
「わあ、わたし本物の妖怪さんを初めて見ちゃいました！」
「へえ、タヌキが変身するのってホントなのねえ」
チビ助が先日皆で見たＤＶＤを思い出して一人納得する。
（……というか、ドロンといいつつ普通に走って帰ったな）
オーバーフロー気味の脳みそでそんなどうでもいい感想をこぼしながら、久遠は三人を連れてイベント会場へと足を進め始めた。
※
イベント会場でひとしきり他人のコスプレを見物し、ついでに買い物も済ませた四人は帰路についていた。
「今日はスゴかったねー！　タヌキのおねーさんに聞いたらクーも長生きしたらできるようになるかもだって！」
イベントでもらった小袋を手にそう目をキラキラさせるクーは、珍しくお菓子ではなくその前に見た変化ショーにご執心だった。
『あの日』の出来事以降、常識が大きく塗り換わったこの世界ですらなお奇妙に感じた光景に久遠自身も衝撃を受けている。
「猫が二十歳まで生きたら『猫又』って妖怪になると言われてる。迷信だって言われてた

けど、案外ホントになれるかもしれないな」
「二十歳かぁ、えーと……いまクー何歳だっけ?」
「もう、五歳でしょ。自分の年くらいは覚えておきなさいよ……。二十歳ならあと十五年後、結構遠いわねえ」
チビ助の言葉に、一同は「十五年かぁ」と未来へ思いを馳せた。
人間の小さな子供も大人になるような年月は、寿命の短い生き物にとってはあまりにも遠い。
「クーちゃんがその歳になる頃、みんなどうなってますかねえ……。わたしももう犬的にはおじいちゃん……おばあちゃん? ですし」
「実際、こうなったあたし達がどれくらい生きられるのかまだ分からないのよねぇ。ただのカラスと同じなら割とギリギリかも」
そんな二人の言葉にクーは驚いたように目を潤ませる。
「え、えーっ! みんな死んじゃヤダよ!」
「……サンドスターの力が確かならみんなは若いままじゃないかな。僕はおっさんになってるけども」
ひしと抱きついた彼女に、シーザーはよしよしとその頭を優しく撫で付ける。そんな様子を見て久遠は苦笑する。

「ま、そんな遠い先の事で泣いてもしょうがないでしょう、ホントにネコマタになるのかも分かんないし。こう言うのなんていうんだっけ、ええと、捕らぬタヌキの……皮、算用？　だったかしら？」

「この場合使い方合ってるのか？　それにしても実際タヌキと会った後で使うにはちょっとアレな言葉だな……」

そんな事を話しながらも、四人は帰り道を進んでゆくのであった。

数年後、彼らも見知った一人の猫のフレンズが猫又となってちょっとした騒ぎになるのはまた別の話。

クリスマス特別編　聖夜の買い出しにて

切りつけるような真冬の風にも負けず、町中が活気づいていた。街路樹や建物に雲に覆われた星々の瞬きに取って代わらんとばかりに華々しく煌めいている。

――今宵は聖夜、クリスマスその日である。

「今年は一段と華やかよねぇ、どこもかしこもキラキラしてるわ」

「去年はまだ発電所の復旧が終わってなかったし自粛ムード抜けてなかったからな。むしろやっといつも通りになったって感じだ」

壁面で手を振る大きな電飾のサンタクロースをしげしげと眺めるチビ助の真下で、久遠は缶のポタージュをズズッとすする。

彼がそっと視線を上げれば、スカートの下には飛行を前提としたインナーが履かれておりもはや彼女の下半身は飛行中でも無防備を晒したりはしない。

教育の成果に嬉しいやら残念やら複雑な思いを久遠は抱く。

「ね、それ少しちょうだい。寒くなっちゃったわ」

そんな邪な考えなどお構いなく、彼の横に降り立ったチビ助が小首を傾げながらおね

だりをした。
　彼女は無意識的に自身の魅力を引き出す構図を心得ているらしい。久遠は苦笑いを浮かべつつ缶を差し出す。
「冷たい飲み物選ぶからだ、そりゃ冷えるわ」
　飲み口から湯気の立つ缶を受け取ると、チビ助はその温度を楽しむように手の中で転がし、はにかんだ。
「だって好きなんだもの……んっ！」
「火傷するなよ。って、こらこら飲み過ぎ！　ったく……」
　口をつけると同時に頭の翼をピンと広げた様子を心配したものの、彼女は何事もなかったかのように二口三口と喉を鳴らす。
　ずいぶんと軽くなったそれを取り返すと、久遠はため息を一つついて残りを煽った。最後に残った粒を吸い込むように口へおさめると、空になった缶をゴミ箱へ投入する。
「さあ、そろそろ買い物を済ませちゃいましょう。そろそろ飾り付けも終わってる頃じゃないかしら？」
「どうだかなー、手伝ってくれるシーザーはともかく肝心のクーが割と酒落にならないレベルのぶきっちょだし」
　クリスマスパーティとやらをやってみたい、なんて言い出したのは他ならぬクーであ

る。去年もイチゴのショートケーキとケンタのチキンでささやかなクリスマスを楽しんではいたが、どうやら更に上をお望みらしい。

自ら飾り付けを買って出た彼女を尊重し、手伝いに来てくれるシーザーとともに家を任せて料理の買い出しに出てきた二人。

「そこは信じてあげましょう。それより、予約したケーキはどんなかしら！　実は私、楽しみにしてたの」

「カタログで見ただろ。サンタのマジパンが乗ってるやつ」

「それはそうだけど、実物が早く見たいのよ」

そう言って目を輝かせる彼女に、朝からそわそわしていたと思ったらそういう事かと久遠は苦笑する。

「先にチキンと飲み物な、ケーキは最後。崩れたら台無しだし」

「分かってるわ。だからね、早く行きましょ」

「うぉ、押すなって！」

『本日はご来店まことにありがとうございます。今夜だけのスペシャルゲスト、トナカイさんの飛行ソリショーはこの後１７時３０分、南館屋上にて開催となります。グルメエリアではクリスマスの特別メニューをご用意しておりますので……』

そんな素っ頓狂なアナウンスが聞こえたのは、二人がショッピングモールの食品コーナーをぶらついていた時であった。

館内アナウンスを半ば聞き流していた久遠だが、その珍妙な告知を聞き漏らすことは流石にできなかった。

「……は？　今、トナカイがソリで滑空とか言ってなかったか？」

「言ってたわね、それがどうかしたの？」

「いや、まずトナカイは空飛ばねぇし。こんなところに連れてくるくらいだからフレンズ化したやつだろうけどそれでも飛ぶとか聞いた事ないぞ」

首を傾げるチビ助に久遠が困惑したようにそう言う。

「え？　トナカイってサンタクロースを乗せたソリを引いて飛ぶものなんじゃないの？」

「それは空想上の事で……いや、もしかしてサンドスターはそんなことまで出来ちまうのか？」

動物から果ては神や妖怪まで人間の少女の姿に変えてしまったり、小さな翼で空を飛ばせたりと様々な不可思議現象を起こすサンドスターのこと、聖夜にトナカイを飛ばす位のことは出来てしまうのではないかと久遠は思い直す。見たい、超見たい。

「んー、そんなに気になるなら見に行ってみる？」

「良いのか？　少し遅くなるかもだけど」
「ちょっとくらい良いでしょ、買い物は手早くしなきゃだけどね。ほら南館はあっちよ、行きましょ！」
　上機嫌なチビ助に手を引かれ、久遠は目的の南館へと歩みを進める。アナウンスの効果か、同じ方向へ向かう親子連れやカップルなどの姿がいくつも見えており、これは混みそうだと彼は思った。
「そこの鳥のフレンズの皆様、館内での飛行は大変危険ですのでおやめください！」
「ほら、やっぱり怒られたじゃん！」
「えー、だって飛んだほうが早いよー？」
「壁にでっかく貼られてるよね、飛行禁止って」
　そういった中には当然フレンズたちの姿もあり、彼女らの奔放な振る舞いに警備も忙しそうにしている。その警備員の中にも警備帽から獣耳がはみ出た女性――フレンズが混じっている。
　ある日突然降って湧いた彼女らも、すでに街の一部として溶け込み始めている。そんな実感を抱いた久遠は、何となくチビ助の横顔に目をやった。館内の暖房に当てられてか頬がやや上気していた。
　その視線に気づいたチビ助は嬉しそうに頭の翼をはためかせる。

「……うん？　どうかした？」
「いや、なんでも。フレンズの子らもずいぶん馴染んだなって」
「そりゃあ、ヒトもけものも変化に慣れていくしかないもの。去年辺りはかなり騒がしかったけどね、法律とかなにかで」
「だなぁ……まだまだ行き届いてない感じはするけど」
「それは仕方ないわ、私たちもフレンズスクールで知識を詰め込まれてるけど追いついてない子多いもの。ヒトが決まりを定めても、けもの側がそれに沿えないと意味がないわ。ああやって働ける段階まで行けてる子はまだ少ないみたいだし」
　そう言って、チビ助は頭の翼を脱力させてため息をついた。
「私もそろそろ就業の許可が降りるとは思うんだけど、枠がまだ少ないのよね……ホント面倒だわ」
「仕方ないさ、まだ様子見の段階だし。別に無理して働かなくてもいいと思うけど」
「ダメよ。アナタがバイトちょっと増やしたの知ってるんだから」
「んー、まあ、無理をしない範囲で頑張ってくれ」
「ふふ、任せて」
　図星を突かれた久遠がしどろもどろになるのを、彼女は得意そうに翼を広げて笑った。

「皆様、大変長らくお待たせいたしました！　本日はクリスマスと言う事で、スペシャルゲスト！　○○動物園よりトナカイのサンタさんをお呼びしております！」

南館の屋上にある広い休憩スペースに二人が到着すると、丁度イベント開始のアナウンスが司会によって告げられた。

「丁度良いタイミングだったかしら。でもヒトが多くて見辛いわね」

「結構ギリギリだったからな。しかしトナカイなのにサンタか……」

人の間をすり抜け舞台がそれなりに見える位置に到着すると、準備が出来たとの報告を受ける司会の姿が見えた。

「……さて、ソリの準備の方が整ったようです！　それでは皆さんご一緒に、大きな声でサンタさんを呼んでみましょう！　せーの！」

『サンタさーん!!』

小さな子どもたちとその親が中心となり――久遠は隣からしっかりとコールする声を聞いた――名前を呼ぶ声が会場を響き渡ると同時に、舞台に設置されたスピーカーからはシャンシャンという連続した鈴の音とクリスマスソングが再生され始める。

黄色い歓声に迎えられながらフェンスの向こう側から電飾に飾られた大きなソリがふわりと浮かび上がってきた。

『はーい、皆さんこんばんわー！　トナカイのサンタでーす！』

照明に照らされ、弾けるような笑顔で手を振る一人の少女。その頭にはいくつにも枝分かれした立派な角が生えており、胸元に大きなベルをあしらった真っ赤なサンタ服を身に纏っている。

彼女はソリの座席に座り、片手で手綱を握っていた。その手綱の先には――。

「ふんぬーっ！」「ちょ、後ろ下がって来てるわよ！」「お、重い……！」「ごめん、割と限界が近い……！」

――トナカイの角が生えたカチューシャの横で必死に翼を羽ばたかせてソリを担ぎ飛ぶ四人の鳥類のフレンズの姿があった。

『わっせ！　わっせ！　よいせ！　よいせ！』

掛け声を合わせながらゆっくりゆっくりと舞台までやってくると。

『よいしょおーっ！』

と、威勢のいい声とともに神輿……ではなくソリを舞台上に下ろすのであった。

いい運動をしたとばかりに紅潮した頬の汗を拭うトナカイ役の彼女ら、それに労いの言葉を掛けるサンタ役のトナカイを見て、久遠を含む観客の多くは思った。

――思ってたのと違う。

「結構面白かったじゃない」
「うん、まあ面白かったのは確かだけど、ある意味」
一部の微妙な反応もなんのその、トナカイたちは無邪気な子供の参加者たちと楽しそうに握手をこなしては大きな袋からお菓子を取り出して配り、イベントは盛況のうちに終了した。
小袋を片手に上機嫌なご様子のチビ助と、子供向けに配られていたそれを当然のように受け取りに行っていた彼女に苦笑を浮かべる久遠は、買い出しを終えて帰路についている。
「予定よりちょっとだけ遅くなっちゃったかしら」
「ま、誤差の範囲内だな。飾り付けも終わってるだろうし……寒っ」
不意に冷たい風が吹き付け、久遠は思わず身を強張らせる。
「指先が冷てぇ……」
「手袋しないからよ、今日は冷えるって言ってたじゃない」
「締め付けられる感があるから手袋は好きじゃないんだよな……」
ケーキの入った紙袋を握る彼の手に力が入る——その手を、チビ助の手がそっと包み込んだ。
「ホントだ、すっごく冷たい」

少し驚いたような顔をする久遠に、チビ助は得意げな笑みを浮かべる。
「ほら、体温高いから暖かいでしょ」
「お、おう……あ」
照れたような笑みを返す久遠の鼻先に、冷たいものが一粒落ちた。
それに気付いた二人が空を見上げると……まばらながら、雪が振り始めている。
「ホワイトクリスマスっていうんだっけ、こういうの」
「そうだな……」
暗い夜空から舞い降りアスファルトへ落ちては消えていく雪に、二人はしばし見とれた。
「……さ、みんな待ってるし帰ろっか」
「ああ、ケーキを待ちわびてるだろうし」
そう言って二人は帰路を少し急ぎ始めた。
そっと繋がれた手はそのままに。

クリスマス特別編　聖夜のおうちパーティ

「うぃー、いっしゅ　はメリクリスマス♪　うぃー、いっしゅ　はメリクリスマス♪　あだーはっぴー、にゅー……にゅ～……にゃあ？」
「惜しい、〝ハッピー・ニューイヤー〟ですね」
「えへっ、はっぴーにゅーいやーっ♪」
少し間違ったクリスマスソングを楽しげに歌い上げる声が響く。
久遠とチビ助の二人が買い出しに出ている間、自宅ではクーとシーザーの二人によってクリスマスパーティの準備が進められていた。
色とりどりの折り紙を切り貼りして作った、クーお手製のカラフルな鎖が部屋中から――やや過剰な程に――垂れ下がり、リビングの中心には大振りなクリスマスツリーがそびえ立っている。
箱から取り出した装飾を楽しそうにツリーへと括り付けてゆくクーを眺めながら、シーザーは調理を続ける。出来上がったスープを小さじで掬ってすすると、小首を傾げた彼女の頭頂部から生えた獣耳もまた思案するように半回転した。
「うーん、もう少し味が濃くても良かったかもしれませんね」

「あじみー!?　クーもあじみするっ！」
「それじゃあお願いしますね。……どうですか？」
そうやって飛んできた彼女にシーザーが掬ったスープを差し出すと、ニコニコ笑顔のクーはしなやかな白い尻尾をぴんと立てながら「おいしー！」と笑った。
「ふふ、よかった、ありがとうございます。それより、クリスマスツリーの飾り付けの方はどうですか？」
「あとはおほし様をつけるだけだよ！　でもちょっと手が届かなくて――」
彼女が元気に返答するとほとんど同時に、玄関からガチャリと解錠の音が響いてくる。
「ただいまー」「ただいま、うーっ、寒い……」
「おっかえりーっ！」
久遠たちの声を聞くやいなや玄関へと飛んでいったクーに苦笑しつつ、シーザーは居間にそびえ立つクリスマスツリーへ目を向ける。
本来ツリーの最上段に鎮座するはずの金色の星飾りは、寂しそうに床に転がっている。
星野家の物置で埃を被っていたクリスマスツリーは家庭用にしては背が高い２ｍ程のものだ。横幅や飾り付けもあって、一番背丈のある久遠であっても直立状態で乗せる

のはかなり苦労するだろう。
（横に傾ければ……せっかく付けた飾りが落ちちゃいそうですね）
「早くストーブに当たりたいのにぃ……」
「ふーっ、部屋があったかくて助かる……」
彼女がそんなことを考えていると、久遠たち二人が外の寒さに身を震わせながら居間へと入って来る。
彼らに半歩遅れて、二人から受け取ったケーキの箱を掲げキラキラした目で眺めるクーもまた居間へと戻ってきた。
「二人ともおかえりなさい、ちょうど準備ができたところです」
「ただいまシーザー、料理任せちゃって悪いな」
尻尾をちぎれんばかりに振りながら出迎えたシーザーに微笑み返し、外した防寒具を纏めてソファへと掛けつつ久遠が言う。
外気の冷たさゆえにその鼻や耳まで赤くした彼に、シーザーはくすりと笑う。
「いえいえ、わたしも楽しんでやっていますので！」
「ただいまぁ……それで、星は？　ちゃちゃっと飾っちゃいましょ」
胸を張りながらそう言うシーザーの横を通り抜けつつ、チビ助が防寒具もそのままにツリーへ視線を向ける。防寒着で全身もこもことなった彼女もまた、冷えきった白い肌

を部屋の暖気に赤らめていた。
「あっ、これだよー！　おねがーい！」
名残惜しそうにケーキをテーブルに置いたクーがトテトテと駆け寄り、床に転がっていた星飾りを拾い上げてチビ助に差し出す。
メッキが施され金色に輝く星が室内の照明を照り返してキラキラと輝いていた。
「んもー、届かないのわかってるんだから最初につけなきゃ」
「だってー、いちばん最後のしあげにしたかったんだもん」
「はいはい。うーん、そうねぇ……よっ、と」
彼女は少し考えたあと、星を受け取らずにクーの背後に回り
そしてその小柄なクーの身体をしっかりと抱き上げた。
「わっ、どうしたの？」
急に抱きしめられて驚くクーに構わず、彼女は「いくわよ」と小声で呟いた。次の瞬間、キラキラとした虹色の粒子を周囲へと散らしながらチビ助の艶やかな黒髪に混じって生える小さな翼が羽ばたく。
二人の体は重力から解き放たれたように少しだけ浮かび上がり、ツリーの上部、その目の前へとやってくる。
「さ、仕上げは頼んだわよ」

「えへへ、ありがとうチーちゃん！　よい、しょっと、完成!!」
そう言ってクーが先端に星の飾りをぐっと押し込むと、大きな大きなクリスマスツリーは見事に完成した。
お手製の色紙の鎖に加え１００円均一で買ってきたクリスマス飾り、そして予備も含めたすべての飾りを取り付けられたクリスマスツリーと随分ときらびやかになった室内を見てストーブの前に座る久遠が笑みを浮かべる。
「おー、飾り付けもしっかり完成したな」
「でしょでしょ！　がんばったんだよーっ」
尻尾と耳をピンと立てながら誇らしげに胸を張るクーを床へ下ろし、防寒具を着けたままのチビ助はストーブの前を陣取る久遠をグイグイと体で押す。
「うー、寒い寒い……ちょっと場所あけてちょうだい」
「はいよ、いやほんと寒いな……」
ストーブの前で身を寄せ合いながら寒い寒いと震える二人を見て、シーザーはくすりと笑う。
「くおんさまにチビ助さんも。ストーブもいいですけど、早くごはんにして出来たての暖かいスープで温まりませんか？」
「うーっ、そうね。お腹もすいたことだし……」

「クーもお腹すいたー！　ケーキ♪　ケーキぃ♪」
ケーキの前で歌いながらはしゃぐクーの姿に、三人は苦笑する。
「……クーも待ちわびてる事だし、さっさとご飯にしちゃうか」
「賛成。あー、ストーブが名残惜しい……」

※

久遠が部屋着に着替えて居間へと戻ると、すでに食事の準備は整っていた。防寒具を着たままだったチビ助すらも既に着席している。
テーブルには久遠たちが買ってきたまるごとのローストチキンのような出来合いのおかずに加えて、シーザーが作ったスープ等の副菜が所狭しと並んでおり、未だ箱に包まれたホールケーキにはクーを始めとした皆の熱い視線が注がれていた。
「お待たせ。さあ、みんな待ちかねてるようだし……」
そう言って久遠はケーキの封を破り、中身をそっと引きずり出し始める。ゴクリ、とだれかが生唾を飲み込む音から響く中、箱の端からその純白が姿を覗かせる。
生クリームホイップによる華やかな装飾を超え、純白に映える瑞々しく赤いいちごが組む円陣が見え始めた。
ホールの半ばに差し掛かると、大きな袋を片手に微笑むマジパン製のサンタクロース

が姿をあらわにする。
テーブルを囲む三人から上がる黄色い声を受けながら、お高いホールケーキはその全容を明かした。
「ふわーっ、すごく綺麗です……」
「サンタさん！　かわいーっ！」
「ろうそく！　ロウソクつけましょう！」
興奮した様子の三人に促されながら久遠は付属のロウソクを等間隔に配置し、ライターによって火を灯した。
三人の感嘆の声を聞きながら、奮発していいホールケーキを買って正解だったと満足気に頷いた。

「むふー、ごちそうさまっ！」
最後に取り置いていたケーキのいちごを口に放り込んで、クーは満足気な様子で笑顔満面のまま毛繕いを始める。
「ごちそうさま、シーザーの作ってくれたスープ美味しかったわ。あれ、何ていうやつなの？」
「えへへ、それはですね……」

食事を終えて各自楽しそうに話し合う中、久遠はそっと居間を抜け出して自室へ戻るとクローゼットを開けた。
丈の長い冬物衣類の足元に隠すように置かれた物を抱えると、彼は足取りも軽く居間へと戻る。
戻ってきた彼の足音に耳をピクリと動かして反応したのは毛繕いを終えたクーだった。彼女は戻ってきた久遠を見て目を丸くする。
「あれ、にーちゃどうしたのそれ!?」
そんな素っ頓狂な声に反応した残りの二人は振り向くやいなや、サンタ帽と白い付け髭をした彼の姿に愉快そうに笑った。
「あはっ、何そのヒゲ～」
「ふふ、くおんさまがおじいちゃんになっちゃいました」
くすくすと笑う二人に少々照れくさくなりながらも、久遠はこほんと一つ咳払いしながら姿勢を正す。
「はい。この一年間いい子にしていたみんなに、久遠サンタからのささやかなプレゼントだ」
そう言って、彼が居間の扉の裏へ隠していた物を差し出すと、三人はきゃあと嬉しそうな声を上げてそれを受け取った。

「ありがとー！　ねね、あけてもいい？　いいよね！」
「ああ、いいよ」
頷く久遠に、クーはいの一番に一抱えもある大きな包を開封する。
中から出てきたものに、彼女は目をキラキラと輝かせた。
「ひゃーっ！　ジンベイザメだーっ、にーちゃありがとう!!」
それは彼女が抱いて寝るのにちょうど良さそうなサイズの、大きなジンベイザメのぬいぐるみであった。
少し前にテレビでやっていた水族館の特集で目にして欲しがっていた物である。
「ええと、わたしのは……わっ、新作のゲームソフトですね！」
シーザーが袋を開けると、彼女が気に入って遊んでいるゲームシリーズの最新作が入っていた。
「ありがとうございます！　……ああでもどうしましょう、これうちにあるゲーム機で動きますかね？」
そのソフトは近年出たばかりの最新ハードの作品であり、彼女が以前久遠から譲られたゲーム機には対応していない。
しかし、それは久遠も承知の上である。そして彼女にクリスマスプレゼントを用意しているのは彼だけではないのだ。

「はは、それは帰ってのお楽しみ。帰る頃には三隅さんたちも外食から帰ってきてるだろうし、ね」
久遠の言葉に首を傾げつつも、シーザーはプレゼントを大切そうに自分のリュックサックへと仕舞い込んだ。
「ええと、あたしのは……と」
チビ助が小さな袋の梱包を丁寧に剥がし、中身を取り出す。
ちゃら、と細かなチェーンが音を立て彼女の掌へと転がり出た。
「これは……なにかしら？」
――それは、キラリと光る小さな石を咥えるカラスがデザインされたシルバーのネックレスだった。
「ネックレス、首に付ける飾りだよ。みんなが喜ぶプレゼントは何がいいかなって思いながら街を歩いてたら見かけてさ。〝あ、カラスのデザインだ〟って目を引いて……」
キラキラと光る石――さして価値がある石というわけではないが――を光にかざして眺める彼女を見ながら久遠は頬を掻く。
「……気に入ってくれるといいんだけど」
くるくると角度を変えながら手元でひとしきりそれを眺めたチビ助は、小さく笑みを浮かべた。

「キラキラしてて綺麗ね……ありがとう。せっかくだし、着けてもらってもいいかしら？」

「着け方が分からないの」とはにかむチビ助からネックレスを受け取ると、彼はそれの留具を外して両手で広げる。

久遠が短くも艶やかな黒髪をそっとかき上げながら待つ彼女の白く細い首元に手を回すとき、ふと二人の視線が合った。

ぱちくりと瞬きをして笑みを深める彼女に、久遠は少し照れ臭く思いながら笑い返してネックレスの留具をしっかりと留める。

「チビ助さん、よくお似合いですよ」

「チーちゃんかわいー！」

ちゃり、と首元で揺れる銀色のカラスをまわりに誇示しながら、チビ助は頭の翼を嬉しそうに弾ませて笑みを浮かべた。

「ありがとう、大事にするわ」

その笑顔があまりにも眩しくて、久遠はしばし見惚れてしまう。

「……ああ」

はっと気を取り直した彼は、照れ笑いを誤魔化すようにうつむきながらそう答えた。

――クリスマスの夜。

賑やかな笑い声は、月が高く登る頃まで止むことはなかった。